オモイノチカラ

ブナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オモイノチカラ

【Ｎコード】
Ｎ１００４Ｘ

【作者名】
ブナ

【あらすじ】
　とある不思議な力を持つ少女サリア。ある日、彼女が謎の人間たちに攫われてしまう。幼なじみであるカリクは、旅立ちを決意し、彼女を助けに町を発つ。
　彼女の力に隠された秘密は何か。そして、カリクはサリアを助け出すことができるのか。
“心の力”を巡る、ファンタジー。
（以前モバゲーに挙げたものの大幅改変したものになります）

プロローグ『幼き日の記憶』（前書き）

―呼んでる。俺のことを、呼んでる―

プロローグ『幼き日の記憶』

小さな町の中心に、広場があった。真ん中には噴水があり、地面には全面に白のタイルが敷き詰められている。夕焼けの赤に染まっていた。昼間は賑わうこの場所も、親と一緒に子供たちが帰りだす時間となると、人影はまばらだった。

子供たちが帰っていく中、噴水の前に、まだ五歳に届いていない少年と少女がいた。二人も、親の迎えを待っていた。少年の方が口を開く。

「あか。サリアは“か”だよ」

しりとりをしていた。サリアと呼ばれた少女が、口元に手を当てて、考え込む。

「じゃあねわたしはね……」

彼女は長く黙り込んだ。しばらくしてから、隣に座る少年の方を向く。

「どう、カリク？」

少女は少年の名前を呼んだ。しりとりの解答はない。そのはずなのに、

「カラスかー。じゃあ“す”だね」

しりとりが、続いた。少年が一人で勝手に進めているわけではない。しかし、少女はしりとりの返事をしていない。少女は、口に出さずに自分の解答を少年に伝えたのである。トリックがあったわけではない。それが彼女の『力』だったのだ。二人共、まだその異常さに気づいていない。少年は、彼女が他の子供から避けられていることも理解していなかった。子供たち本人の意志ではなく、その親の意志なのだが。

二人の両親ももちろんその異常さを知っていた。ただし他と違っていたのは、彼らはその『力』の正体も知っていることだった。

「ねえ、カリク」

「なに、サリア」
「わたし、このあいだこわいゆめをみたんだ」
少女は不安そうな顔をしてうつむいた。
「どんなゆめ？」
少年が尋ねる。彼女の顔を覗き込んだ。
「ひとりぼっちになったゆめ。カリクといっしょにいたのに、だれかにひっぱられて、なんにもみえないまっくらなところにおいてかれたの」
声が震えていた。思い出した光景が怖ろしかったのか、彼女は自分の身体を抱きしめる。
「だからね、わたし、いまもこわい。くらいとこに、ひとりぼっちになっちゃいそうで」
目に、涙が溜まっていた。
「だいじょうぶ！　そのときは、ぼくがサリアを助けてあげる！」
そんな彼女に対し、少年は立ち上がると、本で見たヒーローの動作を真似してから、大きな声で言い切った。
「ほんとに？」
「ほんとに！　サリアがひとりのときは、ぜったいたすけてあげる！」
「じゃあ、ゆびきりしよう？」
少女が小指を立てて、少年に向かって出した。
「うん！　やくそくするよ」
少年も小指を絡めて応える。
「ゆびきりげんまーうそついたら、はりせんぼんのーます。ゆびきった！」
指を離し、子供たちは笑い合った。それから、しりとりを再開する。
これが、カリク＝シェードという少年の、一番古い記憶だった。

一章『招かねざる者たち』

学生で溢れる放課後の通りで、金髪黒目の少年が空を飛ぶ鳥を見ていた。足を止めて、目で動きを追う。そのうち鳥は見えなくなった。

目標を見失い、カリク＝シェードは前に向き直った。生まれつきの金色の髪は、肩には届いていないが、前髪が目にかかっている。その間から、黒い目が覗いていた。体格はやや小柄。ただし、体つきはしっかりしていて、非力ではない。年齢は、今年で十七になる。高等学校の生徒だった。明日からは夏休みが控えている。

周りの学生が通り過ぎていく中、立ち止まっているのは、人を待っているためだった。ほどなくして、後ろから声をかけられる。

「カリク、何してるの？」

振り返ると、空を思わせるような青い瞳が、カリクの目に映った。同い年で幼なじみである、サリア＝ミュルフのものだった。肩より長い黒髪を風になびかせている。カリクには及ばないものの、女子にしては背丈は高い。穏やかで柔らかい雰囲気を纏っていた。

目の合ったカリクは、うつむき気味になりながら、問いかけに答える。

「ちょっと用事があるから、待ってたんだよ」

「用事って、私に？」

首をかしげたサリアに対し、カリクは頷いた。黒髪の少女が、苦笑する。

「わざわざ帰り道の途中で待たないで、学校で言ってくれればよかったのに」

「帰り出してから思い出したんだよ。だからここで待ってただけだ」

少し、口調を強くする。これは嘘だった。本当は覚えていた。むしろ、一日中頭にあった。

「じゃあ、そういうことにしといてあげるね」

それを察したのか、サリアはもう一度笑った。
「じゃあって……。まあ、いいや。話は帰りながらするよ」
カリクは肩をすくめてから、歩き出した。サリアも横に並ぶ。カリクは、ほんの少しだけ間を空けた。
二人は家が近かった。しかし、最近はあまり一緒に帰っていない。原因はカリクにある。難しい理由ではない。ただ、気恥ずかしいからというだけのことだった。

カリクたちの住む国は、ラスタージ共和国という。世界に三つある大陸の一つにあり、その大陸の中では一番大きい国だった。三方が別の国と隣り合っているのだが、唯一南側は海と面しており、他の大陸との貿易も行われていた。
ラスタージ共和国は五つの都市を中心に発展している。東のニケア、西のルクス、南のレンバー、北のミリシアはそれぞれ東西南北の大都市だった。中央に位置する首都セルゲンティスは、さらに巨大な都市である。
二人が住んでいるのは、ニケアの近くにあるキュールという町だった。

「それで、用事って何？」
サリアが話を振った。黙り込んでいたカリクが、口を開く。
「そのまあ、明日から夏休みだろ」
「そうだね」
「その前に言っておきたいことがあってな。一回帰ったら、“例の場所”に来てくれないか」
「いいよ。帰って着替えたら、すぐ行くね」

「ああ」
カリクがうなずき、また口を閉ざす。サリアが呼びかけてきた。
「カリク、色々話そうよ。最近、あんまり話してないし」
彼女はカリクを真っ直ぐに見つめてきた。口元には、穏やかな笑みを湛えている。カリクは、拒否できなかった。目は合わせずに、頭をかきながら、返答する。
「……そうだな」
「ありがと、カリク」
お礼を言われ、彼は頭をもうひとかきした。
それから二人は、他愛のない話をしながら、家路を歩いた。

カリクとサリアの後方に、人影があった。ポロシャツにジーンズという簡単な私服を着た、二十代くらいの男である。細心の注意を払いながら、二人を付かず離れず追っていた。誰にも聞こえないようにつぶやく。
「あれが今回の任務の目標か。本当に力なんて持ってるのか？」
視線がサリアを捉える。男の目的は、彼女にあった。しかし、続けてカリクにも目を向ける。
「それに、カリクか。あれが、あの人の息子なわけね」
ぶつぶつ言いながら、男は尾行を続けた。

カリクとサリアの家は、すぐ近くだった。先に彼女を家まで送った後、カリクは急いで自宅へ帰った。玄関のドアを勢いよく開けると、
「おお！　帰ったか、カリク」
坊主頭の老人がいた。カリクは一瞬動きを止めてから、おもっきりドアを閉め、ノブを強く握った。内側からガチャガチャと回されるが、必死に抵抗する。

「おい、カリク！　なんでドアを閉める！」
老人が叫び声が中から聞こえてきた。こちらは努めて冷静に返す。
「うるせえよ、ジジイ。今度は父さんに何を頼まれてきたんだ」
「誰がジジイじゃァァァ！」
さらに大きな声が上がった。ドアの内にいる老人は、トルマ＝シェード。カリクの祖父であった。
「だいたい、今日は話をしにきただけじゃ！」
「父さんに頼まれたのは否定しないわけな」
テンションの落差が激しいやりとりは、しばらく続いた。

トルマは、元軍人で現役を退いてからも、数年前までは軍属で、次世代の指導をしていた。カリクの父であるニック＝シェードも軍人なのだが、指導側になる前からトルマは彼に軍人としての教育を施していた。その成果なのか、ニックは現在進行刑でエリート街道を進んでいる。
そんな祖父を、カリクは苦手にしていた。理由は、父が受けた訓練を自分もさせられたからである。時たまやってくるたびに、指導された。幼い頃は疑問も抱かずに従っていたが、成長するにつれて、嫌になっていった。父のことは嫌いでなかったが、彼は軍人になる気などなかったので、祖父の指導が苦痛になったのである。ただ、数年前にカリクは“ある問題”の存在を理解したため、拒否することはなかった。抵抗は、多少するが。

祖父との小さい戦いは、母のマリー＝シェードの介入により、終了していた。結果として、
「まったく。目上をなんだと思っとるんじゃ」

カリクはトルマから小言をもらっていた。
「まあまあ、お義父さん。それくらいにしてあげてくださいな。ほら、カリクも謝った方が早いわよ」
マリーが割って入る。栗色の短髪で、背は女性の平均より低い。物腰は柔らかかった。
「悪かったよ。でも、今日は訓練はなしにしてくれ。友達との約束があるんだ」
母のフォローに乗っかり、カリクはそう訴えた。早くしないと、サリアを待たせてしまう。
「なんじゃ、用事があるのか。それを早く言え。人を待たせるのはよくないからの」
「ありがと、じいちゃん」
引き留めてたあんたには、言われたくない、と思っていたが、口には出さなかった。
「あら、お友達と遊びに行くの？」
マリーが首をひねる。
「まあ、そんなとこだな」
カリクは曖昧に答え、約束の相手がサリアであると、言わなかった。彼女のことは母と祖父もよく知っているので、変につつかれたくなかったのである。
「そう。あんまり遅くならないようにしなさいね」
「それ、高校生の男に言うか？」
「高校生でも子供は子供だもの。男の子は男の子で、危険はあるのよ」
カリクがつっこむも、マリーは涼しい顔で返した。肩をすくめる。ただの男子高校生でも首をひねる言葉なばかりか、彼には普通の高校生と違う部分がある。上の服を被せることで今は隠れているが、脇腹に“それ”はあった。強制的に祖父に持たされているものである。といっても、母は存在を知らないので、それで反論しようとはしなかった。

「とにかく、着替えたらすぐに行くから、話は帰ってからにしてくれ」
「分かったわい。早く行ってこい」
トルマがしっしっと手を振る。カリクは肩をすくめて、自分の部屋に向かった。二階にあるため、階段を上がっていった。

カリクを見送ってから、トルマとマリーが話を始める。
「何か知りませんけど、よかったんですか、先に話さなくて」
口火を切ったのはマリーだった。トルマは肩をすくめてみせる。
「大丈夫じゃろ。約束を破らせるわけにもいかん。帰ってきてから、ゆっくり話す」
「そうですか。なら、いいですけど」
トルマの返答に、マリーはあっさり退いた。別の話題を始める。
「そういえばのう、ニックの奴、首都から遠ざけられたそうじゃ」
「えっ？　どこに行かされたんですか」
寝耳に水で、マリーは目を見開いた。ニックは、トルマの息子であり、マリーの夫である。彼は長く首都軍勤務をしていたので、マリーは他に移るとは思っていなかったのである。
「東都市のニケアじゃ。異例の若さでの少将昇進で、おまけに東軍統括じゃと。我が息子ながら、恐ろしいもんじゃ。裏がなければ、素直に喜ぶとこなんじゃがな」
トルマは、かなり引っかかる言い方をした。マリーが、眉をひそめる。
「裏があるんですか」
「あると見て、まず間違いない。首都から離されたのは、単にニックがいると邪魔だからじゃろう。だからこそ、ニックはわしをここによこしたんじゃ。カリクへの話も、その裏事情に関係することじゃよ」
彼女の問いに、声を落として答える。軍を退役しているものの、上層部に食い込まんという地位にいる息子の存在があったので、そ

こが情報源としていた。ゆえに、かなりきな臭い情報も多く仕入れている。ニックの異動に裏があるとの予測は、そこからきていた。

「ミッドハイムめ。昔から、危うい奴だとは思っていたが」

一人つぶやく。怒りと後悔とが、混じっていた。

声が聞こえたのだろう、マリーは何か言いかけたが、ドアの開閉と階段を駆け下りてくる足の音を聞いて、口を噤んだ。

「なんで二人して、まだ玄関にいるんだよ」

カリクである。制服から私服に着替えていた。トルマたちが、未だに帰ってきたときと同じ場所にいることに対し、首をひねっている。

「ちょっとした立ち話じゃ。それより、早く行け。友達が待ってるんじゃろ」

「言われなくても、行くっての」

トルマと軽口を叩き合ってから、

「じゃ、行ってくる」

カリクは二人の間を通り過ぎた。

「本当に早く帰るんじゃぞ」

トルマに背中から声をかけられ、

「分かってるよ」

カリクは、扉を開けながら応えた。

カリクを見送ってから、トルマがつぶやく。

「慌ただしいのお。誰に似たんじゃか」

「……それ、本気で分かりませんか」

マリーは苦笑いを浮かべた。彼女の反応に、トルマは首をかしげた。

カリクの言う“例の場所”とは、幼い頃サリアと二人で遊んでい

た広場だった。昔は何度も来ていたが、育つにつれてあまり一緒に遊ぶことは少なくなり、今ではまったくなくなっていた。

ただ、それがサリアに対して酷いことだという自覚はあった。彼女はある特殊な“力”を持っていたために、カリク以外の同世代には気味悪がられて近づかれなかったから、カリクがいなければ、独りになることがほとんどだった。また、彼女の両親は子供への愛情が薄く、いい親とは言い難い。ゆえに、もっとそばにいるべきだった。分かっていたのに、気恥ずかしさから避け気味になってしまっていた。彼女への用事というのは、そのことへの後悔も関係している。今更、何をしたところで埋め合わせになるとは思っていなかったが、何もせずにいることはできなかった。

広場に入ると、少し古びてしまっていたものの、今も中央にある噴水が綺麗に水しぶきを飛ばしていた。昼過ぎという時間帯のためか、いつもならたくさんいる子供たちの姿はない。昼ご飯か、昼寝かというところだろうと、カリクはあたりをつけた。

噴水の前には、既にサリアが立っていた。白のインナーに桜色の薄い上着を着ていて、下は白のロングスカートだった。遅れてしまったと思い、走って近づく。

「悪い、遅れた」

まず、謝った。サリアが邪気のない笑みを浮かべる。

「謝らなくて大丈夫だよ。私も今来たとこだから」

「なら、いいけど」

さほど長時間は経っていないので、カリクは信用した。

事実カリクは、サリアの到着からさほど遅れていなかった。そうでなければ、未だに彼らをつけていた謎の男が動いていたから。直前にカリクがやってきたので、いったん止まり、二人から見て噴水を挟んで反対側に移動していた。

「それで、用事って何？」

「あー、なんていうか……」
サリアに促され、カリクは切り出そうとしたが、言い淀む。頭をかいた。幼なじみの少女は、微笑みながら言葉を待っている。

その後ろで、謎の男は携帯に連絡を受けていた。
「もしもし」
『まだ目標は確保できていないのか。できるだけ早くという指示なのは、貴様も分かってるだろう』
耳に入ったのは、固い口調の声だった。ただし、女性のものである。
「分かってるよ。でも、人がいないときでもいいんじゃないですかね。帰り道とか」
男の返事は、いかにも気だるそうだった。敬語も、わざとである。
『“お前がそれでいいならな”』
相手の女が、意味ありげな言葉を返した。
(見透かされてるか)
男はその意味を察し、舌を巻く。さらに女が続けた。
『人払いは、ノーザンが既にしている。奴が暴走を起こさないうちに、さっさとやることをやれ』
「へいへい」
また軽口を返そうかとも考えたものの、男は指示に従うことにした。ただし、
「でも、あと三十秒待って。今、すごいいいとこだから」
すぐに動く気はなかった。
『……勝手にしろ』
呆れ声がして、電話は切れた。男は携帯をしまい、再び少年と少女に関心を向ける。
「さて、早く本題に入らないと、邪魔しちまうぞ」
一人で、つぶやいた。

一方のカリクは、なかなか本題に入れなかった。「えっと……」とか、「その……」を繰り返している。サリアはまったく急かすことなく、穏やかに微笑みながらこちらが話すのを待っていた。ただ、それが余計にカリクから余裕を奪っていたりする。

（早く、切り出さないと）

気持ちは焦るのに、言葉は喉で引っかかって出てこなかった。そうしていると、水をさされた。

「サリア＝ミュルフだな？」

自分たち以外の声に二人は反応し、持ち主の方を見ると、二十代くらいに見える私服姿の男が立っていた。そこで、ようやく広場に自分たちと男以外の姿が見えなくなっていることに気づく。

「誰だ、あんた」

カリクは素早くサリアを庇うように、彼女と男の間に入った。睨みつける。

（突然のことにも、冷静に対処しろ）

祖父からの教えが、頭によぎった。

「へぇ、冷静だな」

彼の対応の早さに、男が感嘆を漏らす。カリクは、何も言わない。

「うちの部下も、これくらい冷静だと助かるんだけどな」

いきなり、関係のないことを口にしてきたが、無視する。

（相手の言葉に惑わされるな）

これもまた、祖父の教えだった。

どうやら男は、脈絡のない話を振って、カリクに動揺を誘うつもりだったようで、頭をぽりぽりとかいた。

「ああ、これも空振りか。いい教育を受けたみたいだな。さっきのは本音だけど」

「生憎、英才教育を受けてるからな」

カリクが軽口を叩く。強気な態度だった。

「さすがに、ニックさんの息子ってだけはある」

「何……！？」

しかし、続く男の発言には、動揺を見せてしまった。瞬間、男の拳が顔目掛けて飛んでくる。
「でも、こっちも仕事なんでな」
「くっ！？」
カリクはすぐ防御のために、顔の横に腕を出した。
「ぐうっ！」
だが、拳の衝撃は予想以上だった。右手側に吹き飛ばされる。
「さあ、サリア＝ミュルフ。俺たちと一緒に来てくれ。素直に従えば、悪いようにはしない」
間に立っていたカリクがいなくなったため、男はサリアに近づいた。懐から、銀色の物体を出す。
「ひっ」
サリアが小さな悲鳴を上げた。男の手にあったのは、小型のナイフだった。それを見て、横に吹き飛ばされていたカリクは、その場で即座に自分の脇腹に隠し持っているものに手を伸ばした。
「サリアに近づくな」
低く、尖った声が出た。彼の手には、黒く光る拳銃が握られていた。
「あらら、ずいぶんなもん持ってるのな。未成年の所持は認めてないはずだぜ」
「強引に持たされたんだ。捕まえるなら、家族の方だな」
「ああ、そうかい。ずいぶんとクレイジーなご家庭でお育ちのようで」
「個人的には女の子を誘拐しようとしてる奴よりも、マシだと思うけどな」
「はっ、そりゃ違いねぇな」
男が苦笑したところで、沈黙が訪れる。男はサリアに対してナイフを向け、彼にカリクは銃口を向けている。状況が膠着した。
（間違いなく、サリアが殺されることはない。怪我をさせられるくらいはあるかもしれないが、それならナイフよりいい獲物がある。

たぶん、あくまであれは脅しのためのもんだろう）
冷静に分析をする。
（つまり）
「ああ、そうか。これ、俺が危ねーじゃん」
思考を、男の言葉が遮った。そして男は、手にもっていたナイフをカリクに投げつけてきた。
「なっ！？」
腹部に向けて放たれた刃物を、彼は反射的に横へ避ける。銃口がぶれた。
（しまっ……）
その隙をついて、男はサリアにではなく、カリクに突っ込んできた。
「実戦経験不足だ。出直してこい」
脇腹に蹴りを入れられ、続けざまに手首に強い手刀を喰らう。銃が手から滑り落ちた。最後に、裏拳を顔面にもらった。身体が宙を回り、うつ伏せに地面へ倒れる。
「がはっ……！」
息が漏れた。さらに身体へ重みがかかる。彼の上に、男が乗っていた。ナイフは複数持っていたようで、さっきのとは別のものを首に突きつけられる。
「お前に動かれる方が厄介なんでな。それに、交渉にも有利だ」
「交渉だと……」
上から被さるように聞こえてきた声に反応する。相手の狙いに気づき、カリクは顔を歪めた。
「サリア＝ミュルフ。君が俺たちと来ることを拒むなら、こいつは殺す。君次第だ。どうする」
男の狙いは、サリアが従わざるをえない状況を作ることだった。カリクの首に刃が当てられ、冷たさが伝わる。
「カリク！」
サリアが叫んだ。彼女は、この状況で自分の身を一番に考えられ

る性格ではない。
「ダメだ、サリア！　すぐ逃げろ！」
カリクが、声高に叫んだところで、曲がったりはしない。胸に手を当てて、彼女は男へ訴えかけた。
「あなたに従います！　だから、カリクから離れて」
「何言ってんだ、サリア！　俺なんて無視しろ！」
カリクが叫ぶ。それに対し、サリアは「ごめんね」と、微笑しただけで、彼の言うとおりにする様子はなかった。男は満足げに微笑んで「いい子だ」とつぶやき、携帯を取り出す。何者かへ、電話をかけた。
「もしもーし。目標確保。俺は手が放せないんで、車回して」
親しげな口調だった。カリクとサリアに、電話の声は聞こえない。
「ああ、広場のまんまだ。どうせ、ノーザンも回収するんだし、ちょうどいいだろ」
かすかに、電話口から相手の声が漏れ聞こえる。どうやら、女性のようだった。
「分かってるよ。いいから、早く来てくれって。よろしくな」
男はそう言って、通話を終えた。携帯をしまう。
「さて、しばしご歓談だ。“しばらく”会えないんだから、挨拶は済ましておけよ」
それから男は、先ほどまでとは一転し、重々しい口調で言った。
「ごめんね、カリク。カリクを見捨てるなんて、私にはできないの」
先に発言したのは、サリアだった。押さえつけられたまま、カリクは声を荒げる。
「ふざけんな！　お前がこいつに従う必要なんてない！」
感情的だったが、この言葉には根拠があった。
（もし、本当に俺を殺す気があるのなら、さっさと殺してサリアを連れて行ってしまえばいい。そうしないで、わざわざ交渉を持ちかけてるのは、俺を殺すと何かしらの不都合があるからだ。だから、サリアが逃げても、俺が生き残れる可能性は大いにある）

考えはしつつも、口には出さない。言ってしまったら、男が作戦を変えるのは明白で、その中身が予想できない。なので、サリアが逃げられる今の状況を壊したくなかったのである。

「分かってる」

唐突に、サリアが言い放つ。カリクの考えは、意味がなかった。なぜなら、

「分かってるけど、カリクを危険にさらしたまま私だけ逃げたりできない」

彼女は、すべて理解したうえで、動くことができていなかったからである。

「お前……っ」

その意図を察し、カリクは顔を歪める。優しさがために、目の前の少女は自分を切れないのだ。

「なるほど。ますます気に入った。精々“あがけよ”」

男の声は、どこかご機嫌だった。

そこへ、

「どんな状況だ、これは」

呆れた感じの高い声が飛び込んできた。カリクはなんとか視界の端に、声の主を捉える。

二十代くらいで、金髪をポニーテールにして頭の後ろでまとめている女性だった。分かりづらかったが、背は高めだった。顔立ちがよく、綺麗な海色の瞳が覗いている。ただ、今はじと目になっていた。

「見てのとおりだ。車はどこにあるんだ」

「すぐそこの通りだ。それより、説明をしろ。これはなんだ」

一応、男の質問に答えてから、女は同じ問いを繰り返した。

「んー、こいつを人質にしての脅迫だな」

男はかなり軽い調子だった。女はそれで状況を把握したらしく、頭を軽く抱えた。

「……まあ、いい。そこの貴女、ついてこい。おとなしくしていれ

ば、悪いようにはしない」
しかし、彼女はそれ以上、状況について何も言わなかった。サリアが抵抗なくうなずく。女の方へ歩き出そうとした。その背に、カリクが叫ぶ。
「行くな、サリア！」
悲痛な呼びかけに、彼女は立ち止まった。振り返り、声は出さず口だけを動かす。
「ごめんね」
また、謝罪だった。前に向き直り、女を真っ直ぐに見据えた。
「貴女に従います」
「いい目だ。ただ、これは許せ」
女は敬意を表しながらも、サリアの後ろに回り、銃を脇腹に押し付けた。銃口の感触がしたからか、サリアは微かに表情を歪める。
「先に行く。そちらの少年は、お前がどうにかしろ」
「りょーかい」
男の返事を聞いてから、女はサリアを伴い、広場を出て行った。後に残ったのは、男二人である。
「さて、お前のことは任されちまったわけだが、どうしたもんかね」
男が楽しげに言った。対照的に、カリクは敵意を剥き出す。
「あんたが俺を離したら、すぐに潰してやる」
「おー、怖いね。こりゃ、簡単に離せなそうだ」
あくまで男は軽い態度を変えない。
「だから、動きを封じさせてもらうな」
その言葉の後、首の後ろに衝撃が走って、カリクの意識は飛んだ。

「まったく。さすがに“あの人”の息子だけあるな。今から、将来有望なこった」
広場には、倒れ伏した少年と、二十代くらいの男性の姿がある。
少年は、意識を失っていた。
「さてと、戻るか」

男を置いてきぼりに、男は仲間が乗っている車へ向かう。
車は、先ほど女が言っていたとおり、広場のすぐ近くに停められていた。迷いなく、運転席へ乗り込む。後部座席でサリアを捕縛している女から声をかけられた。
「一応、労は労っておこう。お疲れ様だ、ガヌ」
「こりゃどうも、シルラちゃん」
彼女に対し、ガヌ＝ロード中尉はバックミラー越しに笑ってみせた。同じく中尉であるシルラ＝マルノフスが、眉根を寄せる。
「誰がシルラちゃんだ。ここで撃ち殺されたいのか、貴様」
「いいえ、滅相もない」
ガヌは大袈裟に両手を胸の前で動かした。シルラは深いため息をつく。
「まったく、なぜ貴様のような奴の方が今回の任務の責任者なのだ。まだ犬の方がマシな頭をしているというのに」
「優秀だからじゃないですかね」
「よっぽど、風穴をあけてほしいらしいな」
「怒るなよ、シルラ。冗談なんだから。シワが増えるぞ」
「誰のせいだ」
シルラの冷たい視線と声を受けつつ、彼女の隣にいる少女へガヌは目をやった。サリア＝ミュルフ。彼が上から聞いた話では、不可思議な力を持っているということだった。
「そういえば、“例の少年”はどうしたんだ？」
「ちょっと眠ってもらってきた。安心しな、なんにも怪我はしてない」
最後はサリアに向けて言った。反応に困ったのだろう、彼女は複雑な表情を浮かべただけだった。
「それを言うなら、ノーザンはどうしたんだ。さすがにあの図体が隠れられるほど、この中は広くないぞ」
今度は、ガヌからシルラに問う。
「別行動だそうだ。この車で首都に行くのは、私たち三人というこ

とになる。本当なら、今すぐ出るべきなのだが貴様は無駄話に時間を使ってしまっているわけだ」

彼女の言葉には、明らかに棘があった。しかし、ガヌは気にしない。

「そうか。じゃー、早く行くとするか」

「……いつか鉛玉をぶち込んでやる」

彼女は毒を吐いた。ガヌはやはり気に留めず、エンジンをかけた。アクセルを踏み込み、車が動き出す。

ガヌが再びサリアを見ると、窓の外をじっと見つめていた。儚げな表情で、一心に誰かを想っているようだった。

と、

『カリク、絶対に助けに来て。きっと、きっとだよ』

突然少女の声がした。サリアのものであったし、状況からして内容も特に不思議ではない。ただ、

『私、信じてるから』

彼女は“口を開いていない”。耳を介して聞こえたものではなかった。

「これは……」

「……マジもんかよ」

シルラとガヌが、それぞれ驚愕を示す。サリアはしゃべっていないはずなのに、言葉が直接、心に飛び込んできたのである。

これが、彼女の“力”だった。

「“オモイノチカラ”、か」

力の名称を、シルラが口にする。彼女の方に、サリアが肩を震わせ顔を向けた。目が見開かれている。

「本来は、あの少年にだけにだけ伝えようとしたのだろうが、想いが強すぎて漏れだしたようだな」

「どうして、それを知って……」

シルラの分析に、サリアは自分の想いが漏れたことよりも、隣にいる金髪の女性がなぜ力の存在を知っているのかという疑問がよぎ

ったようだった。声に困惑と警戒が混じっている。
「上の人間から聞いただけだ。正直、半信半疑だったがな。実際に体験しては、否定のしようがない」
「まあ、“あれ”がありなら、ありだろ」
シルラの言葉に続き、ガヌが口を挟んだ。頭には、ある人物の姿が浮かんでいた。心に浮かぶイメージは、畏怖。
「あまりトップを“あれ”呼ばわりしない方がいいぞ。聞かれて気分を悪くされても困る」
「いいだろ別に。隠してても、意味がないしな」
肩をすくめた。頭から今浮かんでいる人物を消すために、話題を変える。
「にしても、こっからまた首都まで二日か。しんどいねー」
よりによってぼやきだった。今現在、最も早い移動手段である車を持ってしても、首都までは時間がかかるのである。シルラが眉をひそめた。
「仕方がないだろう。歩きでないだけ、マシだと思え。それに、交代で私も運転はするんだ。今から嘆いてどうする」
「そりゃ、そうなんだがな」
(首都に戻ってからが、戦争だからな)
後半は、思うだけで口に出さなかった。
雑談に興じる“軍人”二人と、さらわれた少女を乗せ、車は首都へと向かう。
サリアは人知れず、もう一度、幼なじみの少年を強く想った。

二章『旅立つ少年』

『カリク。助けに来てくれるよね。貴方なら、きっと……』

頭に、いや、心に、優しく悲しげな声が響いた。しかし、姿は見えない。幼なじみの少女が、どこにもいない。探そうとしても、まず身体が動かせなかった。深い暗闇の中にいながら、もがくことすらできなかった。締め付けられるような胸の苦しさから、叫ぶ。

「サリアーッ！！」

そこで夢は途切れ、カリクは地面の上で跳ね起きた。

「ああっ……？」

意識がはっきりしない中、辺りを見回す。制服姿の警察官が何人か彼のそばにいた。右手側には、噴水がある。広場だった。

（何が……）

「き、君。大丈夫か」

警官の一人が尋ねてきた。カリクは多少どもってから、「はい」と、簡単に返す。

そこで、記憶が次々と雪崩のような勢いで蘇ってきた。

（そうか。俺は気絶させられて……）

唇を噛み、拳を握る。あまりに自分が情けなかった。

「どうかしたのかい。怖い顔をしているが」

「いえ、別に。それより、どうして警察の人がここにいるんですか」

「何を言ってるんだ。こっちは、どうして君がいるのか不思議なくらいだよ」

警官に疑問を疑問で返され、カリクは眉をひそめた。状況を把握できていないのを察してくれたのか、警官が説明を始める。

「この広場に爆弾が仕掛けられたという情報が入ったんだ。たぶん嘘だとは思うんだが、偽物の警察官が騒ぎ立てたらしくて、大騒ぎになってね。仕方ないから様子を見に来てみたら、君が倒れていたんだ」

「爆弾……」

すぐさまカリクは、それが人払いのためだという考えに至った。サリアを捕らえるために、わざわざ広場から人を遠ざけたのである。ただ、それだと疑問も浮かぶ。

（どうして、こんな面倒なことを）

こんな目に付きやすい場所で誘拐を決行した意味が理解できなかった。深夜を待って、サリアの家に押し入った方が、目立つリスクを減らせたはずなのである。それに、あの男女は知り得なかっただろうが、サリアの両親は、自分たちに危険が及ぶかもしれないのなら、簡単に娘を切り捨てるような人間だった。

（俺の素性を知っていたのと、何か関係が？）

となると、思い当たる理由はカリクである。男の方はなぜか、カリクを知っていた。ただ、確証はない。

「いったい、何があったんだい？」

考えを巡らせていたところで、警官の声が入り中断させられた。正直に話しても、無駄だと判断した彼は、

「それが、僕にもよく分からなくて。いきなり後ろから殴られて気を失ったんで、あまり覚えてないんです」

ためらいなく、嘘の話を始めた。

「後ろから殴られた？　本当かい。犯人の顔は覚えてないか」

案の定、警官は食いついてきた。だが、嘘なので、詳細など答えられない。

「いえ、それがいきなりのことで覚えてないんです。ごめんなさい」

そう言って、うやむやにした。騒ぎの犯人は先ほどサリアを誘拐した男たちの仲間に違いないので、存在したのは間違いない。あとは、見ていないことにすればさほど厄介なことにはならないと踏んでいた。

「そうか。でも、とりあえず話だけは聞かせてもらえるかい」

「かまわないですけど」

もちろん、何も与えられる情報は持っていない。解放されるまで、

さほど時間はかからなかった。

警察での証言捏造を終え、カリクは日の暮れた道をひた走った。警察よりも、誘拐犯の情報を持っていそうな人物に心当たりがあったのである。彼らは、車を持っていたが、徐々に普及してるとはいえ、キュールで持っている人間はまだ少なかった。複数行動で銃も所持しており、“サリア”を狙ってきたことからも、普通の人間ではなく、何かしらの組織の者たちであることが予想された。

ともすれば、警察よりも“彼”の方が知っている可能性が高い。いや、そもそも今日訪ねてきた原因そのものが、この件と関係しているのではないかという予測もあった。

自宅にたどり着いたカリクは、走ってきた勢いそのままに、玄関のドアを力任せに開け、思い切り叫んだ。

「クソジジイ!!」

家全体、もしかすれば近所に届いたのではないかというくらい、強烈な音量だった。ただ、

「誰がクソジジイじゃあ!!」

負けないくらいの声が、家の中から聞こえてきた。歳を感じさせない、屈強な老人が大股歩きで奥から出てくる。その後ろから、何事かと目を丸くしてマリーが顔を覗かせている。

「いったいお前は、祖父をなんだと思って……」

「サリアが攫われた！　知ってることをあらかた話せ！」

説教を始めようとしたトルマを遮り、カリクは再び叫んだ。瞬間、祖父と母の顔色が変わった。後者はおそらくサリアという名前に、前者は“それ以上”のことに驚いたと判断する。

「知ってるんだろ、ジジイ」

目を据え、真っ直ぐに見つめる。強い怒りと一緒に、悔しさと辛さが涙となって彼の頬を伝った。

「カリク。それは、本当か」
「嘘でこんなことは言わねえよ。いいから、情報を寄越せ」
剣幕は凄まじく、今にも祖父に飛びかかりそうだった。
「まさか、こんなに早いとは」
その祖父は、意味深な言葉とともに、顔を歪めた。
「やっぱり、事情を知ってるんだな」
カリクが詰め寄る。
「ああ、知っとる。今日はその話をしにきたんじゃからな。これほど早くに動きがあるとは思わなんだ」
一つ前の言葉と同じ内容を、もう一度繰り返す。トルマにとっても、想定外のようだった。
「おそらく、サリアちゃんを攫ったのは、軍に関係する人間じゃ。もし違ったとしても、軍の息がかかっていると考えて問題ない」
「軍……」
祖父の話は、カリクの予測の中で最も悪いものだった。サリアを連れ去ったのは、祖父がかつて在籍し父が属する軍の関係者だというのである。
「根拠はいくつかある。まず、サリアちゃんを狙ってきたこと。“力”の存在を知るものは、世界にほとんどいないんじゃ。にも関わらず知っとるとなると、それだけの諜報能力があるということになる。それから、ニックの左遷じゃ。お前さんにはまだ話しとらんかったが、首都から出されてニケアにやられた。おそらく、上層部に探りを入れていたからじゃろう」
「父さんが、上層部に探りを？」
初めて聞く話だった。順調に軍でエリートの階段を上がっている父が、そんなことをしているとは思っていなかったのである。
「ああ。本当は、単純に国のために軍人として育てていたんじゃが、サリアちゃんがこの町に来たことで状況が変わった。軍の上部からきな臭さを感じ始めたんじゃ」
「ちょっと待ってくれ。サリアがこの町に来たって、あいつは生ま

れたときからここで育ったんじゃないのか？」
　幼ない頃からずっと一緒だった少女についてのことで、カリクは問いを口にした。トルマは、首を横に振る。
「いいや。あの子は外から来た子じゃ。二つか三つだったときにな」
　初めて知る事実だった。同時に、疑問に思い至る。
「じゃあ、サリアの親も外から来たってことなのか？」
「それは違うの。今のあの子の親は、本来の親ではない。わしとニックとマリーで頼み込んで、育ててもらったんじゃ。わしらの目の届く場所で、なおかつ完全に手元ではない位置ということでな」
「どうして、そんなこと」
「あの子の力が、それだけ希少なものだったからじゃ。わしですら、都市伝説のようなものだと思っていたからの。だから、口も開いていない女の子の感情が伝わってきたのに、かなり驚いたわい」
　当時を思い出しているのか、祖父は遠い目をした。すぐに、そんな状況ではないことを思い出したようで、カリクに向き直ってくる。
「とにかく、軍内部では力の存在を信じ、悪用を考える輩も少なからずおった。だから、完全な監視下ではないものの目の届く場所においておいた訳じゃ」
「なるほどな。前に言ってた、サリアがいつか狙われるかもしれないっていうのは、そいつらのことか」
　説明を聞き、カリクは理解した。彼は、サリアの“力”がいつか狙われているかもしれないというのは以前から伝えられていた。ゆえに、“サリアを護るため”という理由から、祖父の訓練に文句を言わず従事したのである。その懸念の理由は、この時点で既に、軍にあったのだ。
「そうなるの。だが、状況は今より悪い。ニックに追わせたかぎりだと、今回の首謀者はかなりヤバいんでの」
「上層部が関わってるのか」
　サリアの情報はかなり少ないはずであるので、彼女を知ることができたという時点で、容易に想像ができた。しかし、祖父の出した

名前は、一歩上の人間のものであった。
「上層部どころじゃない。今回の首謀者は、おそらく“軍王”じゃ」
「なっ……」
息をのんだ。とんでもない人物を表す称号だったのである。
“軍王”。議会を持ち、総理大臣の席があるにも関わらず、事実上ラスタージ共和国の頂点に君臨する者の称号である。本来の階級名は元帥なのだが、国政も担っているためにそう呼ばれていた。数代前からの体制なので歴史は浅いが、この国の軍事色はその数代の間にかなり濃くなった。
「現在の“軍王”であるクラカル＝エル＝ミッドハイムは、わしが一番最初に持った部下なんじゃが、“力”の存在を信じ、かなり固執しておった。頂点に上り詰めた結果として、専門の研究施設を作ったという情報もあるくらいじゃ。首謀者である可能性は、かなり高い」
トルマの口調は苦々しかった。行いそのものも気に入らないのだろうが、かつての部下を止められなかったという負い目もあるようだった。
「じゃあサリアも、その施設に？」
「ありえるの。ただ、わしの知っている奴の性格のままならば、確実に手元に置いておくはずじゃ。どの施設かはともかく、十中八九、首都に連れて行かれたとみて間違いないじゃろう」
「首都……」
カリクが噛み締めるようにつぶやく。首都セルゲンティス。軍の本部もある、強大な町である。サリアは、そこに連れて行かれた可能性が高い。考えたことは、一つだった。
「行ってやる」
「なんじゃって？」
「首都に行くんだよ。サリアを助けるために」
自分が首都に行き、サリアを取り戻す。それしかなかった。いきり立つ中、トルマが苦言を呈してくる。

「簡単に言うが、そう甘いものではないぞ。お前がいながらサリアちゃんが攫われたということは、相手はお前以上じゃ。おまけに、軍王もおる。首都に行ったところで、どうにかなるとも思えん」
「だからって、何もしないでいられるかよ。こんな手段を取るんだ。何をされるか分かったもんじゃない。それに、軍の上層部が関わってるなら、正攻法で警察とかに訴え出ても潰されちまう。俺が自分で動くしかないだろうが」
カリクは祖父の言い分を突っぱねた。さらに言葉を重ねる。
「なにより、理屈じゃない。俺はあいつを助けたい。いや、助けないといけないんだ。理由なんて問題じゃない。じっとしてらんねえんだよ！」
心にあるのは、幼い頃に交わした約束だった。サリアを一人にしないと、彼は言い切ったのである。根底には、彼女への特別な想いがあった。それはとても単純な感情でありながら、強く激しい原動力として彼を突き動かしていた。
「確かに俺は、サリアを攫いに来た奴ら相手に、歯が立たなかった。軍王にかなうとも思えない。でも、それでサリアを諦める理由にはならない。生きてるかぎりは、何があってもあいつを諦めるわけにはいかねえんだ」
拳を握りしめた。爪が食い込むほど、強く、強く。
「だから、止めないでくれ。もし止めるなら、反抗しないといけなくなる」
目を据え、保護者二人を見た。
「止めはせんよ。さすがじゃな。それでこそ、わしの孫じゃ」
祖父からの反論は、なかった。肩をすくめながら、笑みを見せる。カリクからすると、意外な反応だった。
「お前のことじゃから、軽い気持ちではないじゃろ。なら、わざわざ止める必要はないわい。わしが手塩をかけて育てたんじゃから、自分から動いて当然じゃ」
「じいちゃん……」

話がまとまりかけていたところで、
「ちょっと、待ってくれないかな」
柔らかさの中に、しっかりとした芯を感じさせる女性の声が聞こえた。
「母さん？」
マリーだった。いつもの穏やかな表情はなく、厳しい顔つきをしている。
「二人だけで話を進めないでください。カリクは、私の息子です」
彼女もまた、強い目をしていた。
「貴方たちの言っているような危険な場所に、おいそれと行かせられません」
二人の方へ近づいてきた。カリクがトルマから指導されていたのは了解していたし、その目的とサリアの力についても知っていた。しかし、願わくば危険なことにはあってほしくないと考えていた。こちらの会話を黙って聞き流すわけにいかなかったのだろう。
「母さんの言葉でも、俺は従えないぞ」
間に入ってきた母親に対しても、カリクは睨みを利かせた。
「性急なことを言わないの。絶対に行くなとは、言いません」
彼女も負けじと強い目つきを返してくる。
「貴方がサリアちゃんのことをどれだけ想ってるかくらい、私はよく知ってます。だから、止めるのは残酷なのも分かる。けど、送り出すには条件があります」
「条件？」
「なんじゃ、その条件というのは」
カリクに続き、トルマも反応を示す。やはり、祖父はカリクを送り出す気だったのである。
「誰か、力のある人と一緒に首都に行くこと。例えば、お義父さんやニック。せめて、そのくらい強い人がいないと、私は貴方を送り出せない」
「だったら簡単じゃないか。じいちゃんも一緒に来ればいい」

カリクはすぐさま横にいる祖父へ目を向けた。しかし、その表情は固かった。

「それは、無理じゃ」

絞り出すような声だった。明らかに、様子が先ほどまでと違う。

「既に、上にニックが探りを入れていたことがバレておる。ここが狙われんともかぎらん。ニックとの交渉に使えるからの。だが、わしがいれば多少の抑止にはなる。だから、ここから離れるわけにはいかんのじゃ」

「な……」

カリクの顔から血の気が引く。他にトルマレベルの人間となると、心当たりがなかった。父親であるニックでは、軍に属するためさらに動くのは厳しい。本格的に、母と対立しなければならなくなった。

「なら、無理ですね。ニックもニケアに勤務地が移ったとはいえ、離れるわけにはいかないでしょうから」

マリーの口調は、冷たかった。カリクは突っぱねる。

「だから諦めろっていうのか。だいたい、なんでじいちゃんや父さんが一緒ならいいんだよ。軍王には、どちらにしろ届かないだろ。俺一人と変わりゃしない」

つまり、一人でも行かせろということだった。どれだけ母に止められようとも、ここに留まる気はない。

「実戦経験に乏しい貴方を、一人送り出すよりはマシだわ。見込みもないし、具体的な策も計画もない。それじゃあ、首都にはやれない」

マリーも譲らない。間に立たされているトルマが、口を挟む。

「まあ、まて、マリー。こいつはまだ甘いが、わしとニックが動けないとなると、サリアちゃんを助け出しに行けるのは、現状カリクだけなんじゃ。なんとか、目をつぶってくれんか」

「ダメです。お義父さんの頼みでも、ここは譲れません。この子の母親として」

彼女は折れそうになかった。親の愛情を引き合いに出されては、

反論もしづらい。真正面から言い合っても無駄だと判断したカリクは、
「もういい！」
話を切り、自分の部屋へ向かった。母の許可が必要だとは思えなかった。
（明日の朝一で、家を出る）
決意は固かった。

少年のいなくなった玄関先で、マリーとトルマは佇んでいた。
「……どういうつもりじゃ、マリー」
「どうもこうも、言ったとおりです」
「本当に、行かせないつもりか」
もう一度トルマからかけられた言葉に、今度は応えなかった。

翌日。まだ、太陽がその姿をすべて見せきらない時間にカリクは、まとめた荷物を持ち玄関へ下りていった。そこには、一人分の影があった。
「……母さんか」
マリーだった。扉へ行くのを塞ぐように立っている。彼女の前でカリクは足を止め、鋭い目を向けた。
「……俺は、行くぞ」
堂々と言い放つ。迷いはなかった。
「考えは、変わらないのね」
「当たり前だ。今のサリアの親は、あいつを助けようなんて思わないに決まってる。学校の奴もあいつを避けてる。じいちゃんと父さんは動けない。そしたら、俺が助けるしかないだろ」
言いながら、心が締め付けられるのを感じていた。理由は違えど、自分も最近はサリアを避けていたのだ。そばにいてやるべきであっ

たのに、彼女を一人にしてしまっていたのである。後悔の念は、とても振り切れない。

だから、今度はもう間違えるわけにはいかなかった。

「サリアを、一人するわけにはいかない」

わずかにうつむき、自然とこぼした。心の底からの思いが、そこにあった。

「……昔ね」

マリーが、ぽつりとつぶやいた。声からして、何かを話し出そうとしていたため、カリクは黙る。ただ、また止められたら、もう無視して家を出ようと考えていた。

「私、いじめられてたことがあるの。中学生のときかな。無視されたり、度の越したいたずらされたり、毎日苦しかった」

「母さんが？」

初めて耳にすることだった。

「ええ。中心になっていじめてきてたのは一部だけど、他のクラスメイトは見て見ぬ振りをしてた。親は私に冷たかったし、先生も厄介事になるのが嫌だったみたいで黙認していたから、私は一人で泣いてたわ」

内容とは裏腹に、彼女に辛そうな様子はない。むしろ、穏やかに笑っていた。

「でも、ある子が私を救ってくれたの。それも転校してきた初日にね。驚くくらい、真っ直ぐだった。代わりに、初日から周りを全部敵に回したんだけど、私はとっても嬉しかった。私を救ってくれる人はいないものだとあきらめてたから」

彼女が笑っているのは、いじめられた記憶自体は辛くとも、その先にある救われた記憶が強い輝きを持っているためだった。陰となるはずの記憶が、光に呑まれている。

「まあ、その転校生の子っていうのは、お父さんなのだけどね。昔は正義感の塊みたいな人だったの。なにしろ、知り合ったばっかりの女の子のために、わき目もふらずに駆けずり回って、私の世界を

一変させちゃったくらいだもの」
「あの冷静な父さんが？」
カリクにとっては、信じがいことだった。母の思い出の中にいる父の姿が、描けなかった。
「カリクには確かに意外かもね。でも、あの人は今も根っこはそういう熱い人なのよ。ただ、相手がいじめっ子から国になったから、戦い方を変えてるだけ。本当は、今すぐにでも軍王さんのところに乗り込みたがってるに決まってる。それが、あの人だから」
話す母は楽しげだった。自慢しているようにも聞こえる。
「貴方はあの人そっくり。付き合い出してから、あの人にどうして私を助けてくれたのか訊いたのだけど、たぶん貴方と一緒だもの」
「俺と？」
「『最初は可哀想と思ったから。でも、途中からはただ単純に好きだから護りたくなったんだ』って。あなたがサリアちゃんを助けたいと思う理由とおんなじでしょう？」
「それは……」
カリクは答えるのをためらった。肯定に等しい、ためらいだった。
「貴方もあの人も、思ったら一直線なのよね。カリク、サリアちゃんのご両親のところに何度か乗り込んだことあるでしょう。そのことも知ってたのよ、私。止めなかったけどね」
マリーに柔らかな微笑みを向けられ、カリクは口を開いて固まった。彼女の言ったとおり、何回かサリアの両親のところへ乗り込み、「サリアを嫌うのは勝手だが、あいつの身に何かあったら、許さない」などと、何度か釘を刺したことがあるのだ。
「昨日はああ言ったけど、本当は止める気なんてなかったのよね。ただ、貴方がどれだけ本気なのかを確かめたかったの。生半可な覚悟じゃ、だめだと思ったから。でも、心配なさそうね。私の制止を振り切って、出ようとしてるんだから」
彼女はカリクの肩を掴み、目線の高さを合わせてきた。
「けど、一つだけ約束して。絶対にサリアちゃんと生きて帰ってき

なさい。サリアちゃんだけじゃだめ。あなたも帰ってくること。いい？」

彼女の願いは、その一つだった。“誰も死なないこと”。サリアを助けるために、命を投げてはいけないと言っているのだ。

「分かってる。あいつを助けても、その後も俺が護ないといけないんだ。絶対に死なない」

カリクは回答に迷わなかった。今まで避けてきてしまった時間を、埋め合わせるために、死ぬわけにはいかないと自覚していたのである。

「いい答えだわ。きっと貴方は、地力が上の人ともたくさん戦わないといけない。絶対に勝てないような状況にもなるかもしれない。それでも、死んじゃだめ。恥ずかしい逃げを選ぶことになったとしても、生き残ることが大事。それに……」

一度言葉を切り、

「貴方には、強い想いの力がある。サリアちゃんのために生きようとする意思があれば、きっと生き抜けるわ」

彼女ははっきりとした力強い口調で、カリクに告げた。肩から手を離し、すっきりとした表情を見せる。

「さあ、行ってきなさい。二人で帰ってくるために」

「ああ、行ってくるよ。サリアと一緒に帰ってくるために」

母親の目を見つめ、カリクは強い想いを込めてうなずいた。必ず生きて、サリアと帰ってくる。心に、深く刻み込んだ。

母親から目をはずし、玄関へ行く。外への、大切な幼なじみの少女を助けるための旅への、扉のノブを掴む。

と、そこに男の声が飛び込んだ。

「待て、カリク」

振り返ると、そこにいたのはトルマだった。廊下を真っ直ぐにこちらへ向かって歩いてくる。カリクの前で立ち止まると、何か黒い物体を差し出してきた。

「こいつを持っていけ」

「これは……」
「お義父さん、それは……」
「わしが手入れしたものじゃ。お前に合わせて改造してあるから、ぴったりくると思うぞ」
一丁の、拳銃だった。驚くマリーを横目にカリクはためらいなく受け取る。鈍い輝きを放っていた。確かに、手に馴染むように思えた。
「約束を違えるなよ、カリク」
「……ああ」
祖父にもうなずいてみせたカリクは、今度こそノブを回す。開いた扉から差し込む光に包まれながら、彼は元気よく声を上げた。
「行ってきます！」
ここに、救出行は始まった。

三章『案内人』

キュールを後にしたカリクは、まず東の都市であるニケアを目指すことにした。目下問題となるのは、移動の手段がないことだった。車は上流階級の乗り物で、鉄道はまだ首都周辺にしかない。数年後であれば、首都と東西南北の主要四都市に路線があったかもしれないが、まだ存在していない。必然的に、馬車か徒歩しかなかった。

そんな背景があり、彼は二、三時間ほど馬車に揺られ、ニケアにたどり着いたのであった。

東の大都市、ニケア。首都には劣るものの、東部軍の本拠地があり、大きめの建物も数多い、発展した街だった。メインの通りは石造りで横に広く、車もそれなりに目につく。また、機械や建築に使われる部品を作る企業、ひいてはその工場が多く、“産業のニケア”という通称があった。ちなみに他の方面の都市にも特色があり、北は“観光のミリシア”、西は“食物のルクス”そして南は“貿易のレンバー”とそれぞれ呼称されている。

街の入り口で馬車から降り、中心部の東部軍基地へ伸びる灰色の大通りを見つめてから、カリクは家から持ってきたものでは足りないであろう食糧を買い足すため、買い物へと出た。

敵の目がどこにあるか分からないため、軍との接触は避けたかった。だから、父親に会う気は、なかった。

長旅向けの商品を扱う店で食糧を購入し、カリクは店先で足を止めて口元に手を当て、あることを考え出した。

（さて、こっからどうするか。やっぱり、馬車しかないのか？）

なぜ悩んでいるかといえば、真っ直ぐに首都へ向かう馬車は意外に少なく、回り道をして最終的に首都へ向かうものが多かったから

である。時間が惜しい彼としては厄介だった。かといって他の手段は今のところない。

と、身体に軽い衝撃が伝わった。軽くよろける。

「っと……」

「おっと、悪いね」

何かと思えば、同い年くらいの少年とぶつかったのであった。背丈はカリクよりも低く、体型は平均的なものだった。彼は軽く頭を下げ、その場を離れようとする。

しかし、

「ちょっと待て」

カリクは少年の腕を掴み、強引に引き止めた。

「ちょっ、なんだよ」

驚いた顔を向けられたが、“ごまかされない”。

「何か聞かないと、分からないか？　盗人」

言い放つと、少年は目を見開き、それから微笑んだ。

「へぇ、やるなぁ。でも、俺っちとしては捕まるわけにいかないんだよねぇ」

「なんだと？」

カリクが眉をひそめたのもつかの間、少年が銀色に鈍く光る何かを右手に持ち、カリクの腕目掛けて振るってきた。反射的に手を離す。先ほどまで腕があった空間を切り裂いたのは、小振りのナイフだった。

「やっぱり、反応いいね。でも、気づくだけじゃ駄目だぜ。じゃーな！」

周囲がナイフを見て騒然となっている中、肩を解放された隙に少年は逃げ出した。

「ちっ、待て！」

すぐさまカリクも後を追う。さすがに、街中で銃を抜くわけにはいかないため、そうするしかなかった。

これからのことを考えると、財布を取り返さないわけにはいかな

い。

「あんた、いい加減、しつこいぜー！」

「お前が足を止めたら、あきらめてやるよ！」

二人の少年は、街中で壮絶な追いかけっこを展開していた。二人ともなんてことのない様子だが、人混みの間を縫ってかなりの速度で走っているため、実際はどちらもとんでもないことをしている状態だったりする。

付かず離れずを保っていたが、スリの少年はやがて街の郊外に建つ、寂れた屋敷へと逃げ込んだ。横に広く、二人の背よりも高い門の脇に空いた穴から、敷地内へと入っていく。

（廃虚か……。奴の住処か？　それとも、罠か？）

迷いつつも、カリクはそれを振り切って同じ穴を通っていく。前を行く少年は、既に屋敷の扉を開き、建物の中へと入って行っていた。

「逃がすか！」

罠だとしても、追うのをやめるわけにはいかない。サリアを助けに首都へ行くには、どうしても必要なものなのだ。

堂々と正面から入り込むと、薄暗さと埃っぽい空気に包まれた。二階建てで、前には上へつながる大きな階段があり、真ん中の踊り場から二つに分かれていた。上がりきったところからは左右に廊下が伸びており、何より目立つのは二階につけられている四つ並ぶ大きな窓である。また一階も左右と斜め前の左右に他の部屋へ通じているのであろう扉があった。

そして、

「ここまで招いたのは、あんたが初めてだよ。ただもんじゃないね！」

スリの少年は、二階へ続く階段の途中にある踊り場に立っていた。

仰々しく両手を開いている。
「そりゃどうも。生憎、鋭才教育を受けて育ったんでね」
昨日、サリアを誘拐した男にも言った言葉を返した。不敵に笑ってみせる。
「へぇ。奇遇だな。俺っちもおんなじようなもんだ」
すると、少年も同じような表情を浮かべた。ゆっくりと、獲物を手にする。銀色を放つそれは、ナイフだった。
「何本あるんだ、それ」
「さあ。とりあえず、たっくさんとだけ言っとくよ」
「ああ、そうかい。そういう認識にしておく。まあ、こっちも武器を使わせてもらうけどな」
軽い調子の少年に、肩をすくめてみせてから、カリクも銃を抜いた。余裕の表情を崩さなかった少年が、わずかに頬を引きつらせる。
「えーと、うちの国って、未成年が銃持ってよかったでしたっけ」
「そんなもん、決まってるだろ」
カリクは銃口を上へと向けた。
「もちろん、違反だ。でも、そっちもスリだから、犯罪者なのはおあいこだろ」
ためらいなく、引き金を引いた。甲高い銃声が響く。狙いは、少年の足。
「いった！」
見事に当たったが、弾は足の皮にも届くことなく、乾いた鉄の音を上げさせただけだった。
「……足にまでナイフを隠し持ってんのかよ」
「言ったろー、たっくさん持ってるって。それより、いったいんだけど。ヒリヒリする」
「それで済んで良かったな。本当なら、穴が空いてたんだ。ナイフに感謝するんだな」
言葉を交わしつつ、次に狙う場所を考える。彼は足を撃つことで、命には別状ないようにしようとしていたのだが、無理そうだった。

かといって、他にどこを狙えばいいかも分からない。
（そもそも、あいつが逃げない理由が分からない。街中でなら、騒ぎを起こせば乗じて逃げられたかもしれないのに）
「どうしたんだよ。こないなら、こっちからいくぜ」
照準を合わせかねていると、少年が高らかに宣言した。どこからともなく手品のように複数のナイフを出し、指の間に挟んで構える。
「おらっ！」
その中の二本を、的確にカリク目掛けて飛ばしてきた。階段下にいたカリクは、横にステップを踏んで避ける。
が、
「あめぇ！」
「なっ！？」
そこにもナイフが飛んできた。脇腹を捉えている。
「くそっ！」
仕方なく、銃で対処する。銀の物体を弾いた。床にちょうど刃先が刺さる。
「へぇー。やっぱりやるねー」
「お前がそれを言うかよ。ただのスリにしては、レベルが高すぎるぞ」
楽しそうに見下ろしてくる少年に、カリクは吐き捨てるような口調を向けた。
（俺が避ける方向を読んでたんだろうな。まさか避けたところにも放っているとは思わなかった）
実際のところ、相対している少年は、あまりに手慣れすぎていた。銃を持った相手にそれほど尻込みもしていないのも、ただの孤児とは思えない。何かしらの訓練を受けたことがあると考えるのが自然だった。
「でも、いつまで保つかな？　どんどん行くぞ！」
第二陣が放たれる。たった一本だが、避けた先にもくるのは予想がついた。

「ちぃ！」

手の内を理解しつつも、まずは“見せ”であるナイフを左に避ける。次に来るであろう攻撃を予測し、横へ銃口を向けた。しかし、予想外の光景が、彼の目に飛び込む。

「三本！？」

向かってくるナイフが三本に増えていた。縦に列をなすように並んでいる。とても、拳銃一丁で対応しきれない。とりあえず、一番上にある肩口を狙ったものを撃ち落とす。他二つはどうしようもなく、身体に受けた。

「ぐうっ……」

呻き声が漏れる。脇腹は隠して巻いている銃のホルスターで、ダメージを軽減させたが、右足の膝辺りに深く刺さった。ズボンに血が滲む。

「悪いなー。俺っちってば、ちょっと訳ありな人間だから、ここまでしっかり顔を覚えられると、厳しいんだ。だから、不本意だけどあんたには死んでもらわないと困るわけ」

カリクへダメージを与えたのを見て取ったからか、少年が口を動かす。どうやら、姿を覚えられては不都合な事情があるようだった。

「そうかよ。そりゃまた、運がないな」

痛みを堪えながら、脇腹のナイフを引き抜く。足のものは、出血が酷くなるのが目に見えていたので、刺さったままにせざるをえなかった。

（どうする。獲物がナイフだから、あっちは確実にトドメが指せるくらいにこっちが動けなるまで、この戦法でいくつもりだろうしな）

少年の方を睨みながら、カリクは頭を回転させる。こんなところで死ぬわけにはいかない。かといって、財布を諦めるわけにもいかなかった。それに、目の前の少年はただ者ではない。場合によっては、戦力にできそうだった。

（このまま、同じことを繰り返してもジリ貧になるだけだ。武器切れを待つわけにもいかない）

「言っておくけど、逃げられはしないぜ。背中を見せたら、そこであんたは終わりだ」
手元でナイフを弄びながら、少年は微笑を浮かべる。元から引く気のないカリクには、ちっとも役に立たない警告だった。
（仕方ないな……）
カリクは、腹を決めた。肩から提げたカバンを、左手で掴む。
「さあ、またいくぜ！」
三度ナイフが飛ばされる。今度は、避けずに自分目掛けてきたのを真っ先に撃ち落とした。
「甘いね。あんたも、その程度か」
少年が冷たい声を出す。奥にもう何本か別のナイフがあったのである。先ほどと同じく、縦に三本並んでいる。さらには、左右にも一本ずつ放たれていた。
（きた！）
しかし、“計算通り”だった。まず正面の一番上を飛ぶナイフを右手に持つ銃で撃ち落とす。残るは二本。
「よっ！」
声とともに、カリクは前へ飛び、身体の前にカバンを回した。下のナイフは飛び越し、彼の腹部を捉えていたナイフはカバンに刺さる。
「なっ！？」
カリクが銃だったからだろう、突っ込んでくるとは思っていなかったようで、少年は目を見開いて驚きを示した。ほんの僅かな間ながら、動きが止まる。それでも、カリクには充分だった。階段を一気に駆け上がる。
少年が我に返り、迫るカリクへ攻撃を仕掛ける。両手から一気に四本を横に列を作って放ってきたが、
「甘い。狙ってる軌道が見えすぎだ」
動揺している相手の攻撃を見切るのは、造作もなかった。真ん中二本の間に身体を通す。そのままの勢いで、間合いを詰めた。

「くそっ！」
少年が連続で何本か放ってきたが、カリクは神がかったスピードで、自分の進むルートのものをすべて銃弾で床に落とした。それも、段を上りながらである。
少年の手元には、ナイフがなかった。後退しつつ、武器を取ろうとしていたが、
「ずいぶんと余裕なさそうだな」
カリクはその隙を逃さない。最後の一詰めをする。
「終わりだ」
そして彼は、引き金を引いた。ただし狙いは、少年の身体ではない。銃口は、相手の靴を捉えていた。
「おわっ！？」
けたたましい金属音が響き渡る。“刃物を仕込んだ靴”で蹴りを入れようと、足を上げていた少年は、銃弾を受けた衝撃で、背中から床に倒れた。容赦なくカリクは敵の腹を踏みつけ、銃を向ける。
「チェックメイトだ。全身にナイフを仕込んでるお前なら、靴にも何かあると思ってたぜ。残念だったな」
少年を見下ろしながら、カリクは表情を崩さずに告げた。全身に武器が隠されているのなら、追い詰めたとき一番注意が疎かになりやすい足の方にもあると考えたのである。予想通りだった。
「ぐっふ。や、やっぱり、ただもんじゃないな、あんた」
足蹴にされながらも、少年は笑ってみせた。抵抗しないことを示すため、手を上げている。笑みは硬い。
「とりあえず、まず財布の場所を言え。話はそれからだ」
「わ、分かったよ。ケツのポケットだから、このまんまじゃ取れないぜ」
「そうかよ。じゃあ、やっぱり順番を変える」
「いっ？」
少年の頬が、さらに引きつる。
「どうしたよ。足をどかした瞬間に何かするつもりだったか。それ

ともポケットに何か仕掛けでもしてたか」
「い、いやいや。滅相もない」
（絶対になんかあったな……）
まだ油断できない相手であることを再認識する。ただ、だからこそしたい話があった。
「俺は今、首都に向かってる。軍の上層部と戦わないといけない。お前も一緒に戦ってくれ」
「はあ？　いきなりなに言ってんだ」
少年が素っ頓狂な声を上げた。無視して、続ける。
「お前も訳ありなんだろ。警察の世話になりたくなければ、協力してくれ。安物でよければ、食事もこっちで持ってやる」
とても協力を頼んでいる光景ではなかった。少年も、口を空けて固まっている。
「早く答えろ、こそ泥」
眼下にある腹を、さらに強く踏みつけた。少年が呻きを漏らす。たまらず、うなずいた。
「わ、分かった分かった。でも、一個だけ条件」
「聞くだけ聞いてやる」
「なんで軍のお偉いさん方を敵に回すことになったのかぐらいは、教えてくれない？」
真っ当な質問だった。カリクはしばらく考えて、
「それくらいならいいだろう。事情は知ってもらっておいた方がいいしな」
そう言ってから、今の自分の状況について話し始めた。

「“オモイノチカラ”……」
カリクが話し終えたところで、少年が真っ先に口にしたのは、その単語だった。

「ああ。軍の奴はその力を狙って、サリアを誘拐した。俺からしたら、なんの得があるのか分からないが、間違いなくろくでもないことに決まってる」

たった一点を除いて、普通の少女であるサリアが、どうして陰謀に巻き込まれたのかということと、彼女を連れて行かせてしまった自分の不甲斐なさへの怒りで、荒っぽく吐き捨てた。

一方の少年はといえば、どこか上の空だった。手は挙げたままだが、カリクに意識が向いていなかった。

「で、協力はするのか？」

話しかけると同時に軽く足へ力を入れ、強引に気を戻させる。少年は、やや顔を歪めてから応じてきた。

「にわかには、あんたの彼女が持ってるっていう力が信じられないけど、軍を敵にしてるっていうなら、俺っちと一緒だな。いいぜ、協力しても。タダでご飯も食べさせてくれるんだろ？」

今度は、ニヤリと笑ってみせる。コロコロと表情が変わる少年を見て、今更になって不思議な奴だとカリクは思った。

「ああ。それは約束してやる。ただし、財布は返せよ」

「へいへい」

銃口を少年から離す。妙な動きをすればすぐに撃てるように、警戒は怠らないがなんとなくもう攻撃はされない気がした。手を挙げる必要がなくなった少年が、お尻のポケットからカリクの財布を素直に取り出す。

「ほら、財布」

カリクに投げてきた。気を引かせて攻撃かとも思い、警戒したが、何もしてこなかった。

「中身だけないとかいうことはないよな」

銃を持っていない左手で、受け取る。少年は右手を自身の胸の前で振った。

「ないない」

「そうか」

「あ、でもやっぱ確認はするんだ」
カリクは少年のツッコミを無視して、中身を確認する。どうやら、何も盗られていないようだった。
「しっかし、本当に強いよなあんた。いったいどんな教育受けてきたんだよ」
「その言葉は、そっくりそのまま、お前に返してやる。ただの家なし子にしては、戦い慣れしすぎだ」
「それもそうだな。まあ、ちょっと特殊な育ちをしたからね、俺っちは」
「特殊な育ち方、な。俺も特殊といえば、特殊か」
それどころか、はっきり普通ではない。しかし、少年はそんなカリク以上に、何かがありそうな雰囲気であった。
「そういえば、あんた名前は？」
「カリクだ。お前は？」
「俺っちはレイン。よろしく頼むぜ、カリク。主に食費を」
「安物でよければな」
「問題なしだ。食えるってだけでも万々歳だし」
互いの紹介をし、無表情に近いカリクに対して、スリの少年ことレインは笑顔を見せた。
「けど、驚いたねー。まさか、自分の財布をスった奴に協力を頼んでくるとは」
「相手がデカいからな。なんのしがらみのなさそうな、お前みたいな奴の方が味方として都合がいい。それに……」
銃を服の中に隠れているホルスターへしまう。言葉を切ったので、レインが続きを促してくる。
「それに？」
「お前の戦い方は、ほとんど我流だが、根底に軍人の基礎を思わせるものを感じた。だから、何か因縁でもあるかと思ってな。そっちのしがらみなら、あっても困らない」
「……なるほどね」

彼はどこか意味ありげな反応だった。おそらく、どこかしらは合っているのだろうと、カリクは踏む。
「じゃあ、行くぞ。これから、首都に行く手段を考えないと。誰かさんのせいで、余計な時間をくったからな」
とはいえ、協力してもらえるならレインの事情に興味はなかった。さっさと廃屋を後にしようとする。
「えっ、ちょっ、もっと訊くことないの？」
「ない。それより時間が惜しいんだ。お前の詳細はどうでもいい」
「……さいで」
一度、レインはカリクを呼び止めてきたが、肩をすくめただけだった。
「でも、荷物を用意する時間はくれよー。さすがに準備くらいはさせてくれるだろ？」
「……逃げるなよ？」
「逃げないって。あんたの話、“面白かった”しな」
話はともかくとして、彼は旅の準備をしに、二階の奥へと走っていった。カリクは、踊り場で待つことにした。
五分ほどで、レインは戻ってきた。小さなリュックを背負っている。
「何入ってるんだ、それ」
「んー、だいたいナイフ」
「……そうか」
訊いておいていながらというところではあるが、彼は軽く流した。頭の中で、荷物確認は絶対に避けると、注意事項を書き入れる。元々、銃のせいで身体検査がアウトなのだが、比較的行われやすい手荷物の方もまずいとなると、色々と気を使わないといけなそうだった。
「んじゃ行こうぜー。ああ、俺っちの加入祝いでもいいぞ」
「それはない」
「即答！？」

レインの軽口を一刀両断し、カリクは廃屋を出た。謎の少年を、協力者に引き込んで。

それから二人は、まず古着屋へ行き、レインの服装を安物で整えた。家なし子にしてはまだ綺麗な身なりだったが、やはり普通よりは汚れていたので、違和感を消すにはそれが一番手っ取り早かったのである。結局、上は赤と黄色の派手なチェック柄のワイシャツ、下は膝や腰の部分に余裕のある迷彩柄の長ズボンという出で立ちになった。選んだのはレイン本人である。できるだけ目立ちたくないカリクは反対したのだが、

「片方が目立ってれば、もう片方はあんまり覚えられないぜ！」

という、本当かどうか際どい意見を盾に押し通された。

店を出て、街の中央付近にある役所へ向かう。キュールに出入りする馬車の情報を扱っている、交通局というところに用があった。

その道すがら、カリクはレインの格好に対する周りの反応を見ていたのだが、意外にもあまり注意を引いていなかった。それどころか、上下がピンクと淡い青とか、たまにもっととんでもない格好の人がいたりで、あまりレインが派手に思えなくなってくるほどだった。

「今は、派手なのが主流なのか？」

「主流ではないと思うぜ。でも、前より増えてる。くそー、なんか負けた気分だ」

勝っていいことがあるのかとカリクは疑問に思ったが、伝えなかった。

そうこうしているうちに、役所にたどり着いた。二階建てながら、縦横の面積が大きい建物で、くすんだ白の外壁のあちこちに窓がある。だが、隣にある黒一色の建物の存在感に圧倒されていた。四階建ての建物に、演習場まで敷地内にある東部軍基地と並んでいたの

である。
「レイン、交通局の場所は分かるか？」
「知らねー。だいたい、俺っちが役所に用があるわけないんだから、分かんないに決まってるじゃん」
「……どっかに案内図くらいはあるだろ」
ただ、今は基地に用はない。とりあえず、役所の中へと入った。中は、混んでいるわけでもなく、空いているわけでもなく、そこそこに人がいた。さすがに、レインの姿が浮く。隣を歩く彼へ、
「やっぱり、買い替えないか、それ」
そんな提案を試みるが、
「えー？　パスで」
あっさり断られ、カリクは肩をすくめた。
「おっ、ほらあったぜ、カリク」
カリクに構わず、レインは楽しげに右前を指差した。その先には、“運行情報”と書かれた掲示板があり、近日中の馬車の運行情報が記された紙が所狭しと張られている。
「なんだ、首都行きはたくさんあるじゃん。よりどりみどりだぜ？」
何が楽しいのか、レインはニコニコしていた。カリクは自分の額を押さえる。
「そりゃ、首都に行くのはたくさんあるだろうよ。問題なのは、遠回りなのがほとんどだってことだ」
「遠回り？　おっ、本当だ。レンバー経由とかもあんのか。すげーな」
もう一度掲示板を確認したレインが、驚きを示した。それから、カリクの方を向いてくる。
「遠回りじゃ、ダメなのか」
「できれば避けたい。一刻も早く行きたいんだ」
首を横に振り、真っ直ぐにレインへ目を合わせる。すると、眼前の派手な少年はニヤリとした。
「じゃあ、俺っちにいい案があんぜー」

瞬時に、カリクの頭の中で警報が鳴った。

「ここだぜ、カリク君」

「ああ、そう……」

二人がいるのは、ニケアの郊外だった。眼前には、多くの産業廃棄物が山となっている。産業で発展している街の、裏の姿だった。オイルとサビの混じった悪臭が漂っている。

レインが胸を張って解説を始める。

「たまーに、失敗作の車が、解体されて必要な部品だけ抜き取られた状態で放棄されてるんだ。で、車からは抜き取られたパーツも、別のときにまだ使えるのに放り出されてたりするんだ。実際、前に見たし」

ようするに、車を見つけようということだった。カリクは難色を示したが、もし馬車を選ぶなら一日の猶予があったため、あまり期待を持たずに探しに来た次第である。

「見たことがある、か。仮に本当に車とそれに必要な部品があったとしても、動かないと意味ないぞ」

「大丈夫大丈夫！　そこは俺っちにまっかせなさい」

どこから来るものなのかさっぱりだが、レインはやけに自信満々だった。逆に、カリクは不安がじわじわと増していく。

「まあ、とにかくまずは探すとしようぜ。話はそれからだ」

「はぁ……。そうたな。とにかく、探してみるか」

ため息をつきつつも、カリクは同意した。二人で、ゴミ山の散策を始める。

「で、ずいぶんと俺たちは神様に愛されてるらしいな」

数十分後、カリクとレインの前には、廃棄された試作車があった。白いボディの小型車で、ボンネットは全開にされている。レイン曰わく、部品がいくつか抜かれているものの、足りないものもうまいこと調達できたとのことだった。

「いやー、まさかこんなにうまく行くとはなー」

レインにとっても予想外だったらしい。ご機嫌に声を上げた。

「で、組み立てはどうすんだ？　俺は車の作り方なんて分からないぞ」

そんな彼へ水を差すように、カリクは尋ねた。しかし、レインは元気なままで、こともなげに答えを言う。

「もち、俺っちがやるぜ。あと、運転もまっかせなさい！」

「仕方ない。馬車にするか……」

「待った待った！　俺っちのこと信用してなさすぎだろ！　共闘するんだから、仲良くしようぜ」

とは言われても、そもそもは財布をスってきた相手である。戦力としては信用できても、他の部分では無条件で信頼はできない。

「むむむ。見てろよ。俺っちの技術はすごいんだからな」

カリクの内心が伝わったのか、レインは覚悟しろと言わんばかりに、左手を腰に当て、右手で指を指してきた。

「期待しないで待っててやる。馬車が出る明日の昼まではな」

「うっしゃあ！　目にもの見せてやるからなー！」

冷たい反応にもめげずに、彼は両手を上げて雄叫びを発した。それを見て、カリクは肩をすくめる。

「まあ、せいぜい頑張れ。俺は場所を確保して、眠らせてもらう」

「おう！　って、ええっ！？　そこ、そばで待ってくれるとかじゃないの！？」

「誰が待つか。一人でやってろ」

「つ、冷てぇ……」

その後も文句を垂れ続けるレインを完全に無視し、寝床を探しに廃棄物の山を離れた。

翌朝、日が出掛かっているぐらいに、カリクはレインの様子を見に行った。昨日別れた場所に着くと、周囲に転がっていた部品が消えていて、ボンネットの閉められた車のそばで、昨日出会った少年がタイヤ辺りに背を預けて眠っていた。

「これは……」

半信半疑ながら、車へ近づく。見ただけでは動くかどうかが分からなかったので、

「起きろ」

「ぶふっ!?」

傍らで目を閉じているレインの頬を叩く。足で蹴ろうかとも思ったのだが、さすがにやめておいた。

「車の修理はできたのか?」

「うー……。もう少し、愛情ある起こし方がよかったぜ……」

「叶わない願いを口にする暇があったら、さっさと訊いてることに答えろ」

なで声を簡単に流し、カリクは先を促した。不満げに口を尖らせながら、レインが答える。

「できてるよ。もう試運転もしたし」

「……本当か?」

「本当だよ! 見てろよー!」

寝起きとは思えないほどに、元気のいい反応が返ってきた。そのままの勢いで、彼は車に乗り込む。カリクは少し車から離れた。

そして、窓越しに見えている少年がハンドルを掴み、足元を一度見た。

「へぇ……」

ほどなく、タイヤがゆっくりと転がりだした。車が、動いていた。少しだけ進んですぐに止まり、レインが鼻息荒く降りてくる。

「どうよ、カリク君！　しっかり直してみせたぜ！」
「そうだな。文句なしだ」
素直に彼の手腕を認めた。ますます何者なのか怪しんでもおかしくないところだが、あくまでカリクは気にとめない。いくつか、車に関する質問をする。
「で、運転もできるんだよな」
「もち！　でなきゃ、こんな提案しないって」
「じゃあ、燃料はどうするんだ？」
「そりゃお前、決まってるだろ。俺っちたちが買えるわけないんだから、方々からちょっと拝借すんのさ」
二つ目への答えに、カリクはため息をついた。正直、どうせそんなことだろうという予想は持っていたのだが、実際にうなずかれると、頭を悩まさざるをえなかった。
「まあ、他に方法がないから、仕方ないことではあるんだけどな」
手を額に当てながら、つぶやくように言う。車の免許を取れるのが十八歳から、それも今は上流階級の人間でないとそうそう取得者がいないのだ。バカ正直にガソリンを買いに行ったところで、売ってもらえるわけがなかった。
「なーに。俺っちたちがちこっと盗んだくらいで、不利益になったりしないって。捕まらなきゃいいだけだし」
さもたいしたことではないかのような言い草だったが、時間の惜しいカリクとしては一度たりとも捕まるわけにはいかないため、かなり重大なことである。少しずつ遅くなるだけでも、サリアの安否は確実に怪しくなっていくのだ。また、なにより捕まらなければいいだけというのが、そもそも一番大変な点なのである。
とはいえ、同じく時間を考えると、ガソリンを盗難するリスクを加えてなお、車で移動した方が効率的だった。腹を決める。
「仕方ないな。俺も盗人になってやる。お前も、捕まるなよ」
犯罪を犯さないことよりも、サリアを助けられるかどうかの方が、彼には重要だった。

「合点！」

レインが明るく返す。顔には満面の笑みがあった。

こうして二人は、薄汚れた白の小型車に乗り、ニケアを後にした。

首都へとたどり着くために。

四章『囚われの少女』

時は、カリクとレインがニケアを出て数時間経ったくらいであった。場所は移って首都セルゲンティス。サリアは、茶髪の大柄な男と金髪のスラッとした体型の女、二人の軍人に連れられて、街への入り口へとたどり着いていた。ひたすらに高く白い壁が続いて、中には監獄があると言われても納得してしまいそうだった。その中に、街へと続く二枚並びの門はあった。

今、車は止められている。セルゲンティスは、さながら国境のごとく、入る者への厳しい審査があった。軍人であっても免れることはできない。

「これはこれは、ガヌ中尉。ご苦労様です」

サリアたちの乗る車を止めた入都管理局の人間が、降り出たガヌに敬礼をする。シルラは、サリアの隣に座ったままだった。

「まさか、逢い引き中だったのですか？」

「逢いび……っ！」

その管理局の男は、車の扉越しにシルラの姿を見つけたらしく、ニヤッとした。サリアの隣に座ったままの彼女が顔を引きつらせる。一方、車外で直接言葉を受けたガヌはというと、

「いやー、そうだったらよかったんだけど、残念ながら任務だ。それも超特殊オーダー。ほれ」

軽い調子で流し、一枚の紙を示した。サリアからだと、よく見えない。

「これは、軍王様の勅命書じゃないですか。どんな任務なんですか？」

管理局の男は、やや声色を高くした。どうやら、紙は勅命書のようだった。

「バーカ。こんな紙がもらえるくらいだ。極秘に決まってるだろ。いいから、早く入都許可出せ。車の中にいるもう一人も任務がらみ

だから確認は不要だ」
「了解しました。今、門を開けますから、車内で待っていてください」
ガヌの催促を受け、管理局の男は門の横に引っ付いている守衛室へと小走りで戻っていった。やがて、門が開く。開き切ったのを確認してから、ガヌが運転席へ戻ってきた。
「さ、行こうぜ、シルラ」
「……ああ、そうだな。行くとしよう」
サリアから見たかぎり、シルラはもう平時の調子を取り戻したように思えたが、
「あっれー？　シルラちゃん、もしかして逢い引き発言、まだ気にしてる？」
「なっ！　そんなわけないだろう、この阿呆が！」
からかいに対して、声を高くしたことから察するに、それは勘違いのようだった。
（仲いいなー）
攫われたにしては、かなり危機感に欠けた感想が、サリアの頭には浮かんだ。

当初こそ、サリアは当然ながら自分を強引にカリクから引き離した軍人二人を警戒していた。しかし、どうにもガヌとシルラを、完全に敵と位置付けることができなかった。理由は、大きく分けて二つある。
一つ目は、二人がサリアをいたわってくることだった。任務上そうしなければならないのか、それとも単純に二人の人柄なのか、首都へと向かっていた二日間、ことある事に気を使われたのである。
「何か食べたいものある？」とか、「しんどくない？」とか、「もしあの男に変なことをされたら、すぐに言え。容赦なく撃ち殺す」

などと言われたのだ。
二つ目は、彼らの会話だった。一例を挙げると、
「なあ、シルラー。首都まで、あとどんくらいだー？」
「それはさっき話題にしたばかりだろうが。あと一日は絶対にかかると、何度も言っている」
「遠いなー。なんかこう、ワープとかできない？」
「そんな便利な能力があれば、とっくに使っている。貴様は我慢が足らなすぎだ」
「えー？　すぐに銃口を向けてくるどっかの凶暴女よりはマシだろ」
「さて、誰のこと言っているのかさっぱりだ」
「いや、現在進行中で俺に銃口向けてる方がいらっしゃるじゃないですか。やめようぜー。今はお前が運転なんだから、ちゃんと前見ようって」
「……貴様から注意を受けようとは、私も堕ちたものだな」
こんな感じだった。サリアがいるにも関わらず、二人はかなりリラックスした様子で、コミカルな会話を幾度も交わしていたのである。そこから感じる彼らの人柄の印象がよかったので、一つ目の訳と合わせ、どうしても敵視できなかった。

入都の門をくぐり、セルゲンティスへと入る。中で一番に目に入ったのは、中央に位置する本部基地だった。大通りの先に位置し、圧倒的な威圧感と存在感を放つ、黒の建物だった。何階建てかは、遠くて分からない。
街並みに注意を移すと、こちらもすごかった。入り口付近こそ、ニケアとさほど変わりない風景だったが、大通りを進むにつれて、建物の大きさが増していった。おまけに、かなり煌びやかである。ただし、どれだけ華やかだろうと、この街を囲う高い壁と併せて見てしまうと、違和感が拭えない。逆に、無機質か荘厳な感じの建物

は、とても自然に溶け込んでいる。
「相変わらず、なーんかちぐはぐした街だよなぁ」
「そうだな。私としては、ジャラジャラ飾ったものがなければ、もう少しマシな気分になるのだがな」
「あー、まあシルラさんはお堅いですからねー。でも、あの壁は嫌だと思わない？」
「あれは仕方ないだろう。何十年もかけて造った、我が国の絶対的な防御壁だ。防衛という観点から見て、あれをなくすわけにはいかん。好きか嫌いかかと問われれば、後者だがな」
おそらくここに住まいを持つ二人でも、この街の景観には否定的なようだった。
そんな街の中を、三人が乗った車は進んでいく。
やがて、遠くに見えていた黒の建物の真下へとたどり着いた。首都軍の基地、すなわちこの国の中枢へと。
「あー、憂鬱だな。あの人とまた会うのか」
「文句を言うな。特殊任務なのだから、当然だ。それに、閣下を慕っている人間は多い。あまり滅多な口をきかない方がいいぞ」
「分かってるよ。だから、今のうちに言ってるんだ」
基地の門でまた勅命書を見せ、建物の横にある駐車場を目指した。サリアは窓から外を覗いてみたが、左側にはひたすら黒壁の建物、右側には灰色の壁が続くだけだった。しばらくしてから左折したところで、ようやく前に軍の車両が所狭しと並べられている空間が見えた。奥には演習場の類いと思しきものがある。
駐車場にガヌは車を止めた。一番始めに降りると、後方のドアを開け、
「どうぞ、お二人」
執事のように恭しく頭を下げた。気障っぽい動作だった。
「……サリア。貴女を今から軍王のところへ連れて行く。申し訳ないが、身体検査を受けた後、目隠しをしてもらうことになる」
そちらを無視し、シルラはサリアにそう説明をした。

「……別にかまいません」
サリアは素直に従う。ここで抗う意味がないし、二人をあまり困らせたいとも思わなかった。
「ありがとう」
了解を受け、シルラは礼を口にした。
「……いいから、早く降りようぜ」
置いてきぼりのガヌが、ぼそりとつぶやいた。

身体検査を終えたサリアは、目隠しをされ、シルラに手を引かれてどこか分からないところを歩いていた。ところどころから、「なんだ、あの子？」「さぁ？」というような囁きが聞こえる。軍人ばかりの場所を目隠しをされた少女が歩いているため、浮いているらしい。
建物のどの辺りかさっぱり分からなくなってからしばらくしたくらいに、シルラの歩みが止まった。彼女から声をかけられる。
「止まって」
緊張が含まれていた。どことなく、張り詰めた空気も感じる。そんな中で、シルラが大きな深呼吸をした。
「よし」
と、意を決したような言葉を小声で出したところで、ノックの音がした。
「ガヌ＝ロード中尉です。シルラ＝マルノルフ中尉もおります。件の少女をお連れしました」
シルラは、何もしていない。ノックをしたのも、言葉を発したのも、ガヌだった。ただし、相変わらずどこかだるそうであった。
「どうぞ、お入りなさい」
男性の声が聞こえた。聞こえ方から察するに、部屋か何かがあるのか、その中からのようだった。

「貴様……」
「ほらー、シルラちゃん、嫌そうだったから。それより、さっさと入ろうぜ」
驚きを見せるシルラに、ガヌは軽い調子で返し、
「失礼します」
彼女の返答を待たずに、どこかの部屋へ入る扉を開けた。
「……まったく」
呆れたような声を出したシルラに手を引かれ、サリアも室内へ入る。
「一旦、目隠しをとるぞ」
そう呼びかけられ、ようやくサリアは視界が戻った。明かりが眩しく感じる。
徐々に慣れてきた目で、部屋の中の様子を確認した。“たった一人”のためにあてがわれているにしてはかなり大きく、サリアの身近なもので表現するなら、学校の教室を二つくっつけたくらいの広さがある。床には赤の絨毯が敷かれていて、壁は白い。右側にはおそらく電報を打つのであろう機械が机の上に置いてあった。また、多くの人間の顔写真が上の方に飾られている。逆側には本棚と、なぜかワインの入れてある棚があった。この部屋の主のものだろうか。トロフィーが無造作に乗っけられている。部屋の奥の方には軍旗、国旗が並び、グラスの入った小型のケースも置かれていた。額縁に収められた賞状が、その頭上にある。
そして、
「ご苦労様です。ガヌ中尉、シルラ中尉」
中央から奥よりにある大きな机には、白髪の多い老人の姿があった。柔和な笑顔に反し、醸し出す雰囲気は厳かで緊張感がある。何か、得体の知れない恐怖を、サリアの身体は感じとっていた。
「その子が、“オモイノチカラ”を持つ少女ですか」
細い目が捉えてくる。サリアは、なぜか背筋に冷たさを覚えた。
（なんだろう。この人、なんだかすごく嫌な感じがする）

そう“心の内”で思ったのだが、
「すごく嫌な感じがしますか。申し訳ないですね。なにしろ、命のやり取りを何度もしていると、どうしても知らず知らずに対面している相手に重圧を感じさせてしまうんですよ」
目の前の老人は、それを読み取った。サリアの表情が硬くなる。
（どうして、私の考えてることが分かるの？）
「人の考えてることは、すぐに分かるんです、私は」
またしても考えていたことを、口に出される。
（まさか……）
「ええ。そのまさかです。貴女と毛色は違いますが、私も“オモイノチカラ”を持っているんですよ。サリア＝ミュルフさん」
サリアの予感は当たっていた。目の前にいる老人も、特殊な能力を持っているのだ。
「おっと。まだ名乗っていませんでしたね。私はクラカル＝エル＝ミッドハイムといいます。階級は総督ですが、“軍王”と言った方が分かりやすいでしょう」
「“軍王”……」
ラスタージ共和国の頂点に君臨する者の称号を、サリアは繰り返す。目の前にいる人間がまさに、当人であるミッドハイムだった。
「ええ。驚かれたでしょう。国のトップが私のような老人で」
彼は自分に関してそう言ったが、ただの謙遜にしか思えなかった。素人目にも、隙がない。
「……そんな方が、私になんの用ですか」
サリアは明らかな警戒を表に出した。しわを寄せて、睨む。
「警戒されていますね。当然ですが、残念なところです」
言葉と裏腹に、老軍人の様子に特別残念な感じはない。
「まあ、本当は貴女が私をどう思おうと、問題はないんですが」
自分で言ったことを、あっさりひっくり返す。サリアの考えていることに、深い興味はないらしかった。
「重要なのは、あくまで貴女の持つ“力”。大変でしたよ。少ない

情報から、力についての予測を立て、その持ち主の居場所を把握するのは」

柔和な笑みを崩さないまま、軍王が告げてくる。

「つまり、用があるのは、貴女ではなく、貴女の能力です」

一個人をまるで無視した言葉だった。彼にとってサリアは、ただ単に力の所有者なのだ。

「貴女のオモイノチカラは、私のものと違って、特殊な部分がありますからね。じっくり研究させてもらいますよ。今日はただの顔合わせです。貴女の心の内から、力を持っていることは確信が持てましたし、もう退出していただいてかまいませんよ。地下の特別室に連れて行ってください、ガヌ中尉、シルラ中尉」

「了解です」

「はい」

まだ笑みの裏にある表情を見せることなく、ミッドハイムは退室を命令した。部下二人が返事する。

「行くぞ、サリア」

シルラに手を再び掴まれた。彼女は逆の手で目隠しを出す。サリアの視界は、再び真っ暗になった。

「待ちなさい。シルラ中尉」

「はっ。なんでしょうか」

そのまま部屋を出ようかというところで、ミッドハイムがシルラを呼び止めた。

「疑問を持つというのは、人として当然のことですが、中には持ってはいけない疑問というのがあります。なにより、遥かに上の階級の者がやることに逆らってはいけないものです」

「……はい」

「ますます裏を感じますか。まあ、どうしようとも貴女は貴女ですから仕方ありませんね。ただ、余計な詮索や邪魔は御法度ですよ」

「上辺だけの返事は必要でしょうか」

「いいえ。本音との違いで私を笑わせたいというのなら、話は別で

すが」
「……失礼します。行くぞ、ガヌ」
意味深な会話を交わしてから、シルラはガヌを促し、部屋を出た。
サリアは自分の手を掴むシルラの手が、少し汗ばんでいるように感じた。
扉を閉めた音がした後、シルラはその場から離れだした。手を引く彼女は、少し足早になっているようにサリアは思った。
「シルラ。ここらへんまで来れば大丈夫だ。そんなに焦って歩くなよ。サリアちゃんがついていくの大変そうだぞ」
ガヌも同じことを思っていたようで、階段を下りたあたりで後ろの方から呼びかけた。
「っ……」
言葉にならない声を発して、シルラが足を止める。掴まれている手は、強く握られていたために少し痛かった。
「話なら後でいくらでも聞いてやるから、今はとりあえずゆっくり歩け。な？」
「ガヌ……」
常の毅然とした口調とうって変わり、どこか泣きそうだった。
「大丈夫だって。別になんにもしてきやしないさ」
「だといいが」
「ったく。いつもは強気な態度のくせに、打たれ弱いよな、お前って」
「うるさい。どっちも私の性格だ」
「ああ、そうかい」
ガヌの声は、優しかった。シルラはシルラで、手の力がほぐれる。
サリアは自分の置かれている状況が、とても安全とは言えないと分かりながらも、二人の関係に考えを傾けずにはいられなかった。
「ガヌ」
「んー？」
「お前に言うのはあまり気が進まないが、今日のところは礼を言っ

ておく。ありがとう。ノックの件も含めてな」
「引っかかる言い回しだけど、どういたしまして」
続けての会話を聞いていて、サリアはとてもカリクに会いたくなった。
（カリク。きっと、助けに来てくれるよね）
彼の積んできた訓練の数々を、サリアは一部しか知らない。しかも、戦い方を学んでいるからといって、助けに来てくれるという確証はない。それでもサリアは、疑わなかった。きっとカリクは、自分を助けに来てくれるに間違いないと。

冷静さを取り戻したシルラに連れられ、サリアはまた基地の内部を移動した。今度は何度も階段を下りていたのに加え、少し涼しい空間へ出たので、おそらく地下だろうと予想した。
長い廊下を直進したり曲がったりを繰り返し、しばらくして、
「ここだ」
というシルラの声がしてから、扉を開ける音が響いた。辺りがとても静かなので、不気味さがあった。閉める音も、同じ感じに耳へ入る。完全に閉まりきったところで、目隠しをはずされた。
「うわぁ……」
さっそく開いた目に飛び込んできたのは、手狭な部屋だった。しかし、思わず感嘆を漏らしてしまうほどに、綺麗な室内である。床は赤い絨毯が敷かれ、右奥には真っ白なシーツのベッドがあり、真ん中には花瓶を乗せたテーブルが置かれていた。下手な宿泊施設より、レベルが高い。
「貴女には申し訳ないが、ここにずっといてもらうことになる。言葉を選ばなければ、監禁と言ってしまって差し支えない」
あけすけな表現だった。ガヌが肩をすくめる。
「まあ、そういうこったな。出れても研究所に行くくらいだろう。

会えるのは俺たち軍人か、変な研究者共くらいだ」
「だろうな。ついでに伝えておくと、部屋の内外に監視も一人ずつつけさせてもらう。ただし、内側については、私から必ず女性にしてもらえるよう取り計ろう。私もできるかぎりはいれるようにする。貴女は嫌かもしれないが」
彼女らの言葉は、とても誘拐犯という悪人に思えないものだった。思わず、
「いえ、そこまでしていただかなくても」
と、遠慮してしまうくらいに。
「いいや。できりかぎりはさせてもらう。貴女は気にしなくていい」
「そうそう。こっちが勝手にやるって言ってるんだ。ただでさえ強引に連れてきたんだし、埋め合わせにはならないだろうが、素直に受け入れておいてくれ」
やはり、悪人には思えなかった。
「ただ、今日のところは私たちは失礼させてもらう。色々やることがあるのでな。貴女も休むといい。ゆっくりとは言わないがな」
「は、はい」
口調は堅いが、思いやりのある彼女にサリアはうなずいてみせた。
そこで、外から声がした。
「ガヌ中尉、シルラ中尉。お待たせいたしました」
監視の人員である。ガヌが部屋の扉を開けると、男女が一人ずつ、外に立っていた。
「おー、ご苦労さん。行こうぜ、シルラ」
「ああ。ではな、サリア」
ガヌの呼びかけに応え、シルラはサリアにあいさつしてから、二人で扉へ向かった。去り際、シルラは監視の二人組に、
「上客だ。困らせるなよ。手荒な真似もするな」
そう言い聞かせた。
「……過保護だねぇ」
隣では、ガヌが苦笑していた。

要人を匿うための地下室を後にして、シルラはガヌと肩を並べて、廊下を歩いていた。

「で、何を考えてたんだ。あいつになんか言われたろ」

あいつとは、ミッドハイムのことである。切り出したのは、先ほどの総督室を出るときのことだった。

「ああ、あれか。ずいぶんとあっさり、あの子との対面を終えたなと思ってな」

「あー、確かに誘拐させるほどご執心なわりには、特に目立ったことはなんにもしなかったよな」

「そうだろう？　まるで、今のあの子には用がないようだった」

「用がない？　どういうこった」

ガヌが訝しげな表情を浮かべた。

「はっきりとは説明できん。なんとなく、そう感じただけなのでな」

彼の問いに、シルラは首を横に振った。

「なんにせよ、あの子にこれからいいことが起きるとは思えん。せめて、人間として扱ってもらえればいいが……」

心配そうに、歩いてきた廊下を振り返る。ガス灯が怪しく並んでいた。

「人間としてっていうのは無理だろうが、貴重な人材だ。研究者共も“いつもみたく”乱暴にはしねぇさ。それに、させたくもないんだろ？」

「当たり前だ。せめて、私が手を出せる範囲は救ってやりたい。それに、お前も見ただろう。彼女を攫うときにいた少年を。彼と引き裂きたいと思うか？」

熱い口調だった。同時に、研究者たちへの嫌悪感も混じる。傍らを歩くガヌの目を見つめた。

「んあ？　い、いいや、思わないな」

彼は、一度目線を泳がせたが、最終的には目をしっかり合わせて答えてきた。
「お前はいなかったけど、あのとき奴は銃を向けるのをためらわなかった。余程、大事な存在なんだろうな。“引き金を引く覚悟”があるかどうかは、まだ分からないけどよ」
シルラから目を離し、前を向く。少年のことを思い出してか、顔には微笑みがあった。横顔に、シルラは尋ねた。
「……あの子を、救えると思うか？」
「それは分からない。分からないが、俺は賭けてるぜ。何かしてくれるってな」
表情を変えずに、強く言い切った。
「そうか。なら、私もそう考えておくとしよう。どうせ……」
シルラは自嘲気味に微笑んだ。一度言葉を切り、横目で後ろを見る。
「私たちが何かを起こしても、どうにもならないのだからな」

ガヌとシルラが地下を後にしてどれくらいたっただろうか。サリアは、女性軍人の監視の下、できることもなくベッドに横たわっていた。外が見えないので、時間が分からない。かといって、見張りをしている軍人に訊く気にもならなかった。
心の中は、不安でいっぱいだった。これからどうなるのか、まったく分からない。ミッドハイムのことも、不気味だった。一体、何をされ、何をさせられるのか、皆目見当がつかない。
（カリク……）
幼なじみの少年の名前を、心中で呼ぶ。彼女の場合、本当に彼へ届くかもしれない呼びかけだった。ただし、どういう条項が満たされていれば伝わるのかが分からないため、望み薄の行為である。
と、そこで地下室に訪問者が現れた。

「邪魔するぞ」
「お、お疲れ様です。シルラ中尉」
シルラだった。監視をしていた軍人が、慌てて頭を下げる。
「ああ、お疲れ様。悪いが、少し彼女と話したいことがあるから、席をはずしてくれるか？　三十分ほど、休憩にしていい」
「休憩、ですか？　しかし、今は私の監視時間帯で……」
「いいから、行ってこい。私が勝手に代わると言っているだけなのだからな」
「わ、分かりました」
渋る部下の肩を叩き、シルラは微笑んだ。そう何度も上司の頼みをつっぱねられないと思ったのだろう、部下は承諾した。「失礼します」と言ってから、部屋を出る。サリアとシルラだけが残った。
「……何か用事ですか？」
敵意はなく、ただ純粋な疑問だった。
「用事だな。ただし、個人的な話だ」
シルラは、部屋の真ん中にあるテーブルの椅子へ腰を下ろした。背もたれに体重をかける。
「個人的な話？」
彼女からの個人的な話とはなんだろうかと、サリアは首をひねる。思い当たる事柄がなかった。
「ああ。メシアで貴女を強引に連れ去ろうとしたとき、少年があの場にいただろう。彼のことでちょっとな」
「カリクのこと……？」
ますます、どんな話をする気なのか分からなくなる。カリクの話というのはなんなのか。彼とは、関わりがないはずである。
「そうだ。私はちらっと見ただけだが、彼は貴女を護ろうとしていたのだろう？　ガヌはナイフを持っていた。なのに、あの少年は貴女を護るために、奴と対峙した」
「それが、どうかしたんですか？」
彼女が何を言わんとしているのかが、見えてこなかった。

「特別どうというわけではない。ただ、彼にとって貴女が、命懸けで護りたい大事な存在だというのを確かめたかっただけだ」
サリアの問いに、シルラは微笑む。その瞳に、ある感情が浮かんでいる気がして、尋ねた。
「シルラさん、羨ましいんですか？」
瞬間、眉が動き、彼女は目を見開いた。まさかとサリアは思っていたのだが、間違っていなかったらしいと思い直す。シルラの瞳に浮かんでいた感情は、羨望だった。
「羨ましい、か。そうだな。私は、あの少年に命を張ってもらえる貴女が、羨ましいのだと思う」
今度は言葉でも認める。続けて、サリアへ訊いてきた。
「貴女から見て、あの少年はどんな存在だ？」
軍人としてではなく、一人の女性としての質問に、サリアは思えた。ゆえに、同性の一人として答える。
「大切な人です。家族とは違うけれど、とても特別な位置付けにいる人。それが、私にとってのカリクです」
「ふん。恥ずかしげもなく、よく言ってくれるものだ。憎たらしくなってくる」
頬杖をつきつつ、シルラは苦笑した。穏やかな空気が流れる。自分が捕らわれの身であるのを、思わず忘れてしまいそうだった。
「シルラさん。私からも、一つ訊いていいですか」
「なんだ？」
「ガヌさんとは、どういう関係なんですか」
その雰囲気に乗じ、ずっと気になっていたことを訊いてみる。ここまで彼らと場所にいて感じ取ったかぎり、ただの同僚には思えなかった。
シルラは、最初こそポカンと口を開けたが、
「ガヌか。別に、あいつはただの同僚だ」
すぐに素っ気ない言葉を返した。ただ、表情には寂しさがよぎった。恥ずかしさでも、動揺でもなく、寂しさである。何がある。直

感が告げていた。
「本当に？」
試しに、追い討ちをかけてみる。今度の返答は、早かった。
「本当だ。他に何があるわけでもない。たまたま同期で、たまたま同じ任務にあたるのが多いだけだ」
強い否定だった。だが、表情との総合を考えると、サリアはそのままの意味で受け取れなかった。
「シルラさん……」
はっきりとした言葉にはせず、その一言に思いを詰める。向こうも察したようで、
「詳しい事情は分からないが、ガヌは何かを背負っている。近づいたと思っても、真に深いところまでは踏み込ませようとしない。誰にもな」
短くも、的確な表現を紡いだ。詳細は伝わらなくても、彼女の想いは感じ取ることができた。
「だから、私も隣に行けない。行こうとしても阻まれる。どうしたらいいのか、もう分からない、私は」
肩をすくめ、彼女は天を仰いだ。サリアに向き直り、話しかけてくる。
「貴女は、軍のトップが関わる陰謀の中心に置かれていながら、見たところ絶望していない。なぜだ？　なぜ、そんなに輝いた目をしていられる？」
なされた質問は、サリアには簡単に答えられるものだった。一瞬、目を細め、口を開く。
「シルラさんとガヌさんが、誘拐犯らしくないから、っていうの“も”ありますね。でも、一番大きい理由は……」
一呼吸置き、堂々と言い切る。
「信じているからです。きっと、カリクが来てくれるって。どんなに困難でも、どんなに相手が強大でも、カリクなら、きっと」

疑いはなかった。証拠のない自信だが、それがサリアにとっての事実なのである。

「信じているから、か。なるほどな。それが、絶望を打ち消す方法か」

シルラは、口元をわずかに緩ませる。どこか、すっきりした感じだった。

「礼を言う。私も、貴女と一緒に信じてみよう。もう少しだけ、な」

「……はい」

彼女の目線を受け、うなずく。心の内で、少年を想った。

（信じてるよ、カリク）

揺らぐことなく、輝き続ける。

五章『闇での遭遇』

少し、時間は巻き戻る。サリアが首都で、地下室に入れられたくらいだった。

原っぱの真ん中を貫くように伸びる、とりあえず道として整備されたオフロードを、一台の車が走っていた。白の車体のそれは、カリクとレインの乗っているものである。二人がニケアを出て半日以上が経ち、太陽の位置は低くなっていた。

「首都まで、あと丸一日くらいか。確実に燃料不足だなー」

「……別に、今更念を押さなくても、やるときはやる。手段を選んでいられないって言ったはずだ」

助手席に座るカリクは、ハンドルを握るレインの顔を見ることなく言葉を返す。いかんせん、免許を取得できる年齢に達していない二人は、免許など持っていないのだから、燃料は勝手に拝借するほかない。

「悪かったよ。まあ、金を置いていくつもりだってだけで、良心的だと思うぜ」

レインが唇の端を持ち上げる。横目で見てきたので、

「前見ろ」

と、冷たく言い放った。

「へいへい。つれないわねぇ、カリク君は」

気持ち悪い口調で文句を垂れ、レインは前に向き直った。と、何かに気づいて、ブレーキを踏む。助手席のカリクは前につんのめった。体勢を直してから、隣の少年を睨む。

「なんだ、急に」

「ああ、悪い悪い。あれが目に入ったもんで」

まったく誠意の感じない謝罪の後、前方を指差した。そちらに目をやると、

「なんだよ。ただの立て札だろ」

二方向に割れた分かれ道と、どこに続くかを表記した木の札があった。片方は、首都セルゲンティスへ向かう道。もう一方は、長くは北のミリシアへ繋がっている道だった。あとは、最寄りの町の名前と、だいたいの距離が書かれている。

「あれ自体はな。書かれてる、最寄りの町が問題なのさ」

レインが、言いながら車を降りる。首をひねりながら、カリクも続いた。二人で、札の前に立つ。

「このミリシア方面に書いてある、シャズって町だ。ここに、確か軍の秘密の施設がある」

「秘密の施設？　シャズに、軍の施設なんて、なかったと思うんだが」

顔をしかめた。成り立てとはいえ、少将の父を持つカリクですら、そんな話は聞いたことがない。

「そりゃ、秘密だからな。俺っちが知ってるのは、境遇と偶然のせいだよ。首都の研究所と軍の、かなり上の方の人間じゃないと、普通は知らない」

軽い口調のレインだが、話している内容はかなりとんでもない。少将クラスよりも上の人間しか知らない情報を、なぜ知っているのか。

「お前、何者だ」

素直に思ったことをぶつけてみる。

「この国の被害者、かな？」

含み笑いから真意を見い出すことは、カリクにはできなかった。

「とにかく、シャズには間違いなく施設がある。見つけられるかどうかが分からんけど、痕跡があれば俺っちが探し出せるかもしれない。どう？　寄り道になるけど、探ってみるかい」

自分についての話を切り、レインはそう尋ねてきた。カリクは、黙考する。寄り道なので、時間が無駄になってしまうかもしれない。しかし、父親も知らない情報が手に入る可能性もある。ほぼ、何も知らない現状では、かなり重要なものになるのはまず間違いなかっ

た。
　サリアを助けるために時間を無駄にしないか、それともサリアを助けるために寄り道をするか。しばらくして、カリクは結論を口にした。
「……シャズに行く。早く出るぞ」
「おっ、即断即決とは素晴らしいね。さすがカリク君」
　カリクは無視して、車へ戻る。後ろから、
「もう少し相手してくれても、いいと思うんだけどなー」
　と聞こえたが、気のせいにした。

　三十分ほど車を走らせてたどり着いたシャズの町は、カリクの家があるキュールよりも、さらに小さなところだった。ほとんどが農業と畜産業を生業にしているので、感覚としては村に近い。
　人工的なものが少ない、緑と土と空が存分に見られる景色を眺めながら、カリクがつぶやく。
「……家と人と、牛と畑しかないな」
「いやいや。牛乳と牛肉とチーズもあるぞ」
「飲食物が増えただけだろ、それ」
　すかさずつぶやきを拾ってきたレインに、気のない言葉を返す。
「おぉ……」
　すると、彼は完全に横を向いてきた。目を見開いている。何事かと一瞬訝しみ、すぐにあることに気づいた。
「どこに目を向けてんだ！　前を見ろ、前を！」
「あ、ごめんごめん」
　指摘され、慌ててレインは前へ顔を戻す。特に何も起きなかったが、場合によっては大惨事になっていてもおかしくない行為だった。
　声を荒げる。
「何してんだよ！　下手したら、事故だぞ！　誰か轢いたら、シャ

レにならない！」
「悪かったって。いや、まさかカリク君が、俺っちの発言に、ツッコミを入れてくれるとは思ってなかったんで、びっくりしちまってさぁ」
　一方のレインは、あまり脇見運転自体には動揺していない。別の事柄に驚いていた。彼の言い訳を聞いて、思う。
（雑に流した言葉がツッコミ扱いとは……）
　いちいち驚かれていては、命に関わるので今後はもう少し反応してやろうかと、本気で考え出すカリクであった。
「それにしても、お前の言ってる施設はどのあたりにあるものなんだ？　町の規模が小さいにしても、しらみつぶしに探す余裕はないぞ」
　一旦、ツッコむツッコまないを脇に置き、施設についての話題に移る。
「んー。見当をつけるとしたら、廃屋だな。人が住んでないのに、人の出入りした跡があれば、限りなく黒だ。軍内部でも一級品の機密事項を扱ってるところなんだから、あんまり人が近づかない場所にあって然りだろうさ」
「廃屋か……。探してみるしかないな」
　この小さな町なら、合致する建物はさほど数多くなさそうだった。まずは役場などがある、町の中央へ車を走らせた。

「今のところ、一番怪しいのはここかな」
　かすれた文字で、『宿泊施設・ジャッジ』と書かれていた。郵便受けを見たところ、ジャッジはファミリーネームらしい。
　町中を回った結果、廃屋はやはり数少なく、その中でレインが目をつけたのは、かつて宿泊施設だったのであろうこの建物だった。一階建てだが、敷地が広く、おそらく潰れてから年単位は経ってい

そうな様子である。
「施設にするなら、ある程度の広さが必要だから、ここが一番怪しい、か。確かに、見方としてはありだな」
カリクは入り口を少し見つめ、中へいこうと足を前へ動かした。
「動き出すの早いなー」
後ろからそう言ってきたレインへ、
「時間が惜しいからな。何度も言わせるな」
横目だけを向けた。すぐに前へ戻す。「へいへい」と気のない返事ののち、相棒となっている少年は横に並んできた。
中は薄暗かった。まだ夕日が差し込んでいるものの、仄かな橙色は、不気味さを演出している。あちこちにホコリが溜まっていた。
「長いこと使われてなさそうだな」
天井の隅に張られている蜘蛛の巣を見上げながら、カリクはそう口にした。
入ってすぐにある、ロビーらしき場所だった。宿泊施設のロビーだが、見た感じは病院の待合室に近いものがある。受付が左にあり、あとは右隅に至るまで五人がけくらいの長椅子が、三列ほど並んでいる。廊下は、正面と左の二方向に伸びていた。
「いいや、そうでもないかもしれないぜ、カリク君」
「何？」
自分の言葉に対するレインの返しに、耳を疑った。
「ホコリの積もり方に、なんか差があるんだよ。例えば、ここことか」
彼が示したのは、受付の内側へ入るためにある、小さな地面から浮いた扉だった。細い扉の上部を見ると、ホコリの濃さが違って見えた。一度なくなってからまた積もったという感じである。
「なるほどな。誰かが一回触って、積もり方の差が出てるわけか。でも、近所の子供が遊びに来ただけかも知れないぞ」
「そーだなぁ。でも、俄然やる気出てきたぜ」
「なんのやる気だ」
先ほど頭に浮かんだ考えのとおり、気のない感じながらも言葉を

返す。するとレインは、振り返ってきて、
「なんか、宝探しみたいで、ワクワクするじゃんか」
活き活きとした表情をした。カリクは、肩をすくめただけだった。
やり取りもそこそこに、二人は探索に移る。

「うーん。ここもはずれかな。なんの形跡もないし」
「じゃあ、次だな」
レインの発言を受け、カリクは先に部屋から廊下へ出る。「ほいほい」と、レインも続いた。
二人は一緒に行動して、廃屋の中を探索していた。分かれてもよかったのだが、万一ここに施設があり、何者かがいたら危険だという判断だった。日が沈みかけており、灯りもないというのもある。
回り方としては、ロビーから左に伸びていた廊下の方へまず行き、一部屋一部屋確認しながら、一週してロビーの方へ戻るというようなやり方にした。五部屋程度確認は終わっており、今のところ何も発見はない。
「ん、廊下が二手になってる」
おそらく半分あたりと思われるところで、レインが足を止めた。廊下が真っ直ぐと右折に分かれていたのである。徐々に面積を増している暗闇の中、ホコリをかぶった案内板のかすれた文字を目を凝らして読み取ったところによると、直進すると食堂と浴場があるらしい。
「先にこっちに行くか」
「あいよー」
特に後回しにする理由もない。二人は直進した。ほどなくして、右手に両開きの扉が現れた。扉の上を見ると、“大食堂”とある。
ただ、食の字はほとんど判別できなくなっていた。
「では、失敬」

レインがカリクの前に出て、扉をゆっくりと内側へ開ける。錆びた音が響いた。中には、乱雑に椅子が乗せられた机が並んでいる。二人とも中に入り、カリクが後ろ手で扉を閉めた。

「……一層汚いな、ここは」

カリクがつぶやいた。廊下よりも、空気がまずくどんよりとしている。

「そうだな。でも、ここは当たりかもしれないぜ、カリク君」

室内を見回していると、レインが閉めた扉の方を向いて屈み、床を見ていた。

「どういうことだ？」

「入り口とおんなじだよ。ホコリが薄いとこがある。つい最近に、扉が開け閉めされた痕があるし」

「何？」

彼の言葉を聞いて、カリクは隣にしゃがみ込んだ。確かに、入り口よりもはっきりと、ホコリの濃さが違っていた。

「誰かがここに入ったってことか」

「そういうこと。しかも最近だ。下手したら、ついさっきかもしれないぜ」

説明しつつ、レインは腰を上げる。顔には、いたずらっぽい微笑を浮かべている。

「ついさっき、か」

もし本当に秘密の施設がここにあり、扉を開けて食堂に入った人間が施設に関係しているならば、見つかるとかなりまずい。秘密裏にされている場所なのだ。親切に、玄関まで送ってもらえるとは思えない。

「慎重に探るぞ。お前の見立てが正しいなら、敵と遭遇するかもしれない」

「あいよ」

声を抑えたカリクの言葉に、レインが呼応する。それから二人は、食堂内を隅々まで確認していったものの、壁にも床にも、怪しい痕

跡は見られなかった。
「あっりー？　こりゃ、はずしたかな」
　一番右隅の壁におかしなところがないのを確認したレインが、首をひねった。危機感なく、声を響かせる彼に、カリクは眉根を寄せる。
「敵がいるかもって言ったよな。あんまり、でかい声を出すな」
「いや、もう、むしろ見つけてもらった方が楽だと思うぜ。無駄な時間と労力が省ける」
「敵にやられて、時間が止まるかもしれないけどな」
　身体を伸ばしながら、暢気な発言をしたレインに、皮肉を込めた言葉を贈る。今のところ他の人間の気配は感じないが、痕跡があったのだから、油断はできない。
「確かにそうかもしれないけど、あんまり気を張りすぎてもどうかと思うぞ、カリク君。現に、今俺っちたちは生きてるし、敵の姿も見てない。見えないものに気を使うことほど疲れることはないぜ」
　しかし、対する少年は気楽なものだった。笑顔を見せる余裕すらある。
「……ずいぶんと楽観的だな」
「んー、そうか？　まあ、そうなのかもな。“そうじゃないとやっていけなかったし”」
　カリクがジトリとした目を向けると、レインは調子を変えることなく、そう言った。いかにも、意味ありげに。
「ああ、そうかよ」
　カリクは短い言葉を口にしただけで、今の話題を切った。もちろん、レインの言い回しは気になっていたが、掘り下げる必要性はないという判断をしたためである。
　気持ちを探索に戻す。食堂はもういいだろうと思ったカリクの目線は、奥にある厨房に向いていた。食堂と直でつながっており、二人の位置からも中を窺うことができる。錆だらけで、鍋がひっくり返っていたり、包丁類が乱雑に置かれていた。落ちている、と言っ

た方が適切かもしれない。
「あの中も見てみるか」
「ん、厨房か。そうだな、一応見てくか」
カリクの案に、レインも乗っかる。二人で、食堂端から厨房へと入った。
内側から見ると、中の荒れ具合はより酷かった。人が三人は通れるであろう通路があり、床は油染みや錆が覆っていて、やはり食器類や調理器具が散乱している。手前には水場があり、その隣には火を扱うのであろう場所がある。どちらも、今は使えそうにない。一番奥には、人間二人は突っ込めそうな大きさの冷凍庫が見えた。
「こりゃひどいな」
惨状という言葉を使ってもいいであろう光景に、カリクはそう漏らした。隣のレインもうなずく。
「そうさな。ずいぶんと荒れ放題なもんだ」
「とりあえず、見てみるか」
観察もそこそこに、本格的な探索に入る。戸棚なども丁寧に見て回るが、特に不審な点はなかった。
「うーん……。ここにも、なんもないのか。俺っちから提案しといてなんだけど、気が滅入ってくるぜ。汚いしー」
レインが、水場の周辺をいじくりながら嘆く。冷凍庫のそばにいたカリクは、たしなめる。
「元々、機密なものなんだ。簡単には見つからないだろ。もしかしたら、見つからないまま終わるかもしれないんだ。もう少し辛抱強く探せ」
「そうは言うけどよー。正直しんどいぜ……」
文句は言いつつ、手は止めない。言葉ほど、我慢が利かないわけではないらしい。カリクも、黙々と作業を続ける。冷凍庫を開けようと、手をかけた。手前に引っ張る。その感触に、眉をひそめた。
「ん……？」
「どうかしたのか、カリク？」

レインが気づき、後ろにやってきた。肩越しに覗き込んでくる。
「いや、この冷凍庫、長いこと放置されているにしては、簡単に開きすぎる気がして……」
しゃべりつつ、開く。生肉や魚、またそれの鮮度を保つための氷類もなく、空っぽだった。一見、おかしなところはない。しかし、今度はレインが気づく。
「なあ、底のところがはずせるんじゃないか。妙に綺麗だぜ」
「確かに、そんな感じがするな。ちょっと待て」
カリクがしゃがみ、冷凍庫の底をいじってみる。すると、動く感触があった。
「当たりだな。上か下に押すと、横にスライドさせられるみたいだ」
言いながら、実際にやってみせる。完全に動かし終えると、さらに深い闇へと誘うであろう、下り階段が待ち受けていた。
「地下への階段、か。よくもまあ、こんなもんを作ったもんだ」
「だなー。でもまあ、首都の奴はやることがぶっ飛んでるから、想定の範囲内ではあるけど」
二人で、ぽっかりと口を開けた闇を覗き込む。先はほとんど見えない。
「さすがに灯りがいるな。レイン、お前なんか持ってるか」
「いや、俺っちは持ってない。でも、廊下にガス灯ならあったと思うぜ。付くかどうかは分からないけど」
「試す価値はあるな。行くぞ」
「あいよ」
単独は危険だという意図を汲み取り、レインが同意を示した。一旦キッチンを離れ、食堂を通り抜けて廊下へ出る。ガス灯は、壁から伸びた台座にくっついていた。
「ん、固定されてる」
「関係ない。とりあえず、離す」
レインの言葉を弾き、服の内に隠していた銃を抜く。ためらいなく、壁とガス灯をつないでいる部分を打ち抜いた。甲高い銃声が響

く。ガス灯が、床に落ちた。レインが口笛を吹いて、「過激だねー」と軽口を叩く。

「敵さんを警戒するんじゃなかったの？」

「でかい声を出してたお前に言われるとはな。別に、構わないさ。あの隠し戸を開けた時点で、地下に音は響いているだろうから、今更、感づかれることを警戒する必要はないだろ」

「そんなもんか？」

カリクはガス灯を拾うと、火がつくかどうかを試した。問題なく、仄かな紅い光が灯る。首をひねっているレインに呼びかけた。

「行くぞ」

「あいよー」

灯りを片手に、暗闇への入り口へと戻った。踏み込む前に、カリクは傍らの少年へ問いかける。

「準備はいいか、レイン」

「もち。そっちこそ、ひびるなよ」

「ふん」

返ってきた答えを聞き、カリクは満足そうに鼻で笑った。今から潜る黒を真っ直ぐに見つめ、

「じゃあ、下りるぞ」

「よしきた」

カリクを前にして、二人は階段を下りだした。

「本当に真っ暗だなー。ただでさえ夜だっていうのもあるけど、上の光が全然届いてねーや」

数十段進んだところで、レインが後ろを横目で見た。カリクも声につられて、振り向く。それほど実感はなかったが、既にそれなりの深さまで潜ってきていた。

歩み続けると、やがて階段が終わり、開けた空間に出た。端っこは目視できないが、足音の反響音でなんとなくの広さを想像する。

「けっこう広そうだな」

「だな。ちょっと、壁際を見てみようぜ」

レインに促され、壁づたいに部屋の左端へ行く。カリクの手中にあるガス灯が、“それ”を照らし出した。
「……なんだこりゃ」
あったのは、多くのボタンやレバー類だった。簡単に言えば、巨大な機械が設置されていた。
「へぇー。これ、首都でも限られたところにしかない、“パソコン”ってやつだぜ」
「パソコン？　なんだそれは」
聞き慣れない単語だった。
「俺っちも詳しくは理解してないんだけど、なんでもいろんな情報とかを保存したり解析できたりするらしい。ざっくり言うと、すごい機械って感じだな」
「一ミリも分からないな。とりあえず、こいつは今、使えるのか？」
説明されてもピンとこなかった。話題を変える。
「いんや、たぶん大本のエネルギーが供給されてきてないみたいだから、使えないと思う」
「その大本のエネルギーって、なんだ？」
「そこまでは分かんない。首都の研究所にあったやつは、原理は理解できなかったけど、風とか火とかから動力を作ってるとかなんとか聞いたな」
「風に火？」
ますますわけが分からなかった。その要素からこの機械を動かすというのが、腑に落ちないのである。“電気”というエネルギーがこの国で発見されてから歴史が浅く、カリクが科学分野の知識を持っていなかったので、当たり前のことだった。
「まあ、細かいことはメシアの工場のことでも調べてみなよ。多少なりとは、学べると思うぜ」
しゃべりながら、レインは眼前の機械をあちこち触りだした。しかし、反応はまったくない。
「んー、やっぱだめか」

「それはもういい。こだわる理由もない。他に何かないか探るぞ」
頭をかく彼に、カリクはそう声かけをした。時間がもったいないというのもある。大きな機械から光源を離し、別の場所を見ようと振り向いた。
「右に避けろ、カリク！」
と、不意にレインが叫んだ。反射的に言われた通りの方向へと避ける。その数瞬後に、機械の方へ何かがめり込んだ。カリクはわざわざ振り向いて確認したりはしなかった。疑いなく、銃弾に間違いなかったのである。敵に場所が丸分かりになってしまうと考え、ガス灯の光を消した。完全に近い暗闇が、身体を包み込む。
しばらく、音すらも消えた。カリクは、見えざる敵に位置を悟られまいと黙って、物音も立てないように息を潜めているのだが、レインと見えざる敵も、同じことをしているらしかった。
それから一番に耳に入った音は、低く重たい男の声だった。
「よくできたガキどもだ。動いたら危険なことを、よく分かっている」
カリクのでもレインのものでもない、敵の声。口を開いたわけが、痺れを切らしてか、それとも余裕からかは判断できなかったが、とにかく聴覚で敵の位置を探りにかかる。
「それにしても、お前ら何者だ？　ただのガキなら、こんな冷静な判断はなかなかしない」
カリクは、何も答えなかった。レインも、黙っている。
「返事もなしか。ふん、本当によくできた奴らだ。それとも、怖くて動けないだけか？」
男の言葉が続く。
（ちっ。だいたいの方向の予想ができるくらいか。位置が全然分からねえ）
しかし、場所の予測が立てられない。内心でカリクは悪態をついた。
そのとき、近いところから何か風を切るような音がした。聞いた

ことのあるものだった。
「ぐっ！？」
男が突然、苦しげに声を漏らした。何が起きているのかはまったく見えないが、先ほどの音から察する。
（さっきのは、“刃物が風を切る音”だ。レインが攻撃したか）
納得できる解答を引き出すと同時に、疑問も生まれる。
（けど、どうして敵の位置が分かるんだ。ある程度、暗闇でも目の利く俺すら、なんにも見えないっていうのに）
「ずいぶんと、厄介なことをしてくれるものだな。暗闇で正確に、位置を当ててくるか。数ヶ月前に、火事に乗じて“ジーニアス”から逃げ出した子供がいたと報告をもらっているが、お前がそうみたいだな」
（“ジーニアス”？）
ひそかに首をひねる。耳にしたことのない単語だった。おまけに、火事や報告といった、気になる言葉も混じっている。
ただ、当の本人はやはりしゃべらない。口車に乗って、うっかり場所を知らせまいとしているのだろうか。
「らちがあかないな。奇襲も失敗しているし、そっちがこっちの場所を把握できるなら、この状況にこだわる理由はあるまい」
彼の対応を受け、敵の男がそう言うと同時に、急に明かりが点いた。ガス灯ではない、何か人工的な光だった。
「あら、電球っすか。まいったね、こりゃ」
姿が晒された時点で、レインはすっぱり黙るのをやめた。敵へ目をやる。カリクも、彼と同じ方向を見た。
立っていたのは、大柄な男だった。筋肉質で、岩のような出で立ちをしている。重厚という言葉が、カリクの頭に浮かんだ。黒の軍服を着ていることから、軍の関係者であるのは、疑いようがない。
男は、右手に黒く光る拳銃を手にしていた。
「さて、これで心置きなくしゃべれるだろ。好きに話すとしよう」
男の顔に、嫌らしい笑みが浮かぶ。下品な感じだった。

「あんた、軍の人間か」
カリクが口を開いた。まず、確認する。
「そうでないとしたら、何に見える？」
相手は、わざとらしくそう答えた。まどろっこしい言い方だが、軍人で間違っていないらしい。
「それにしても、もうずいぶん前に捨てた施設に、まさか侵入者がいるとは思わなかった。お前ら、何をしに来たんだ？」
「さあてね。なんでだと思う？」
レインがうそぶいた。しかし、敵の男は特に怒る様子もなく、
「想像もつかないな。情報が足りない」
冷静な返しをした。肩透かしをくらった気分なのだろう、レインは眉をわずかに潜めた。
「それに、分からないなら分からないでもいい。お前たちの目的がなんだろうと、やることは変わらないからな」
彼の反応を気にとめず、男は手にある銃を、二人に示してきた。
「ここで、死んでもらう」
抑揚なく、言い放つ。殺すということへのためらいが、欠片も見られなかった。カリクとレインが、声を揃える。
「「断る！」」
カリクもためらいなく、まず銃を持つ敵の手を狙って発砲した。狙いを瞬時に察せられ、寸前の間で避けられる。
「ちっ」
軽い舌打ちをしながら、カリクは敵から目を離さずに、左へ走った。男との間に挟めそうなものは、何もない。ゆえに、身を隠せるものがあるかもしれない、男が来た方向に抜けたかった。入り口に戻ろうとしたところで、狭い階段では狙い撃ちされるのが関の山なのである。
「ビックリしたな。まさか、ガキが銃を持ってるとは」
「最近の子供は進んでんだよ」
カリクが適当な言葉を返す。

「そういうこった！」
それにレインも乗っかった。同時に、ナイフを飛ばす。男は、ナイフを軽いステップでかわす。ひそかにつぶやいた。
「二対一、か」
カリクは相手の銃口から目を離さないように、男から距離をとる。
（押し切れる。相手の方が地力は上だが、俺とレインの力を合わせれば、勝てないことはない）
考えを巡らせていると、声が挟まった。
「二人で押せば勝てる。そう思っているだろう」
図星の指摘だった。しかし、なんとか動揺は押さえ込む。男の表情をうかがった。
「甘いな。もしそうなら、二人いっぺんに相手したりしない」
気味の悪い微笑があった。思わず、背筋が凍ってしまうほどの。
そして、トンと、この場にいる三人のものではない足音が、静かに、しかし確かに響いた。方向は、男の背中に見える廊下のような方からだった。
「複数かよ……」
意味しているのは、別の人間の存在。カリクの計算を、たやすく崩してしまう要素だった。
「おいおい、これはヤバげだぜ、カリク君。どうする？」
ナイフを構えるレインも、当然その足音に気づいている。口調の軽さとは裏腹に、うまく笑えていなかった。
「……決まってる」
問われたカリクは、敵の方へ見つつ答える。そんなに難しいことではない。本来の目的を考えれば、一択だった。
（こんなとこで終われるわけがないだろ）
選択肢は、逃走しかなかった。ただ、大きな問題として、入り口へ戻る場合、完全に背をとられてしまうことがある。そうなれば、まず間違いなく簡単に命を落とすことになってしまう。
（どうする……）

必死に頭を活動させる。
（どうする！？）
自分たちがいるのは、開けた空間。遮蔽物になりそうなものはない。入り口に通じる階段と、先の見えない廊下がある。上には、光を発している物体が五つほどぶら下がっていた。その刹那、答えが閃く。
「レイン、援護しろ！」
「何を！？」
叫び返されたことを無視し、カリクは銃を構えた。敵にではない。
「何を……？」
狙いが分からないようで、敵の男は顔をしかめた。こちらも意に介さず、弾を放った。直後に、ガラスの弾けたような音が響き渡った。
「な……」
「なーるー！」
男とレインが、それぞれ反応する。カリクが撃ったのは、五つある電球のうちの一つだった。光源をなくすつもりなのだ。
「させるか」
心外だと言わんばかりに、男は言葉を漏らした。カリクに銃口が向く。
しかし、
「させるかをさせるか！」
陽気な声とともに飛んだナイフによって、狙いはズレた。その間に、カリクは二つ、三つと光源を破壊していく。
「無駄なあがきを……」
「無駄かどうかは、やってから判断してくだされー！」
レインの攻撃が続く。そして、ついにすべての電気が消え去った。
再び、暗闇がすべてを包む。
「レイン！　俺を引っ張れ！」
「ほいきた！」

その中で、声だけのやりとりを交わした。敵の声が被さるように響く。

「逃げられると思うな！」

おそらく、攻撃しようとしたのだろう。かすかな音が耳に入った。しかし、いつまで経っても、銃声はない。

「逃げてみせるっての！」

レインが、攻撃を途絶えさせていないからだった。目視はできていないが、彼はナイフを投げていると、手を引かれるカリクには、音となんとなく伝わる動きから想像がついた。そのまま、入り口へと通じる階段を上がり出す。威嚇で、カリクは一発撃った。

「さあて、こっからどうするんだカリク君？　後ろから撃たれたら終わりだぜ」

先を行くレインから問われた。こともなげに答える。

「問題ない。上がりきるまで、下に弾を打ち続けてやれば、向こうは階段を上がってこれないはずだ」

同時進行で、引き金を何度も引く。床に着弾した音が何度もする代わりに、敵からの攻撃はこなかった。

しばらくして、一番上に薄い光が見えてきた。太陽やガス灯を光源としていない、夜という灯りである。

「あと少しだぜ、カリク君！」

レインが叫んだ。耳には入れているものの、特に返事はせず、下方へ撃ち込み続ける。数秒して、ついに一番上へとたどり着いた。

「車まで走るぞ。まず、この場から離れる」

「承知！」

カリクとレインは、一目散に車へと走り出した。キッチン、食堂と通り過ぎ、廊下へ出る。足を止めずに、さらに駆けていく。玄関にたどり着いた二人は、外に出ると、すぐさま車に乗り込んだ。

「カリク、あいつは来てるか？」

運転席に滑り込んだレインに問われ、カリクは助手席へつく前に廃屋の入り口を見た。

「いや、まだ来てない。とにかく、さっさと行くぞ」
誰の姿も見えなかった。席に腰を下ろし、レインを促す。
「あいあいさー！」
それを受け、彼は元気よく返事をするとエンジンをかけた。アクセルを踏み込む。カリクは万一にそなえ、後部座席から廃屋の入り口方向へ銃を構えた。徐々に離れ出す。
しかし結局、再び男を見たりはしなかった。
「巻いたか……」
肩から力を抜く。一旦は脅威から逃げ切ったと考えてよさそうだった。後部座席から、助手席へと戻り落ち着く。
「いやー、危なかった、危なかった。さすかにびびったぜ」
ハンドルを握るレインが、ほっとした表情を浮かべた。カリクは、厳しい目線を向ける。
「お前、何者だ？　本当ならどうでもいいところだが、サリアが攫われた理由と関係があるなら、話が変わるぞ」
珍しく、レインは黙り込んだ。口元は笑ったままでいるのだが、明らかに様子がこれまでと違う。
「答えろ、レイン。お前は何者だ？」
さらに追及すると、彼は一度息を吐いてから、
「何者ってわけでもない。ただの、被実験対象者だったってだけだよ」
嫌々といった感じに、口を開いた。

二人の少年が去った、謎の地下施設。男はまだそこにいた。
「逃げられたな。たいした奴らだ。ガキだが、元気な分、対応しづらいもんだ」
男は一人でつぶやいていた。暗闇に、声が吸い込まれていく。
「しかしまあ、こんなところまで来てることを考えると、そのうち

に会う機会があるかもしれないな」
一旦言葉を区切り、この場所を出るために男は“それ”へ呼びかける。
「行こうか、父さん」
闇の中で、何かが蠢いていた。

六章『施設』

「実験？」
夜を走る車中、カリクはレインの発言に眉を寄せた。
「そうだよ。あの施設は、首都に本部がある、“ジーニアス”ってところだ。聞いたことないだろ」
「ないな。そのジーニアスとやらは、なんの研究をしてるんだ」
“オモイノチカラ”」
「はっ？」
彼から放たれた単語は、意外なものだった。
「カリク君の彼女が持ってるっていうやつさ。それの研究をしてるんだ」
いつもの朗らかさはまったく見えない。いつの間にか、笑みも消えていた。
「研究って……。何をどうするっていうんだ？　あんな力を持つ人間なんて、一握りもいないだろ」
「ああ、数はまったくいない。ただ、“力”の持ち主はいる。カリク君の彼女とは、かなり性質が違うものっぽいけど」
カリクの指摘に理解を示しつつ、力の持ち主がいることを言及してくる。誰のことなのか、察しがつかなかった。
「“力”の持ち主って、誰のことだ」
知っている人間かどうかはともかくとして、まず尋ねる。そして、彼の挙げてきた名前は、
「“軍王”、ミッドハイムさ」
「ミッドハイム！？」
あまりにも有名で、にわかには信じられないものだった。
「奴が、“オモイノチカラ”を持ってるっていうのか？　そんな馬鹿な。だったら、どうしてサリアを攫ったんだ。もう“力”はあるはずだろ」

「詳しい事情は、俺っちにも分からない。ただ、ジーニアスを設立したのはミッドハイムだし、秘密裏に諸々の調査を行わさせてるって話もある。なんかの事情で、“オモイノチカラ”にご執心なのは間違いないと思うぜ」

話しつつ、レインが車の速度を落とす。一応の脅威からは逃れたという判断らしい。

「理由は分からないが、とにかく“力”を求めてるってことか。奴自身の“力”はどんなものなんだ。サリアとは、違うんだろ」

「ああ。人の心に声を届けるわけじゃない。ちらっと聞いた話じゃ、こっちの考えを読み取ってくるらしいぜ」

「考えを読み取る？」

サリアという普通ではない例を何年も目の当たりにしてきたのにも関わらず、カリクの口からは訝しむような声が出た。

「そうらしい。あくまで、研究者たちとか、たまにくる軍人たちの立ち話を盗み聞きしてただけだから、正確さはないけど、話しぶりはマジっぽかったぜ」

「マジっぽかった、か」

理解はしたし、おおいにありえることであるのは分かっているのだが、素直には受け入れられなかった。ただ、仮にミッドハイムが本当に“オモイノチカラ”を持つのなら、力の存在を知っていた理由は簡単になる。自身が宿していたからだ。

「それで、お前はどんな実験に利用されたんだ？」

「あー、なんかよく分かんない実験さ。“後天的にオモイノチカラは発現できるか”とかいうやつだった」「力の発現か。ずいぶんとまた、ありがちなこった」

カリクは肩をすくめた。続けて問いかける。

「実験の内容は？」

「やったこと自体は簡単なもんさ。軍王の血を、注射したんだよ。要するに、血を被験者の体内に入れたわけ」

レインの口振りだと、たいしておかしくないことかのようだった

が、とんでもないことだった。
「そりゃまた、お手軽でイカレた実験だな。それで、お前に“力”はついたのか？」
行為の愚かさに、カリクは訝しげにまぶたを半分ほど閉じる。レインは、ニヤリとした。
「ああ。ついたぜ。いろんな人の心の声が聞こえるようになった」
「嘘つけ」
「あははは。まあ、分かるよな。カリク君の思ってるとおり、複数いた被験者の誰にも、力は発現しなかったよ」
カリクがツッコむと、あっさり本当のことを口にした。ふんと、鼻を鳴らす。
「だろうな。そんなお手軽に、“力”が手に入ったら、今頃そこらにゴロゴロしてるだろうよ」
それから、考えがサリアのことに及んだ。
「待てよ。じゃあ、サリアもその研究とやらに利用されるのか？」
「さあね。俺っちも、そこまでは分からない。一ヶ月前には、施設をもう逃げ出してたし。まあ、何かしらへ利用しようとしてるんだろうけど」
レインの言葉に、カリクは押し黙った。イカレた人間たちによる実験に巻き込まれるかもしれないというのは、不安要素としては大きすぎる。サリアが貴重な人材であることから、無理な扱われ方はしないだろうという予測があっても、拭い切れない。
「そういえば、あの施設はどうする？　資料とかは、もうどうせ回収されてるだろうけど、俺っちの話よりも詳しく、あの施設がどんなものかくらいは見られると思うぜ。明日になっても、まだあの軍人がいるかもだけど」
カリクがしゃべらなかったからか、レインから話を振ってきた。しかし、カリクは首を左右へ動かす。
「少しくらい、何か掴めればと思ってたが、時間が惜しい。このまま行って、どこかで休んでから、首都に向かおう。ただ、首都への

道に乗っかるのは、明日の朝になってからだ。あの男も車で移動してて、俺たちが休んでるところを襲われたらどうしようもない」
「あー、それもそうだな。じゃあ、町から出る位置を、首都方面とは別のところにするか」
カリクの提案に従い、レインは車の向かう先を変えた。
しばらく走り、二人は町の外へ出た。ただし、首都とは別方面である。
「ここらでいいかな？」
「たぶんな。でも、交代で見張りをつけるくらい、やり過ぎな警戒をしてもいいかもしれない」
誰が映るでもないバックミラーを覗き込みながら、カリクはレインへの回答と提案をした。敵が未知数であるため、油断ができない。
「そうかー？　さすがに気にしすぎじゃねーか？　後から足音が聞こえたのが研究者なら話は別だけど、あれも軍人なら、たぶん他の任務中だから、そっちを優先すると思うぜ」
「確かにな。お前の言うとおりだ。だが、奴らを“普通”の枠に入れて、予測を立てるのは、個人的な見解としていい気がしない」
気にしすぎではというのは、カリク本人も思っている。しかし、一番大事なのがサリアを助ける前に死なないことである以上、考え過ぎな行動を選ぶのが安全策だった。
「ふーん。別にいいけどさ。でも、あんまり気を張りすぎると、いざってときに疲れが出ちまうぜ。少しは、肩の力を抜いてみたらどうだ？」
「抜けたらな。とりあえず、今日はもう休む。先にお前から寝ろ」
レインの話を受け流し、休息を促す。
「あれ、俺っちからでいいのか？」
「運転手が疲労で事故なんて、ごめんだからな。しっかり休んどけ。こっちが困る。それに俺はハンドルを握らないんだ。最悪、お前が運転してるときに休む」
「ああ、そっか。でも、途中で交代はするんだろ？」

「そのつもりだ。さすがに、夜通しは厳しい」
レインの問いを肯定し、カリクは銃を取り出した。
「……何すんの？」
「点検するたけだ。お前を撃とうってわけじゃないから、安心して寝てろ。明日も、また運転してもらわないといけないんだからな」
「へいへい」
休息するよう口を酸っぱくすると、レインは微笑した。座席を倒し、目を閉じる。
「じゃあ、お言葉に甘えて、先に休ませてもらいますぜ。おやすみ」
「ああ、おやすみ」
賑やかなレインの声が消え、カリクは静寂に包まれた。辺りの闇をときたま見ながら、銃の簡単なチェックを進めていく。
（本当は、解体してメンテナンスもしたいけど、さすがに敵を警戒してるときにそれはないか）
一人、頭を回す。知らず知らず、思考はサリアのことに移っていった。
（今頃、何してるんだろ。おかしなことをされていないといいんだが）
途端に、気持ちが焦り出す。早く助けないとという感情が沸き上がってきた。ただ、頭は冷静なため、なんとか焦りを打ち消して落ち着こうと、自分と戦いだす。
（ダメだ。ここから首都までは、まだ距離がある。すぐさま助けには行けない。落ち着け）
深呼吸し、なんとか気持ちを抑えて現実に自分を戻す。
（だいたい、なんで奴らはサリアを攫ったんだ。本当に研究のためだけなのか）
そのうちに、根本的な疑問へ考えが及んだ。なぜ、今なのかも気にかかった。
（ミッドハイムが軍王になってから、五年は経ってる。タイミング的な問題なのか、それとも何か別の理由が……？）

しばらく考え込んだが、答えは出そうになかった。また、サリアの身を案じ始める。

「サリア……」

思わず、少女の名を零した。心の内が、また荒れ出す。

「ずいぶんと寂しそうだな、カリク君」

すると、右側から少年の声が挟まってきた。当然ながら、レインである。寝る体勢になってから、さほど時間は経っていないため、起きていてもなんら不思議はない。油断していた自分に、カリクは軽く舌打ちした。

「ずいぶん、可愛いとこがあるじゃないの」

「うるせぇ。悪かったな、女々しくて」

「誰も女々しいなんて言ってないだろ。いいじゃんか。そういう風に、心から心配できる人間がいて」

からかい口調のレインだが、それでいてどこか真剣さを感じさせるものがあった。疑念をそのまま言葉にする。

「お前にはいないのか。そういう人間は」

「……俺っちには、いない。孤児だからな。物心ついた時には、もう施設の中だったし」

常は軽薄な態度の少年だが、今は少し寂しげだった。何かを隠しているように感じる。

「そうかよ」

しかし、踏み込んで尋ねようとは思わなかった。一言で、話題を切る。

「なあ、そのサリアちゃんて、どんな子なんだ？　ちゃんと聞いたことがなかったから、気になるぜ」

話自体は終わらず、レインが別のことを挙げる。カリクは、軽くため息をついた。

「俺、寝ろって言ってるよな」

「分かってるけど、気になって眠れないんだよ。カリク君がサリアちゃんがどんな子か教えてくれたら、すっきり眠れると思うぜ」

声に棘を含ませたが、利き目はなく、額を押さえた。
「なー、いいだろー」
まったく嬉しくない猫なで声を聞き、銃を構えるかどうか迷ったものの、今はメンテナンス中であることを思い出し、その選択肢は捨てた。仕方なく、折れる。
「……分かったよ。でも、聞いたらすぐに寝ろよ」
「了解、了解！」
レインは清々しさすら感じる笑みを浮かべた。どうにも子供っぽい。
「はぁ……。なんでお前にこんなことを話さないといけないんだか」
「まあまあ、いいじゃんいいじゃん。焼きが回ったってことで」
「それは、お前が言うセリフじゃないだろ」
もう一度額に手を当てて、ため息をついてから、ぽつりぽつりとカリクは話し始めた。
「あいつとは、サリアとは物心着く前からずっと一緒だった。正確には生まれたときからじゃないらしいが、ほぼ同じようなものだろう」
「幼なじみってわけか」
「そういうことだな」
「でも、ただの幼なじみじゃないんだよな、もちろん」
意地悪い笑みとともに、レインが目を輝かせる。
「好きに言ってろ。わざわざ俺から話すようなことじゃない」
カリクは突っぱねるような態度をとったが、答えをはぐらかせてはいない。むしろ、明確に示してしまっているとも言えた。
「ふーん。そっかそっか。じゃあ勝手に解釈させてもらうぜ、カリク君」
「ふん」
調子づくレインに対してできたのは、鼻を鳴らすくらいだった。
「で、その幼なじみってどんな子なんだ？」
「そうだな……。ひたすらに穏やかで、優しい。素直だし、純粋で

もある。俺と真逆だな。空気が柔らかいんだ、あいつは」
何もかもを包んでしまえそうな雰囲気を醸し出す少女の姿が、頭に浮かんだ。そして、彼女の特徴はもっと深くにある。
「けど、それだけじゃない。サリアは、どれだけ邪険に扱われても、誰かを悪く言ったりしなかった。絶対に恨み言を持っていたはずなのに、俺にも言わなかった。誰も恨まないって、決めてるから。あいつは、強かった。きっと、今でも強い。俺なんかより、ずっとな」
それは、“強さ”だった。特別、何かの訓練を受けたわけではない。生まれつきの能力はあるが、それとはまったく関係のない意志の強さ。
「なるほどなあ～。カリク君がどれだけその子を大切に思ってるか、よく分かるぜ」
聞き手である少年は、どこに納得がいったのか、首を縦に何度か下ろした。
「何を基準に言ってるんだ、お前は」
理由を問いただしてみると、彼はいっそう楽しそうに声を弾ませた。
「おっ、やっぱり無自覚か。簡単なことだよ。カリク君、俺っちの“どんな子か”って質問に、性格的なことしか答えてないじゃん」
納得せざるをえないその理由に、カリクは返す言葉を見失った。
「俺っちは、外見のことも含めて訊いたのに、そっちはさっぱりだぜ。長いこと一緒にいると、そうなるもんなのか？」
続けての問いかけにも、明確な答えは出せそうになかった。なんとか、
「知らねえよ。比べる対象もないし」
そんな言葉を口にした。
「ずっとサリアちゃん一筋ってか。言ってくれるね」
レインが大袈裟に両手を開く。カリクは片手を顔に当て、息を吐いた。
「……やっぱり、お前には話さなけりゃよかった」

「後悔先に立たずだぜ」
「お前が言うな」
レインのおでこを軽く叩くと、いい音がした。「あいたっ」と声を上げ、少し頬を膨らませながら、さすり出す。
「もういいだろ。話は終わりだ。早く寝ろ」
「へいへい」
不満げに口を尖らせていたが、外見のことをしつこく尋ねてきたりはせず、彼はまた寝る体勢になった。
「ったく」
ようやく解放され、カリクは肩の力を抜いた。銃の調整を再開する。
黙々と作業を進めていき、数分後には終わった。ホルスターへ武器を戻し、一息つく。隣では、早くもレインが寝息を立てていた。振る舞いは元気だったものの、やはり疲れていたらしい。
「当たり前か」
長時間の運転に、廃屋でのやりとりである。疲弊しない方がおかしかった。
(俺も、なんだかんだ疲れてるしな)
ずっと気を張ったままである自分の疲れを認識する。確かに、レインに言われたとおり、このままではいざというときに動けないかもしれない。
(まあ、いいか。首都までの道はゆっくりさせてもらうさ)
そしてカリクは、朝まで見張りをすべく、車を降り、すぐ横でイメージトレーニングを始めた。座っていたら、眠ってしまうと思ったのである。

「レイン、起きろ」
翌朝、早い時間にカリクはレインを起こしにかかった。「んあー」

などとうなりながらも、ゆっくりとまぶたが開いていく。
「なんだ、交代かー？」
目をこすりながら、彼は身体を起こした。かなりぼんやりとしていたが、
「って、もう朝じゃん！？　どういうこと！？　起こしても起きなかったの、俺っち！？」
朝日の光が既に降り注いでいる光景を窓の外にみとめ、急速にギアが入った。黒目が大きく見開かれる。
「起こさなかっただけだ。それより、燃料を補給するのを忘れていた。この町に補給場所があるかどうかは分からないが、早朝のうちに探しに行くぞ」
そちらはどうでもいいと言わんばかりにさらりと彼の問いに答えると、カリクは話題を変えた。
「お、おう。それは分かったけど、お前寝なくて平気なのか」
「お前が運転してる隣で眠らせてもらうさ。早く行くぞ」
レインの発言はほとんど話半分くらいにしか聞かず、さっさと返す。
「そうか？　ならいいけどさ」
押し切られる形で、寝起きですぐに覚醒させられた彼は、エンジンをかけた。車が振動を始める。
「ていうか、供給場所があるとして、どこにあるんだ。どこ目指して走らせればいいの、俺っち？」
「中心よりは外周だな。ちょっとした補給なら、そこに建てた方が効率的だ。町の出入り口を徹底的に当たるべきだろうよ。万一なくても、次の町まで持つか？」
「ん、それは大丈夫だと思うぜ。この町、狭いし」
ハンドルを握るレインは軽く返し、アクセルを踏んだ。
「じゃ、いっちょ探しに行きますか」
二人を乗せた車が、また走り出す。

「いやー。そこまで厄介なことにならなくてよかったな、カリク」
「そこは同意してやる。下手な抵抗もされなかったから助かった」
「だな。金払ったし」
「通報はされるかもしれないけどな」
カリクとレインが乗る車は、燃料を満タンにして、再び首都へと向かう道を進み出していた。
補給場所には一人が駐在していたのだが、カリクが銃を突きつけ、その間にレインが燃料を拝借した。脅しをかけているのに、代金は払っていったのだから、ずいぶんと奇っ怪に思われただろう。
「こっから首都まで、あとどれくらいだ？」
「あと一日かかるか、かからないか、かな。順調に行けば、明日の昼には絶対着くぜ」
不思議な事件を起こして町を出たところで、カリクは首都までの時間を確認する。レインはこともなげに答えた。
「それも、施設にいたから分かるのか？」
ちょっとした疑問をぶつけた。
「ん、まあね。実験が主だったけど、軍人としての教育もしてたから、あそこは。武術も学問も、けっこう叩き込まれたぜ」
「養成学校みたいなもんか」
「いや、もっとキツいとこだな。本当なら違法な訓練もたくさんあったし。卒業したら、裏部隊ルートが大半だし」
どうやら、俗に言う暗部の人員を育てる場所ならしい。
「裏部隊、か。じゃあ、サリアを攫った連中もその類いの奴らなのか？」
大事な少女を連れ去った二人組を思い出す。
「かもな。でも、微妙なとこだと思うぜ。本当にそいつらが暗部連中なら、カリク君を殺してるだろうし、なによりカリク君から聞いたような時間には行動しないと思うぜ」

内部をいくらか知っているレインの言葉には説得力があった。加えて、カリク自身も、キュールで会った男女二人が暗部系の人間という考えにしっくりきていなかった。

「ただ、昨日会った奴は、間違いなく施設上がりの奴だ。醸し出す空気で分かる」

「あいつか。結局、奴に関しては何も分からなかったな」

昨日に接触した軍人のことへ、話題が移る。こちらは、何も知らないカリクすら、暗部の人間としか思えなかった。纏っていた雰囲気が、あまりに危険だったのである。

「まあ、個人の情報はさっぱりだけど、用事自体は情報を消しに来たってところだろうさ。秘密の施設の後処理なんて、いかにも裏の仕事だろ」

レインがもっともらしい意見を上げたが、カリクは首をひねった。それを見て、レインが尋ねてくる。

「何か、おかしいか？」

「いや、お前の意見は可能性として充分にあり得るんだが、あの建物は放棄されて久しそうな様子だっただろ。今更、残ってる資料なんてあったのか」

「あー、そっか。でも、全部を回収、処分できなかっただけで、残してあった資料に用があったとか、そんなんだったのかもしれないぜ」

どちらの考えも、ありえそうだった。確定するには情報不足で、これ以上突き詰めるのは無理だと判断し、「分からないな」とカリクは首を振る。

「なんにせよ、あの施設が“オモイノチカラ”の研究をしていたなら、あの軍人も力に関わっているのかもしれない。また会うことになるかもな」

「そりゃ、ごめんこうむりたいねー」

続けて口にしたことに、レインはあからさまに顔をしかめた。いつでも軽い態度の彼ですら、冗談抜きで昨日の男とは関わりたくな

いらしい。
「同意見だ」
カリクも、できれば二度と遭遇したくない相手だった。具体的な理由云々というよりは、直感的に危険を感じたからである。
「にしても、“オモイノチカラ”ってのは、なんなのかね。特に害がある力ってわけでもなさそうだし。研究して、どうするつもりなんだか」
この疑問に、カリクは口を開かなかった。一番根本的なものであるのに、最も解答が見えないのだ。予測すらままならない。
（そうだ。どうしてサリアを誘拐したのかの前に、“力”の研究をしてどうするのかが問題なんだ。稀有なものなのは確かでも、軍のトップへ何か恩恵をもたらすとは思えない）
首都に、施設に行けば、分かるのだろうか。カリクは、眼前に伸びる道を睨んだ。首都はまだ見えるわけもなく、道と原っぱの中を進むばかりだった。
それでも、二人を乗せた車は、着々と目的の場所へと近づいていた。

七章『それぞれの想い』

多くの軍人が、平時に勤務する本部基地。その中に、陸軍第二部隊という表記のプレートが提げられた場所があった。辺りには、他部隊の表記も見受けられる。各部隊に与えられているデスクスペースだった。一人に一台、デスクは振り当てられている。そして、

「ったく。軍人っていうのは、もっと現場重視の仕事場だと思ってたぜ」

自分のところで、溜めた書類と戦っているガヌ＝ロードの姿があった。紙の山は、デスクの一角を完全に占拠している。サリアの誘拐は特別任務であり、裏部隊の所属ではないのだ。

「溜めるお前が悪いのだろう。その場その場で処理していれば、そんな量にはならん」

文句を口にすると、背後から反応があった。振り向くことなく、言葉を返す。

「うっせー。俺はお前ほど、要領よくも真面目でもないんだよ」

「貴様のその言い訳は聞き飽きた。別の言い回しでも考えたらどうだ」

「あー、また今度な。それより、これ手伝ってくれませんか、シルラ様。なんか奢るから」

身体を捻って、会話相手を見る。その相手は、金髪のポニーテールの女性軍人、シルラ＝マルノルフである。彼女はガヌと別の部隊だが、デスクの位置は謀ったかのように、すぐ後ろだった。

「お前の仕事だろう。お前でなんとかしろ。それに、私もこれから“仕事”だ」

彼女は、壁にかけてある時計に目をやった。示している時間は、午後六時半。ガヌは、それだけで何かを察する。

「ああ、そうか。そっちがあるのか」

口には出さなかったが、サリアの見張りのことである。

「仕方ないな。じゃあ、明日はどうだ？」
「自分でやれ！」
頼る気をなくさずに、提案してみたものの一喝された。そのまま彼女は背を向け、歩き出す。
「つれないねー」
ガヌは一人で肩をすくめた。姿勢を直し、再び書類の山と対峙する。
「頑張ってやりますか」
と、やる気を出そうとしたところで、
「ガヌ中尉」
低く重たい男の声が降ってきた。ため息をついてから、顔を左上に向ける。
「なんの用だ。わざわざ、“普通”の部署まで顔出すなんて」
「いえ、少し報告したいことがありましてね」
がっちりとした体躯で、岩を思わせるような男が、濃い顔に合わない微笑を浮かべる。階級は准尉だが、彼の属する裏の部隊では、位などあってないようなものだった。
名前は、ノーザン＝ジャッジといった。
「で、報告ってなんだ。さっき見たとおり、俺は忙しいんだが」
「そのようですね。まあ、僕もああいうちまっこいものは嫌いですが、あそこまで溜まったことはないので、どの程度かは想像の域を出ませんが」
ノーザンは遠回しに皮肉を言ってきた。多少かんに障ったものの、時間が惜しいので流す。
「分かってるなら、さっさと済ましてくれ」
「了解しました」
屈強な男は、意地の悪そうな笑みを浮かべた。理由もなく、悪寒

を覚える。早く、この場から立ち去ってしまいたかった。
「では、ご注文のとおり手短に済ませましょう。単刀直入に言いますと、レインに遭遇しました」
しかし、会話に出てきた名前を耳にして、その気は失せた。一度、目を大きく開いてから、軽く首を振って問う。
「どこでだ」
「シャズの町です。そこでの任務中に出くわしました」
「シャズだと？」
ガヌは、顔をしかめた。シャズの町は、特に何もない小さな町のはずだ。とても裏部隊の人間が、任務で赴く場所に思えなかった。あってせいぜい、殺さなければならない人間が隠れ住んでいるとか、そのくらいである。
「ええ。あなただからお話しますが、あそこには“ジーニアス”の施設があったんです。今はもう稼働していませんが、そこの資料処分を任されたので、足を運んだんです。そうしたら、彼と遭遇しました」
本来なら秘匿すべき情報を、ノーザンはためらいなく話す。理由は察しがついた。
（俺の反応を見たいんだろうな）
短い付き合いではあったが、目の前の男は自分の楽しみを優先させるタチであるのを、ガヌは把握していた。その上で、また尋ねる。
「それで、レインをどうしたんだ」
声には敵意がこもっていた。向こうが面白がるだろうとは思ったが、隠すことができなかったのである。
「どうもしてませんよ。殺そうとしましたが、取り逃がしてしまいましたからね」
逃がしたという単語に、ガヌは一旦肩の力を抜いた。同時に疑問も抱く。
「取り逃がした、か。いくらジーニアスにいたとはいえ、お前が高校生そこらの歳の奴を逃すとは思えないんだが」

「ええ、まあ。自分で言うのも変ですが、レイン一人なら、始末できていたと思います」
「一人なら？　誰か他にいたのか」
心当たりがなかった。
「ええ。同い歳くらいの少年が一緒でした。何者か分かりませんでしたが、僕に対して冷静な態度だった上に、銃を所持していて腕もよかったですから、ただ者ではないかと」
「銃の腕がいい、か」
「誰か心当たりでも？」
「いや、ないな」
ノーザンの話を聞き、ガヌの脳裏にはキュールで出会った少年が浮かんだ。しかし、レインと一緒に行動するような経緯が想像できず、その考えを打ち消す。
「とにかく、その少年とレインの二人を取り逃がしました。ですが、おそらくあの二人は“ジーニアス”に何かしらのアクションを起こそうとしている。遠からず、首都にも来ると思いますよ」
「“ジーニアス”にねぇ。一度逃げてきた奴が、そうのこのこ戻って来るもんか？」
抱いた疑問を口にする。ノーザンはせせら笑った。
「戻って来ますとも。現に奴は、元とはいえ“ジーニアス”の施設に来た。それも、何かの目的を持っているのだろう少年と。大きな流れに、人は抗えやしない。もう、すべてが流れ出しているんですよ、ガヌ中尉」
意味深だった。意図は読めないが、気味の悪さだけは十二分に伝わる。
「それに、あなたの場合は首都に“来てほしくない”んでしょう？」
続けてされた指摘に、ガヌは息をのんだ。何も言うまでもなく、その反応が答えになってしまっていた。
「では、僕は失礼します。面白い反応も見れましたしね。それでは」

満足そうな様子で、ノーザンは歩き去っていった。一人、ガヌは取り残される。
「レイン、戻って来ないでくれよ……」
独り言は、廊下へ吸い込まれていった。

同刻、地下にシルラの姿はあった。サリアの捕らえられている部屋の前にたどり着き、外の見張りをしている男の部下へ声をかける。
「お疲れ様」
「ああ、シルラ中尉。お疲れ様です」
「あの子の様子は？」
「さあ……。自分は、中の様子を見ていないので、なんとも」
「分かった」
うなずき、部屋への扉を叩く。
「私だ。シルラだ」
しばらくして、中から女性の部下の顔が覗いた。
「お疲れ様です、シルラ中尉」
「お疲れ様。交代の時間だ。帰るといい」
「はい。ありがとうございます」
彼女は礼儀正しく頭を下げると、
「それでは、お先に失礼します」
地下室から離れていった。入れ替わりに、シルラは部屋へ入る。
「サリア」
後ろ手で扉を閉めると、中にいる少女へ声をかけた。ベッドの上で、横になっている。返事がない。眠っているようだった。音を立てないように、忍び足でそばへ行く。可愛らしい寝息を立てていた。思わず、頬を緩める。
「カリク……」
しかし、次に彼女が発した寝言に、シルラは固まった。目の前の

少女は、それほどなんともないように見えていたが、不安を抱えていて当然なのだ。

（私は……）

軍人は、上の命令を聞かなければならない。士官学校では、そう教わった。シルラは絶対に守ろうというほど正しさを信じていたわけではないが、今は守ることが正しいとは考えられなかった。

（私は、どうすれば）

表立って動く気はなかったのに、心は揺れ出していた。

任務を受けたのは、一ヶ月ほど前だった。仕事中に、いきなり呼び出されたのである。初めて軍王の座する執務室へ行くことになり、扉を叩くことにも酷く緊張した。

「シルラ＝マルノルフ中尉です」

「どうぞ、入りなさい」

「失礼します！」

返事が上擦ったのだが、恥ずかしがる余裕すら持てず、とにかく中へ入った。するとそこには、

「あれ、シルラも、ですか」

ガヌの姿があったのである。

「な、なぜ貴様もここに」

「呼び出されたからに決まってるだろ」

驚いていると、肩をすくめられた。彼の言い方にむっとすると同時に、安心感も覚えていた。

「ええ。私が呼んだのです」

軍王、クラカル＝エル＝ミッドハイムの声が挟まった。シルラは慌てて彼の机の前へいき、ガヌの隣に並んだ。

「あなた方は、我が軍の中でも、特に優秀な若手と聞いています。そこで私は、今回あなた方に特別な任務を言い渡そうと思ったので

す」
「特別な任務、ですか」
ガヌは気のない反応だった。彼は、どんなときでも彼だったのである。
「ええ、そうです。なので、あまり乗り気ではないにしてもやっていただきますよ」
ミッドハイムがにこやか微笑んだ。すると、ガヌはわずかに眉をひそめた。シルラも、目の前にいる軍のトップに、恐怖感を抱いた。
「あなた方に頼むのは、ある少女の誘拐と、監視です。それ以外は、何もありません。簡単な仕事でしょう」
「誘拐……」
汚い仕事が多く存在している中で、なおかつ軍王からの直々の依頼だとそういう系統の仕事の可能性が高いと知っていたものの、それでもシルラは、提示された任務の内容を疑った。犯罪が任務というのは、納得がいかなかったのである。
「ええ、そうです。そこにいる、ノーザン・ジャッジ准尉とあたってもらいます」
「えっ？」
軍王から見て、二人の右奥に彼の目線がいったところで、シルラは間抜けな声を出してしまった。振り返ると、それまで気づかなかった、がたいのいい男が壁に体重を預けて立っていた。言われるまで、まったく気づかなかった。
「彼はあなた方の噂にある、裏の部隊の者ですが、今回の任務を共に行ってもらうことになります。ただ、メインはあなた方にお任せするので、そのつもりで。まあ、仲良くするといいでしょう」
ミッドハイムが説明する間に、ノーザンは二人の方へと近づいてきた。ゆっくりと重々しく口を開く。
「ノーザン＝ジャッジ准尉です。よろしくお願いします」
気味悪い微笑と共に、ノーザンは自己紹介してきた。どうにも、仲良くはできそうになかった。

「ああ、よろしく」
それでも、あいさつはなんてことのないように返した。隣のガヌは、
「んー、そこまで仲良くはしたくねーな」
と、正直な感想を口にしたが。
「どうやら、彼に対してお二人共あまり友好的ではないようですね。まあ、仕事はしっかりこなしてください」
やりとりを黙って見ていたミッドハイムが口を出し、会話をまとめた。これはまだ、観察だけで分かる範囲ではあるが、シルラは内心を見透かされているような気がしていた。頭に浮かんだのは、ミッドハイムに関するとある噂。
「ミッドハイム総督。なんか、俺らの考えてること、見透かしてません？　なんでも噂じゃ、人の考えてることが読み取れるとか聞きますが、それが本当だったりするんじゃないですか」
それをガヌは、ためらうことなく真正面からぶつけた。ミッドハイム軍王は人の心を読める、という話がかなり前から存在していたのである。
「ええ、本当のことですよ。私は、他人の心を読むことができます。心理学などの類いではなく、もっと直接的に」
問われた彼は、隠す様子もなくあっさりと認めた。あまりに軽すぎて、シルラは信じられなかった。ガヌも同じ考えだったようで、
「にわかには信じがたいですね。手品の範疇とかなんじゃないんですか」
訝しげな表情を、軍王へ向けた。
「そう簡単に信じなくとも、別にかまいませんよ。そこは大事じゃありませんから。とにもかくにも、あなた方はこれから話す任務をこなしてくだされば、それで充分ですからね」
彼は回答をはぐらかし、任務についての話を始めた。誘拐の対象が、特別な力を持った少女だと聞かされたところで、シルラは問いを挟んだ。

「その子を攫うことに、どんな意味があるのですか」
「我が軍のため、とだけ言っておきましょう。彼女の力が、我々の利益になるのです」
「力？」
「ええ。私の力と通じるものですが、彼女は自分の意思を、言葉を使うことなく直接我々の心へ伝えることができます。俗に言う、テレパシーのようなものです。かつての記録で、我々の持つ力へつけられた名前は、“オモイノチカラ”。彼女はそれを有しているのですよ」
　これもまた、到底信じられない話だった。テレパシーのようなものと言われても、それはあくまで虚構の世界にあるものなのだ。例にされたところで、納得がいくはずもなかった。
「疑うのも無理はありませんが、とにかくこれは命令です。どれだけの疑問を抱こうとも、従ってもらいますよ」
　口調は柔らかなままだったが、有無を言わせぬ威圧感が入り混じっていた。雰囲気に呑まれ、シルラは何も言えなくなった。
「……それくらい分かってますよ。ただ、やり方はこっちに任せてもらっていいですかね」
　代わりに、ガヌが不機嫌な声色でしゃべる。彼も、疑問を持っているようだった。
「ええ、かまいません。サリア＝ミュルフを私の前に連れてきてくれさえすれば、あとは何をしようと自由です。私へ反抗することも止めません。その結果どうなるかは、何も約束できませんがね」
　ミッドハイムの返答は、脅しだった。シルラにはガヌが何を思って、やり方は自分たちの好きにさせるよう求めたのか分からなかったが、滅多にシリアスさを出さない彼が、引きつった表情を見せた。
「とにかく、しっかりと任務をこなしてください。これは、最重要の任務と言っても過言ではありませんので。詳細はまた後日としますから、今日のところはもう退室していただいて結構ですよ」
　部下の反応には気づいているに違いなかったが、触れることなく、

ミッドハイムは退室を命じた。
「……失礼します」
子供のように、ガヌは露骨に機嫌を損ねていた。足早に扉へ向かっていった。
「私も失礼します」
シルラも頭を下げて、逃げるように彼へ続いた。こうして、ガヌと執務室を後にしたわけである。ノーザンは、一緒ではなかった。
しばらく、無言で廊下を進んでいたのだが、途中でガヌが口を開いた。
「シルラ」
「なんだ」
「お前、あの任務をどう思う」
訊いてきたのは、簡単なことだった。キッと、睨みつけるような目線を送った。
「あの内容で、私が楽しみにしていると思うなら、お前はたいした目利きだ。眼科に行った方がいい」
強い口調で答えた。得体のしれない恐怖から解放され、いつもの調子を取り戻していたのである。
「お前なら、きっとそうだと思ったよ。なら、協力してくれないか、シルラ」
「協力？」
「ああ。任務は成功させる。ただ、“完璧”にはこなさない。とっかかりを作る」
「とっかかりって、どんなだ」
突拍子のない発案だったが、否定はせずに話を聞いた。ガヌの目が、いつになく据わっていたというのもあった。
「それはまだ分からないが、裏部隊の奴らだけじゃなく、俺たちをこの任務に当てた理由が必ずある。ということは、対象であるサリアって子のことを調べたら、何かが見つかるかもしれない。そこが、とっかかりになるはずだ」

彼の言葉は、力がこもっていた。確かな可能性はなかったが、シルラは迷わなかった。

「なるほどな。実にお前らしい、不安な作戦だ」

まず皮肉を放ってから、

「だが、そこでためらわないお前を評価して、協力してやろう。会ったこともない少女だが、理不尽に巻き込まれるという時点で、助けることに疑問はいるまい」

彼への全面的な賛成を表明した。目を合わせてうなずく。

「だが、軍王はどうする。もしも、奴の話が本当であるならば、次に会ったときにバレてしまうぞ」

「問題ないさ。こっちが目的を達成できるなんざ、奴は思ってない。何を考えてるのがバレても、釘を刺されるくらいで、本気で止めにはかからないだろう。さっきも言ったが、わざわざ俺たちを選んだ理由があるんだからな」

シルラの持ち上げた問題点へ、彼は間髪入れずに解答を示した。

「ずいぶんと自信満々だが、何か確証があるのか」

ただ、どう考慮しても不十分であった。予測はついていたが、一応尋ねてみた。

「ない！　全部推測だ」

案の定、はっきりと証拠はないと返され、思わず笑ってしまった。

「ははは！　さすがだな。やはり、貴様は理解できん」

「んあ？　なんだよ、仕方ないだろ。分からないものは分からないんだ。でも、だからって全部を受け入れるわけにもいかねえ。可能性があるなら、そこに賭けるぜ、俺は」

笑われたことに対し、彼は口を尖らせた。なんとか笑いを抑えて、言葉を足す。

「すまん、すまん。別に、貴様を馬鹿にしているわけではないのだ。私だって何も妙案は思いついていないしな。ただ、あまりに貴様がいつもどおりに根拠のない自信を持っているものだから、おかしくてたまらんのだ。ふふ、あははは！」

そのうちに、シルラは我慢できずにもう一度笑い出した。廊下を歩いている他の人間たちが目を向けてきていたが、まったく気にならなかった。

「なーにが、そんなにツボに入ったのかねえ」

ガヌは呆れたような声を出したが、彼も口元が弛んでいた。

「私も分からん。とにかく、おかしいのだ。なんにせよ、私たちでなんとかするぞ、ガヌ」

「笑いながら言うかー、そういうこと？　まあ、同意するけどな」

こうして、二人は攫う対象たる少女を救うために、動き出したのであった。見通しは暗かったが、ガヌがいるなら、シルラには希望が途絶えることはないように思えた。

事実、彼らの行為は無駄にならなかった。少女のすぐ近くに、軍の語り草となっているトルマ＝シェードと、その息子でありエリート街道を歩む実力者のニック＝シェードの姿があることが分かった。ガヌの見立てだと、ミッドハイムは裏部隊の人間を派遣した場合に、捕らえられたときの情報流失を恐れているのではないかということだった。

そこで二人は、ニック＝シェードとの連携を考え出した。しかし、その矢先に彼は首都から弾き出されてしまった。軍王から二人への牽制なのか、それとも元々遠ざける予定だったのか定かではなかったが、助力者になりうる人間が、首都から一人いなくなってしまったのである。

だが、二人はあきらめなかった。まだトルマ＝シェードの存在があったし、首都から離されたことで、シェード親子が陰謀に気づく可能性は、十分にあったからである。ただ、トルマが表に出てきたとしても、二人には、任務をしくじるわけにはいかないという共通認識があった。任務に失敗して、自分たちが処分されるのは、避けたかったのである。死んでは元も子もない。

なので、任務には支障をきたさない程度に、あらゆる部分で“きっかけ”を作るようにした。同僚たちに任務内容をぼかして伝えて

みたり、サリアの誘拐を昼間に決行したり、行き帰りはわざと人目につく場所を通ったりと、誰かが自分たちの行為に気づき、アクションが起こることを期待したのだ。

（そう、“何か”を待っている。ニック＝シェードでも、トルマ＝シェードでもいい。何か、動きが起きればと）

二人自身は、期待している外部からの“何か”が起きるまでは、動かないと決めていた。先んじて動き、軍王に見咎められてしまうと、いざというときに動けないためである。

しかし、サリアのつぶやいた言葉に、シルラは揺れている。本当に、あるかどうかも確かではないきっかけを待つしかないのか、と。眠り続ける少女を見下ろす。答えは、もう心にあった。

「ふん。どうせ、階級に興味はないしな。私が軍人になった理由を、まっとうしないのでは、ここにいる意味がないだろう」

初志を思い起こし、決意を固めていく。

「“護りたいものを護る”。それだけのことだ」

待つだけをやめる。組織に属する身であるシルラにとって、危険きわまりない行為だった。それでも、譲れないものがある。

「貴女に、悲劇は似合わないしな。好きな人間のそばで笑えるように、精一杯努力しよう」

少女の髪を、優しく撫でた。まだ幼いとはいえ、彼女にはもう大切な存在がいる。シルラは、少女をそのそばへ返してあげたかった。

（ガヌには、伝えんといかんな。引き止められるかもしれんが、ここは譲れん）

決心したところで、一緒に少女のことを考えてきた同輩のことがよぎる。心配してくるに違いないとは思ったが、彼が相手でも今の気持ちは曲げるわけにはいかなかった。

シルラが少女のために動くことを決めた頃、ノーザン＝ジャッジは、軍王の座する執務室にやってきていた。
「それで、資料はまだ残っていましたか？　シャズの町にあった施設は、規模こそ小さかったですが、優秀な検体がいましたから、なかなか興味深いものも多く残っていたかと思いますが」
口火を切ったのは、ミッドハイムである。例によって、顔には微笑を浮かべていた。
「優秀な検体ですか。はは。まあ、確かに“力”をすでに持っていましたからね。研究者たちも、かなり盛り上がっていたようです」
ノーザンが声を上げて笑い、持ち帰った資料をぞんざいにミッドハイムの机へ投げ置いた。かなり傷んでいたが、軍王は口角をさらに上げる。
「素晴らしいですね。まだ、こんなにあったとは」
上機嫌に、紙やファイルをいじり出した。動作自体は子供のようなのだが、可愛らしさはない。見た目などの問題ではなく、何かしらの恐ろしさがあった。
「しかし、どうして今更、あそこの資料を？　主要なものは首都に移したのでしょう」
それを肌で感じつつも、ためらうことなく、質問する。資料から目を離さずに、ミッドハイムは言葉を返してきた。
「ええ。私の求めていた“力”とは、また別物でしたから。ただ、サリア＝ミュルフを手中にした今、あらゆる面からの調べ直しが必要になるのですよ」
彼の求めている“力”については、ノーザンも詳しく知らなかった。なので、最終的にどうしたいのかも分からない。
「へぇ……。しかし、遠くからしか見ていませんが、あの少女がそんなに大事な存在だとは、信じられないですけどね」
軍王が出した少女の名前に反応し、率直な感想を漏らす。

「否定はしません。彼女の価値が分からなければ、そう見えるでしょう。情報を持っていなければ、ダイヤも石ころと同じです。ただ、ダイヤに値するための力を、彼女が既に発現しているかどうかは、定かではありませんが」

それに対する相手の返しに、ノーザンは首を横に傾けた。

「発現？　ジーニアスの研究では、“オモイノチカラ”は先天的なもので、生まれた時点で、もう発現はしているとかいう話ではありませんでしたか」

「普通ならその通りです。ですが、ただでさえ稀有である“オモイノチカラ”の力の持ち主の中でも、彼女はさらに特別な存在なのですよ。世界を変えられるかもしれないほどに」

答えながら、軍王は自分のイスの背もたれへと体重をかけた。静かに目を閉じる。

「私は長い間、それを追い求めてきたのです」

「貴方にそこまで言わせるとは、いったいどんな力なのか余計に気になりますね。そろそろ聞かせていただけませんか」

国の頂点に立った男が、長きに渡って求めてきたものに興味があった。

「まだ、詳細を話す気にはなりませんね。時が来れば、おのずと分かるでしょう。貴方が察するか、私の口から明らかにされるかは、断定できませんが」

しかし、ミッドハイムは答えなかった。どこに目線を合わせるでもないが、わずかにまぶたを持ち上げる。

「今日は、もう結構ですよ、ノーザン准尉。まだ懸案事項がいくつかありますから、明日からはそちらを任せることになるでしょう。レインが現れたというのを、私に報告してこなかったのは、見逃してあげますので」

「……それは、どうも」

（本当に、かなわない人だ）

たぶん、これも読まれているだろうと思いながら、内心で冷や汗

をかいた。

「あー、まあ、今日はこんなとこでいいや」

報告書類の山を、全体の四分の一程度片付けたところで、ガヌはペンを置いて背伸びをした。周囲のデスクには、既に誰もいない。

「さってと、あいつはまだサリアちゃんの監視か。ご苦労なこって」

頭に、自分も行ってみようかという選択肢が浮かんだが、首を振って打ち消す。

「ダメだ。俺は、ダメなんだ」

自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「貴方の人生ならば、貴方の好きに生きればよいのではないですか」

そこに、柔らかな声が飛び込む。ガヌが扉の方へ顔を向けると、ミッドハイムが立っていた。

「……それは、何に対してですかね」

「好きに解釈なさって結構です。シルラ中尉のことでも、レインのことでも、その他のことでも」

「さいですか」

心が読めるのなら、言葉による駆け引きは意味をなさない。自然と手が汗ばむ。

「そんなに身構えなくても大丈夫ですよ。私は、貴方に新しい任務を命じに来ただけですから」

そんな心内すら見透かし、ミッドハイムは穏やかに微笑む。

「新しい任務？」

「ええ。明日の朝一番に、ニケアのニック少将のところへ行ってください」

「ニケアへ？」

「はい。彼を、暗殺していただきたいのです」

「……なんですって？」

「ニック少将の暗殺です。嫌とは言わせませんよ。断れば、女性が一人亡くなることになりますから」
思い当たる人物は、たった一人だった。
「シルラが人質、ですか」
「さあ、どうでしょうね」
ミッドハイムはうそぶくだけだった。
「とにかく、任務を達成してください。大切な人を失いたくなければ」
勅命書をガヌのデスクに置き、彼はその場から去っていった。
「……困ったね、こりゃ」
ガヌは、一人勅命書を指で弾いた。

八章『首都セルゲンティス』

「はっきり見えてきたな」
「ああ。あれが、首都セルゲンティスさ。見え始めてから、ずいぶんかかったけど」
シャズを出て二日、朝方に、カリクとレインはようやく首都へたどり着いた。無機質な灰色の外壁に囲まれ、建物を目視できない街がフロントガラス越しに見える。
（あそこに、サリアがいる……）
自然と、心がざわついた。ここまでの道中でも色々あったが、あくまで本番はこれからなのだ。
トンと、肩を叩かれた。身体が揺れる。もちろん、レインである。
「なんだ、レイン」
「いや、力んでるから、リラックスさせようかと」
「余計なお世話だ」
「そりゃ、悪かったねー」
悪びれる様子は皆無だった。カリクは、肩をすくめる。事実、余計な力は抜けたのだが、礼をいう気にはならなかった。
「んあっ？」
「今度はなんだ」
「いや、向こうから車が来てるんだ」
レインが、顎で前を示す。確かに、一台の車の姿があった。
「首都近くなんだ。車くらい、普通だろ」
「まあ、そうだけどさ」
反対側からの車と距離が詰まる。すれ違う刹那、カリクははっきりと運転席にいる男の顔を目にした。
「あいつは……」
忘れようにも、忘れられるわけのない人間だった。サリアを誘拐したうちの、一人だったのである。一瞬のことだったが、間違いな

かった。落ち着いたはずの感情が、怒りで一気に高ぶる。
「どうしたよ、カリク君。急にそんな怖い顔して」
「別に、なんでもない」
「鼻息荒く答えられても、信憑性に欠けるぜ」
「とにかく、なんでもない。そういうことにしておけ」
しかし、頭は冷静で、今はあの男のことに気を取られずに、首都に捕らわれているであろうサリアの身を優先すべきと意見していたので、カリクは心を抑えた。目的地は、すぐそこにあるのだ。すべきことは、男を倒すことではない。
（それにしても、ずいぶんと思い詰めた表情だったな、あの男）
ただ、そんなことが少し引っかかった。
「釈然としないけど、カリク君は怒ると怖いからな。そういうことにしとくぜ」
レインは横目でカリクを見ながら、苦笑していた。別の話題に移る。
「そういえば、首都じゃ入るときに兵士の許可をもらわないといけないんだよな。このまま車で入るわけにはいかないじゃん。こいつはどうするんだ？」
自分の座るイスを片手で、二度叩いた。既にそのことについて考えていたカリクが、返答する。
「近くで降りていけばいい。徒歩なのを怪しまれるかもしれないが、知り合いに送ってもらったことにすれば、問題ないだろう」
「なるほどねー」
「それよりも、どうやって入り口の審査を通り抜けるんだ。軍の方針で、確か身分確認をしてるんだろ。俺はともかく、お前はどうするんだ」
車をどうするかより、門前での軍による身分確認をどうするかの方が重大な問題だった。へたをすれば、レインはこの国に存在すらしていないことになっているかもしれないのだ
しかし、心配するカリクをよそに、

「大丈夫大丈夫。手はあるから、カリク君は気にしなくていいよ」
軽い調子でレインは片手をひらひらとさせた。
「本当だな？」
「本当だよ。俺っちは、嘘ついたことないぜ」
自信満々に、胸を張る。どうやら、偽りではないようだった。
「ならいい。近くで車を降りよう」
「了解だぜ、カリク君」
（待ってろ、サリア）
幼なじみと違い、誰かの心に響くことはないが、強い想いであった。

「はい、止まってくださーい。首都観光に来た方ですか？」
「はい。夏休みなんで」
入都管理局の人間に門前で止められ、レインがにこやかに答えた。
二人は、少し離れた位置で車を降り、首都への門へとやって来ていた。近くで見ると、外壁の高さがよく分かる。圧巻だった。
「ああ、なるほど。もうそんな季節なんですねー」
管理局の男は、カリクたちがまだ子供であるというのもあってか、態度が柔らかかった。
「でも、徒歩で来るっていうのは、不思議ですねー」
ただ、さすがに首都の門を預かっているだけあり、仕事は手を抜いてくれそうになかった。
「友達のお父さん車で、近くまで送ってもらったんです」
レインが、用意していた嘘を口にする。
「ふーん。なるほど。でも、それならどうして門の前まで送ってくれなかったんですか？　そうすれば、あなた方は歩かずに済んだと思いますが」
「んー、怪しがられるかもしれないですけど、僕が少し歩きたいっ

て言ったんです。外からの首都も、ゆっくり見たかったですし」
「ほうほう。まあ、外から見たら、それはそれですごいですからね、ここの外壁は。たまにいますよ。この正門を後回しに、外壁ばっかり見てる人」
　他にも、同じような人間が今までにいたのか、疑っていた態度が軟化する。
「おっと。中へ入りたかったんですよね。入都の手続きをするので、ついてきてください」
「はいはーい」
　レインが元気に返事をし、後ろにカリクは続いた。入都管理局の男が駐在している、門脇にある小屋のようなところへ案内された。
「住んでいる町と、名前を言ってください」
　位置的に、まず前にいるレインが答えるのが自然だった。まだ、彼がこの質問にどう答えるのか知らないカリクは、思わず唾を飲み込んだ。
「オールンの、プックル＝エンハンスです」
　すると、レインはまったくのデタラメと思われる情報を、迷いなく口にした。カリクは声を上げそうになったが、なんとか耐え切る。
「オールンのプックル＝エンハンスですね。そっちの君は？」
　動揺するカリクへ、入都管理局の男は続けて尋ねてきた。平静を装って、名前を明かす。
「キュールの、カリク＝シェードです」
「シェード？　もしかして、ニック大佐の……、ああ、この前少将になりましたっけ。ニック少将の身内の方ですか？」
「ええ、まあ」
　向こう側の持っている情報で、すぐに分かってしまうだろうという判断から、隠さずに認めた。
「本当ですか！　いやー、ニック少将には以前仕事で助けて頂いたことがありましてね。感謝しているんですよ」
「はあ……」

あくまで父の話なので、カリクは曖昧な返事をするしかなかった。
その間に、男は手元で何かをあれこれと操作しているようだった。
小屋内の奥の方で、何かがはずれたような音がした。
「お二人の情報をお持ちしますので、ちょっと待っててくださいねー」
男は、にこやかに言ってから、奥へと姿を消した。
彼が言っていた“情報”とは、個人情報のことである。出生届と一緒の提出になり、以降は変更がなければ五年に一度確認をさせられるものだった。男が、それらしき紙を持って、戻ってくる。
「お待たせしました。身分証明の類は持ってますか？」
「持ってますぜ」
「はい」
レインとカリクが、それぞれ一枚の紙をカバンから出して、男へ渡す。国側から配布されている、公的な身分証明書だった。
「ちょっと拝借。……うん。二人共、オッケーですね」
用意してきた紙と照らし合わせ、男は身分証明書をカリクたちに返してきた。受け取り、カバンへしまい直す。
「じゃあ、荷物検査するんで、カバンをもらえますか」
「はいはーい」
レインが、素直にリュックを差し出す。
「あー、そうだ。来る途中で、キャンプもしたんでナイフが中に入ってるんですよねー。やっぱり、持ち込むのはまずいですか？」
「んー、サイズによりますかね。そりゃ、事件を起こす気だっていうなら、没収しますが、そんな気はないですよね」
「もちろんですよー。当たり前じゃないですか」
いけしゃあしゃあと言い切る。大物だなと、カリクは密かに思った。
「そうですよねー。それでは、失敬しますよ」
男は、容赦なくカバンを開いた。中を手でまさぐり、さらには覗き込む。だが、

「んー、確かにナイフですね。でもまあ、大丈夫でしょう。違法ではありませんし」
　ナイフだらけのはずであるのに、彼は厳しいことを言わなかった。普通にカバンを閉じ、レインへ返す。
「じゃあ、次は君ですね」
「はい」
　カリクも、ためらいなくカバンを渡した。レインと違い、元は危険なものなど入れていないからである。
「おや、君もナイフを持ってるんですね。特に問題はないですけど」
　ただし、今は数本のナイフを入れていた。レインのカバンの中身が見咎められなかったのは、身体への仕込みナイフを目一杯増やし、カリクも隠し持って、残りの数本だけを荷物にしていたからである。
「うん。大丈夫ですね。お待たせしました。今から門を開けます。首都セルゲンティスを、ゆっくり見ていってくださいね」
　男は、にこやかに大きな二枚扉を手で示した。ゆっくりと、門が内側へと開いていく。
「ういっす。じゃ、行こうぜ、カリク君」
「……ああ」
　とうとう、敵地へと足を踏み入れることになった。覚悟も新たに、カリクは門を通った。中に入ったところで、後ろの扉が閉じていく。
「入ったが最後。簡単には、逃げられないってとこか」
「んー、あの門だけ見てると、そんな感じするけど、出るのはそんなに難しくないぜ。実際、俺っちは出れたし」
　カリクのつぶやきに、レインが反応を示す。実体験では反論の余地がないので、カリクは「そうかよ」と、肩をすくめた。続けて、先ほどの入都手続きのことに話を移す。
「それより、いったいどうなってるんだ。オールンのブックル＝エンハンスって、誰だよ」
「ああ、あれか。あれは、ジーニアスの実験体にされてる人間へ与えられる、仮の名前さ。時折実験のために実験対象を町の外に連れ

出すことがあるんだけど、ジーニアスでの人体実験は下っぱとかには隠されてるから、入都のときに個人情報が必要なんだ」

「仮の名前、か。まあ、軍王主導なら、情報のでっち上げも簡単だろうな」

ミッドハイムは、いったいどれほど権力を自身のために活用しているのか、想像が及ばない。

「ま、とにかく」

先を歩いていたレインが、立ち止まって振り返ってきた。顔には微笑を浮かべる。

「首都へようこそ、カリク君」

黒く巨大な中央基地と、高く高くそそり立つ外壁を背景に、賑わいと無機質が入り混じる首都の光景が、カリクの目に映った。

「さあて、どこから攻めるかね？」

街並みを見るカリクへ、レインが問う。どこか楽しげだった。

「まずは、町を普通に見て回る。ある程度、地理は把握しておいた方がいいだろうしな。まあ、本部基地はあれ以外あり得ないだろうが」

カリクは、眼前にそびえる巨大な黒の建物を睨んだ。レインも、同じものへ目をやる。

「ご明察。あれが本部基地だ。やたらでかいから、実際はここからけっこう歩かないといけないけど」

「あれが、ミッドハイムの城か」

言葉に、隠しきれない敵意が乗る。すると、レインが顔を近づけてきて、

「おっと、その敵意は抑えた方がいいぜ、カリク君。ここは、軍王のお膝元だ。敵視している奴は、当然目をつけられる」

低い声で警句を告げた。軍王の支配下の町だからこその注意である。

「なるほどな。肝に銘じておく」

カリクも、低い声で答えた。目的達成のために、危険を自ら冒す

つもりはない。
「じゃあ、案内は頼むぞ、レイン」
「ういっす！」
レインは弾んだ声で答えた。

昼食を挟み、昼下がりになってようやく簡単に首都を回り終えた。
「ふぅ。想像以上に、でかいな」
「まーなー。軍事国の首都で、演習場が多いのに、観光にも一定の力を入れてるから必然的に大きくならざるを得なかったんだろうさ」
頭の後ろで手を組み、軽い調子でレインが言葉を返す。確かに、演習場はあちこちに点在していた。
「さて、じゃあ次はあっこに行くかい？」
中心にある基地へと、彼は目をやる。敵の本陣や重要な拠点は後回しにしていた。
「……いや、本部基地は一番最後でいい。先に、ジーニアスのある場所を教えろ」
「了解了解」
しかし、カリクは先にジーニアスを見に行くことを選択した。すでに軍には、レインのことが知られているはずなので、本部基地はリスキーだった。視察の段階で騒動を起こしたくなかったので、場所が明確な基地は後回しでもいいという判断だった。
「じゃあ、行きますか。こっちだ、カリク」
レインが歩き出す。基地への方向だった。重要施設なので、あまり離れた場所ではないのだろうと予測する。
「ちなみにジーニアスは、本部基地近くの、普通の研究所の地下にある。普通じゃ入れないし、入り口すら分からないと思うから、怪しい箇所がなくても、俺っちを疑わないでくれよ」
「分かった。一度見て、建物から離れたら出入り口を教えてくれ」

「おいよー。任せとけ」
そうして二人は、研究所へと向かった。

研究所は、本部基地から五分ほど歩いた場所にあった。真っ黒な基地とは逆に、外装は白一色に塗られている。二階建てで、敷地が広い。代わりに民家を入れるなら、三十戸は置けそうだった。
「ここが、研究所。セルゲンティスの中には他にもあるけど、ここが一番大きいし、メインだな」
入り口が見えてきたところで、レインが解説を入れた。主要な研究は、ここで受け持っているのだろう。
「中には入れるのか？」
「一般公開してる部分なら、見学料を出せば入れるぜ。どれ、中を見てみるかね」
「お前、入って平気なのか。顔を知ってる奴がいるだろ」
一人で入って、一通りを確認するつもりだったカリクは、レインへ顔を向け、そう尋ねた。
「あー、平気平気。警備してるような軍人は、まずジーニアスなんて知らないから、俺っちの顔なんて分からないよ。それに、立ち入れるのは、“表”だけだしさ。俺っちのことが分かる人間とは会わないと思うぜ」
当の本人は、まったく心配していないようだった。「んーっ」と、腕を上げて、伸びをしている始末である。
「なら別にいいが、何かあったら、切り捨てるからな」
「えー、助けてくれよ、カリク君」
レインが大げさに声を上げる。少しかんに障ったので、
「……お前を囮にして、注意がお前へ向いている間に、行動起こすなんて手もあるな。当然、お前がどうなろうと責任は持たないが」
冷たく言い放った。

「……怖いねー、カリク君」
レインは、なんでもないような感じで返したが、頬が引きつっていた。
「とにかく、平気なら別にいい。さっさと行くぞ」
「おう」
ようやく、研究所の入り口に立つ。門番のように佇んでいる軍人二人が、ほんの少し目線を向けてきたが、すぐにはずされた。怪しい動きをすれば、即座に武器を突きつけられるだろうが。
騒ぎを起こす気はさらさらないので、カリクとレインはそのまま中へと入っていった。受付らしき場所にいる人間に、声をかけられる。
「あら、見学？」
「ええ、まあ。宿題の参考にしようと思いまして」
レインが、果てしなくいい加減なことを口にする。だが、受付の中年女性は特に疑う様子もなく、
「あー、なるほどね。じゃあ、お金かかっちゃうけど、色々見ていくといいわ」
やる気なく、料金表と順路を指差した。
「ういーっす。ほら、カリク君。お金お金」
軽い返事をしてから、カリクに見学料を払うようせかした。
「分かってるから、静かにしろ」
レインをたしなめ、金を雑に出した。受付女性が、それを受け取る。
「はい、確かに受け取りましたよ、と。案内の人はつける？」
「別にいいです。自分たちのペースで回りたいので」
「はいはい。じゃあ、そっちからだから、ゆっくり見ていってねー」
気だるそうに手を振る女性へ、軽く頭を下げ、カリクは既に進み始めているレインを追った。
中は研究所というよりも、科学館のような感じだった。今までの発明に関する解説と、簡単な体験スペースが点在しており、気軽に

科学に触れられるような仕様になっている。夏休みに入っているためか、客はそこそこ入っていた。見たかぎり、親子連れの割合が多い。

「……研究所そのものは、あまり見れないんだな」

カリクがぼやく。研究所を見学とはいうものの、科学者たちの姿はほとんど見ることができない。ところどころに、ガラス越しに実験中のところを見ることができる場所があったが、それほど今の二人にとって有益なものではなかった。

「まーなー。仕事の邪魔は、されたくないんだろうさ。それに、本当に大事な部分は、見せたくないだろうし」

「そうだろうな。けど、お前は見学を勧めてきた。出てから、ゆっくり話は聞かせてもらうぞ」

解説を入れてきたレインに言葉を返し、先へ歩き出す。もう少しで、見学ルートは終わりだった。元の受付の場所ではない。どうやら、出口は建物正面とは別にあるらしかった。立ち入り禁止の扉が左右に見える、カーブした廊下の先に、外の光が見える。

その出口の直前の壁に、カリクは違和感を覚えた。まじまじと見ては怪しまれてしまうので、長く見たりはせずに、光景を頭に刻む。前へ向き直って、外へ出た。

「ここで見学は終わり。どうだったかな、カリク君?」

傍らのレインから、冗談混じりの問いが飛んできた。暗に、ジーニアスへの入り口が分かったかどうかも訊いてきているのを、カリクは嗅ぎ取った。

「それなりに面白かったな。いい感じに、宿題がこなせそうだ」

なので、こちらも遠回しな表現で、入り口と思しき箇所を見たことを伝えた。レインは一瞬眉をわすかに動かしたが、

「なら、よかったぜ。俺っちが案内したかいがあったってもんさ」

大きな動揺は見せなかった。それどころか、胸を張ってみせる余裕すら見せる。出口にも警備兵がいたのだが、怪しまれることなく通り過ぎた。三分ほど歩いてから、人のまばらな裏通りへ、身を隠

すように入る。
「本当に分かったのかい、カリク君？」
「場所だけはな。合ってるかどうかは分からないし、どうやって中へ入るのかもさっぱりだが、出口付近の壁の足元部分が、周囲と無理に色を合わせたようになっていた。あれは、あの壁が見せかけで、後ろに隠されたものがあるからだ」
自分の考えが合っているかどうかを、目で尋ねる。レインは口笛を吹いた。
「ご明察！　さすがだねぇ、カリク君」
「ってことは、やっぱりあの壁の後ろにジーニアスへの入り口があるってことか」
「そういうこった。あそことはまた別の場所に、あの壁を動かす仕掛けがあって、それを操作すると、ジーニアスに入れるってわけ」
レインが調子よく解説を入れる。どうやら、壁を開くのは呪文ではなく、人工的な仕掛けらしい。
「なるほどな。入るための仕掛けが別の場所にあるとなると、潜入のリスクは余計に上がりそうだ」
ある程度の危険は承知の上でも、サリアのことを考えると忍び込むことは避けられない。なのに、地下施設へ行くのに一手間かかるとなると、さらに厳しくなる。
「だな。でもまあ、そこは俺っちもいることだし、追々考えることにしようぜ。それよりも、次は本丸、行くだろ？」
「……ああ、行くさ。正直、ジーニアスより怪しいからな」
レインが、とある建物へ顔を向けたので、カリクも同じものを見る。黒一色に塗りつぶされた敵の本拠地は、カリクたちを見下ろしていた。
首都セルゲンティスの中心に位置する、この国の心臓たる本部基地である。最後に、ここが残っていた。
「あそこも、中に入れるのか？」
「入れて、事務の受付部分だな。それ以外は一切入れないはずだっ

たと思うぜ。なんせ、機密の塊みたいなところだからな」
「ふん。サリアも、その中の一つってわけか」
「まー、そうだろうな。機密のレベルが、他とは段違いだろうが」
腕を組んで基地を睨みつけるカリクに対し、レインは微笑を浮かべる。
「じゃあ、行ってみましょうや。この軍事国の支えたる、本部基地に」
「ああ」
カリクは、低い声で短くうなずいた。

本部基地の外観は、とにかく黒だらけだった。右を見ても、左を見ても、窓と黒しかない。おまけに、建物の端っこまでが、かなり遠かった。
「馬鹿でっかいねー」
「お前の声も、考えものなくらいにでかいと思うぞ」
皮肉を挟み、全体を見渡す。すべてを視界に入れきるのは、まず不可能そうだった。
「少し、中に入ってみるか」
「あいよー」
上へ曲げていた首を元に戻し、中へ行く。見た感じ、ニケアの役所と同じような印象だった。人の数はそれなりといったところで、あちらこちらで事務手続きを行っている。
「まんま役所だな」
「そりゃまあ、基地以外にも、こういう生活関係の施設としての機能もあるからな。他にも、裁判所とか、政治関係の設備もあるし」
本部基地は、軍事施設としての機能だけではなく、首都の主要機関を内包している。最高裁判所、国会堂なども、基地内に存在していた。それも含めて、本部基地はまさにラスタージ共和国の心臓な

のである。
「でも、そういう場所を含めて全部立ち入り禁止だろ。ずいぶんと露骨な機密主義だな」
声を落として、批判を口にする。国がどのような会議をしているのか分からないというのは、カリク個人の考えでは不安を煽る要素でしかなかった。
「でも、それを誰も疑問に思わないのさ。ミッドハイムは、国を見捨ててはいないからな。しっかりと統治をしたうえで、陰謀を進めてる。多少の不満はあっても、明らかな悪政じゃないなら、会議内容が分からなくてもたいした問題じゃないんだよ」
耳元で、レインがささやくようにしゃべる。確かに、ミッドハイムの政治は悪政とは言い難かった。カリクの記憶では、民衆の声も拾っているし、露骨におかしい政策も行っていない。軍事に傾いているのはもっと昔からのことであり、大規模な戦争がここ最近ないため、特にその部分への批判も大きくは上がっていないかった。
「結果しか見えてこない状態ながらも、誰も過程を気にしていないってわけか。それに気づいたら、ゾッとしかしないな」
つまりはそういうことだった。役所部分を見渡しながら、カリクは腰に手を当て息を吐いた。
「まあその分、裏で色々してるけどなー。ジーニアス然り、カリク君の彼女のこと然り」
「そうだな」
サリアのことを話題に出され、心がざわつく。この街のどこかに、幼なじみの優しい少女はいるはずなのだ。
「絶対に、助け出す」
言葉に出して、もう何度目かの決意の固め直しをする。敵の巨大さを理解していても、サリアの居場所を探すことすら困難だと分かっていても、弱気になどならなかった。どうあっても助け出す。その感情しかなかった。
「うっはー。カッコいいねー、カリク君。こんないい男に助けても

らえるサリアちゃんて子は、幸せだねー」
　静かに、レインが騒ぎ立てる。音量はないが、耳障りには変わりない。
「うるさい。もう行くぞ」
「んあっ？　もう行くのか」
「見れるものが少ないからな。もう引き上げ時だろ。こっからは、足じゃなくて頭を動かす」
「頭を？」
「そうだ」
　首をひねるレインに背を向け、出口へと歩き出す。
「まずは、どうにかしてジーニアスに潜り込む。そのための方法を考える」
「なるほどねー。じゃあ、とりあえず今日の寝床でも探すか？」
「そうだな。まずはそうするか。拠点も必要だし、何より作戦をゆっくり考えられる場所がほしい」
　レインの提案に、カリクは乗った。腰を落ち着ける場所が必要だと考えたのである。
「どこか、いい場所はあるか？　宿でなくても、身体を休ませられる場所なら問題ないんだが」
　建物の外に出て、当てもなく歩き出す。この街に関して、カリクより何倍も詳しいであろうレインに尋ねた。
「うーん。野宿は、軍の見回りに咎められるんだよな。下手したら補導されて、最悪数日間拘留だし。宿の方が無難だと思うぜ」
「見回りか。どのくらいの人数で巡回してるんだ？　潜入は夜にするつもりだから、そっちでも、見回りに捕まると面倒だ」
　野宿のリスクだけでなく、まず夜に外をでること事態が厳しくなる可能性があるので、見回りの厳しさは重要な要素だった。
「人数はそこまででもなかったと思うぜ。なんせ、この街の規模だ。全体の人数は多くても、一人一人の担当エリアが広くなるから、気をつければ見つからない」

説明を受けて、それなら野宿でもと、カリクは考えたが、
「おっと。でも、俺っちは野宿は勧めないぜ。宿に泊まっていれば、見つかっても宿の部屋まで付き添われるだけで済む。リスクが段違いだ。あっ、もちろん適当な宿の名前を言うだけじゃ駄目だぜ。宿帳も確認されるからな」
先んじてレインに待ったをかけられた。不要なリスクは削りたいので、野宿は選択肢からはずさざるをえなそうだった。
「……なら、仕方ないな。宿だ。一番安いのはどこだ？」
「さあ。さすがに、俺っちもそこまでは分からないんだよな。でも、安そうな辺りなら分かるぜ。とりあえず、そこらで探すって感じでいいか」
「ああ、構わない。案内しろ」
「あいよー」
レインがカリクより前に出て、道案内を始めた。軽い足取りで進んでいく。カリクは、一度後ろを振り返った。黒くそびえる建物を睨む。
「カリク？　どうかしたか」
「ああ、悪い。ちょっとな……」
「ふーん」
レインに呼びかけられ、目線建物からをはずした。再び歩き出す。珍しく、彼はつついてこなかった。

結局、カリクとレインは基地から少し離れた、宿泊代の安価な宿にチェックインした。値段に見合い、埃なども目立つような、お世辞にも環境のいい宿ではなかったが、ベッドがあるだけでも充分事足りた。あてがわれた部屋で、二人は話し合いをして、深夜にまずジーニアスへ潜入することに決めた。
ちっぽけな少年たちによる、強大な国軍への抵抗が始まろうとし

ていた。

九章『潜入の夜』

夜遅く、次の日が非番なのか、酔っ払いながら通りを歩く軍人たちが見られるような時間帯だった。わずかなガス灯の光が点在する中で、二つの影が動いている。カリクとレインだった。

「いるか？」

「いや、平気だ。行くぜ」

視力がよく、闇の中でも目が利くレインに前を進ませ、カリクは“ジーニアス”の隠されている、研究所を目指していた。通行人であっても、軍人は警戒しながら進んでいく。

「いやー、こんなにドキドキするとは思わなかったね。シャズのときより、やばいかも」

「これくらいで、そんなに緊張してどうする。この後、もっと危ない橋がいくらでもあるっていうのに」

「まあまあ、いいじゃないの、カリク君。俺っちだってそれくらいは分かってるけど、それでもドキドキするもんはドキドキするのさ。なにしろ、見られちゃいけないってんだからな」

レインはどこか楽しげだった。小走りで、先行する。

「そうかよ。まあ、しっかり働いてくれれば、文句はないさ」

「どこの悪役のセリフだい、カリク君」

軽口をたたき合っているうちに、幸運にも誰にも見つかることなく研究所の入り口へたどり着いた。見学ルートだと、出口にあたる部分である。門番として、昼間と変わらず見張りの軍人が二人立っていた。入り口正面からはややずれた、研究所の向かい側にある曲がり角に、カリクたちは身を潜めた。

「さてと。じゃあ、手筈どおりに頼む」

「あいよ。でも、本当に大丈夫か、カリク。相手はプロの軍人だぜ」

「そうだな。だから、策を練ったんだよ。まともにやり合ってたら、命がいくつあっても足りないからな。だから、俺のことは気にしな

くていい。サリアを助けるまで、捕まる気も死ぬ気もない」
　驕っているわけでも、強がっているわけでもない。カリクは、冷静だった。そのうえで、ある作戦を立てていた。
「それより、お前もドジを踏むなよ」
「心配ご無用！　伊達に裏の世界を生きてきてないんでね」
「ああ、そうかい。期待してやるよ」
　投げやりにそう言うと、
「じゃあ、行くぞ」
「おう」
　獲物を手にとった。レインも、ナイフを手元で遊ばせる。
「カリク」
「なんだ」
「幸運を祈る」
「ああ、お前も死ぬなよ」
「了解っ！」
　作戦開始前最後の会話を交わし、二人は別れた。
　一、二分経ったところで、カリクは銃を持った右手を、夜空に向けて伸ばした。左手は、指を耳に突っ込む。そして、
「うまくいってくれよ」
　引き金を引いた。乾いた音が、周囲に響く。立て続けに、もう一発。少し顔を出して、門番たちの様子をうかがうと、明らかに浮き足立っていた。
（さあ、来い）
　腕を下ろし、腰の部分で銃を構える。意図したとおり、門番のうちの一人が、カリクの方に歩いてきた。恐る恐る、警戒しながら近づいてくる。向こうも、銃を手にしていた。カリクは息を潜め、ギリギリまで相手を引き寄せる。
　着実に、距離が詰まっていく。心音が、相手に聞こえてしまうのではと思えるほどに、うるさかった。
（いっても、実戦は諸々を数えても四回目だからな。そうそう、落

ち着いて臨めるもんでもないだろ）

自分が緊張しているのを認めたうえで、冷静さを欠かないように、肩の力を意識的に抜く。

そして、相手がカリクのいる路地に入った瞬間、

「退屈な警備、ご苦労様だな」

言葉と共に、敵の銃を撃ち飛ばした。後方へ、転がっていく。

「なっ……」

実戦不足なのか、相手の軍人はいきなりのことに対応できていなかった。すかさず距離を詰め、銃をつきつける。相手は、苦々しい顔で両手を上げた。

「後ろを向け。声を上げれば撃つ」

「貴様、何が目的だ」

「……自分の欲を満たしに来ただけだ。さっさと後ろを向け。もう一度しゃべれば、頭を撃ち抜く」

カリクの声は冷たかった。銃を突きつけられている軍人は、少し迷ってから舌打ちをして背を向けた。

「よし」

それを見たカリクは、少し相手に近寄り、

「想定どおりで助かる」

迷いなく、右肩へ鉛玉をぶち込んだ。

「んなっ……？」

自分の身体に空いた穴に驚き、続けて吹き出した赤色の液体を見てから、門番をしていた軍人は、

「ぐあああああ！」

痛みから叫びだした。その最中、

「眠ってろ。そのくらいの傷なら、生き残れる公算も高い。死んでも、責任はとらねぇが」

カリクは後頭部を殴りつけた。叫び声が急に途絶える。軍人は、意識を失って地面に倒れた。

（まず一人）

一つ段階を終えたのもつかの間、次の手順がすぐにきた。
「おい、どうした！」
もう一人の門番である。銃声に叫び声とくれば、さすがに持ち場を離れずにいられなかったと見える。手には、二丁の銃を持っていた。一人目の手から飛ばしたものを拾ったらしい。しかし、カリクは慌てずに、一つずつ拳銃を撃ち落とした。
「何っ！？」
正確に武器を飛ばされて、二人目の門番は、目を見開いた。その隙に、またもカリクは相手の肩を撃ち抜く。今度は、両方とも。
「ぐがあああああああ！？」
尋常ではない悲鳴が上がる。両肩をやられているせいで、傷口を押さえることもできず、すでに気を失っている仲間の横に膝を落とした。
「ゆっくり寝てろ。その間は痛みもない」
こちらにも頭へ衝撃を与え、気絶させた。静寂が訪れる。闇の中にはカリクだけが立っていた。
「意外に早く終わったな。レインの方も、うまくいけばいいが」
一度、研究所を見つめてから、足元に転がる軍人たちのうちの片方の両足首を掴み引きずり始めた。研究所の敷地内へと向かう。まだ踏み込むわけにはいかなかった。

「さあて、中の警備はどうなってるかね」
一方のレインは、“すでに”研究所の内部に侵入していた。門番たちが、カリクに気を取られている間に、忍び込んだのである。ある事情で、カリクはまだ入ってこない。
レインの目的は、ジーニアスへつながる隠し扉を開くことだった。場所は知っているのだが、たどり着けるかは定かでない。警備が厳しいのだ。とはいえ、巡回のパターンを覚えていた。施設にいたと

き、逃げるチャンスをずっとうかがっていたので、あらゆる情報を仕入れていたのだ。

（んーと、通路よりは重要なところの監視を固めてるんだよな。確か、ジーニアスへの入り口を開くスイッチの辺りも、厳しかったか）

手元でナイフを遊ばせながら、攻略手順を考える。あまり時間をかけられない“事情”もあったので、多少のリスクには目をつむることにした。

「まー、失敗したら、ごめんなさいだ、カリク君」

この場にいない人間へ、届くことのない謝罪をしてから、

「さ、行くぜ。軍人さんたち」

行動を開始した。

レインのいる位置は、見学ルートのゴール地点から、少し奥まったところである。研究所はだいたい三ブロックから成り立っており、レインのいる出口と倉庫などが集まった部分、入り口側の職員の詰め所とデスクの部分、そして実験室と建物自体の稼働に関わるメイン機器が集められている中央部分があった。目指すは、この中央部分である。

門番がいたために、ジーニアスへの扉前の守備は甘かったので戦闘になることにはならなかったが、この先はすべて避けられそうになかった。中央部分に近づけば近づくほどに、警戒は厳しくなるからである。

「まあ、なんとかなるだろ」

それでもレインは、気軽な言葉と共に進んでいく。

「えーと、あと少しだな、たぶん」

角を曲がったところで出くわしてしまった軍人をのしたところで、レインは一息ついた。目指す場所は、あと少しだった。

ここまでのところ、警備の厳しさをもろともしていない。パター

ンを覚えているがゆえに奇襲ばかりしたというのもあるが、単純にレインが場慣れしていることもあった。

角から、曲がる先の直線の様子を覗き見る。真っ直ぐ伸びる廊下の中ほどに十字路があり、その周囲を三人の軍人が巡回していた。退屈なのか、一人はあくびをかみ殺している。レインは、十字路を左にいきたかった。

（んー、避けるのは無理か）

手早く判断し、十字路に軍人が一人だけになったところで、駆け出した。

「なっ！？」

唐突な侵入者の出現に、若い男の軍人は面食らったようで、なんの抵抗も見せなかった。簡単に間合いに入り、みぞおちに一撃を入れる。体勢を崩したところで、続けざまに脳天へもう一発加えた。

「がはっ！？」

苦しげな声を吐き出し、男は崩れた。騒ぎを聞きつけ、他の巡回兵が走ってくる。

「何事だ！」

「なっ、貴様、侵入者か」

「うーん、世間一般ではそういう表現される状態かな」

ランタンを向けられたレインは不敵に微笑んだ。同時に、ナイフを飛ばす。

「うおっ！？」

刃先がランタンを囲うガラスを貫通し、光源を奪い去った。辺りが暗闇に包まれる。しかし、闇を歩いてきたレインにはなんの障害にもならない。

（二人目！）

片方の見回りに足払いを見舞う。「うおっ！？」とまぬけな声を出して、彼は背中から床に落ちた。鈍い音が響く。それから、少し首を締めて意識を奪った。

（最後！）

首が横に倒れたところで、すぐに次の敵へ視線を移す。明かりを失った中年くらいの男は、首をせわしなく回していたが、まったくレインを捉えられていない。

（楽勝！）

音を立てないように、レインは中年男の背後に回る。そうして腕を上げると、渾身の力を込めて相手の後頭部を殴った。「がっ！」と、息を漏らすような形で声を上げ、男は倒れた。

「はあー。軍人が聞いて呆れるねぇ。殺しにいってたら、簡単に死んでたっていうのに」

聞き手がいないにも関わらず、冗談めかした言葉を口にした。倒れている軍人たちから目を離し、十字路を左へ折れる。目的地は間近だった。

「むっ。貴様、一人か。もう一人はどこに行った」

「お手洗いです。じきにお戻りになるかと」

その頃、裏口では街を警備している兵たちと“門番”とが顔を合わせていた。ただ、門番は一人で、どうにも軍人にしては小柄に見える。腕を見たかぎり、引き締まった筋肉を持っているので、一概に軍人らしくないというわけでもないのだが。

「……ずいぶんと若く見えるな、貴様」

「そうでしょうか。確かに、年相応に見られることが少ないので、不満に思うことがしばしありますが」

警備兵の言葉に、門番は肩をすくめてみせる。

「ふん。まあ、いい。よく考えれば、本当にただの子供なら、門番に成り代われるわけがないからな。……しっかりやれよ」

「はい」

最後にほんの少しだけ態度を軟化させて、見回りの軍人は仕事へ戻っていった。背中が闇に消えていくのを見守ったところで、

「……ふう」
門番の服を剥ぎ取って着用していたカリクは、息を吐いた。門番がいなくなっていては見回りが不審がると思ったため、リスクを承知で成りすましていたのである。さすがに、ジーニアスへ乗り込むまでは、異変に気づかれたくなかった。
「まだか、レイン」
一人つぶやく。もう一度、巡回が来るときまでに扉が開かなければ、レインは失敗したと判断して、一旦退却するつもりだった。
タイムリミットが、刻一刻と近づいていく。だが、カリクにできることは待つことだけだった。深呼吸を一度挟み、前を向く。
と、背後から不自然な音が聞こえた。何か重いものを引きずっているような、そんな音。何秒間か聞こえ続け、やがて沈んだ。
「まあ、合格点だな」
カリクは、口元に微笑を浮かべた。門番の服装を脱ぎ捨てて、音の正体を確かめにいく。予測は、裏切られなかった。
「ふん。ずいぶんと深いな。首都の研究者どもは、地下がお気に入りか」
床とわずかに色合いのずれた不自然な壁がなくなっていて、下り階段が姿を現していたのだ。

「戻るか。カリク君だけじゃ、心配だし」
レインは、中枢部からややはずれた位置に隠されている、ジーニアスへの扉を開くスイッチにたどり着いていた。十本ほどナイフを手早く回収し、早足で裏口へと向かう。
スイッチの近くには、意識のない軍人たちの身体が五人分、並んで倒れていた。

「待ってろよ」
幼なじみの少女を想って、カリクがつぶやく。眼前は月明かりもない暗闇だったが、ためらうことなく足を踏み出す。足音が鈍く響いた。トラップに警戒しつつ、しかし足早に下っていく。
そのうちに、底についた。前には、もう一枚扉があった。隙間から、わずかに光が漏れている。
（誰も向こう側にいなければいいんだが）
頭でそう希望しつつ、いつでも銃を打ち込めるように、胸の高さで構えてから、ノブ式の扉に手をかけた。息を整える。
（よしっ）
自身へのかけ声と共に、扉を一気に開け放った。身体は中へ入れず、銃口を前へ向ける。だが、そこには人工的な光のついた無人の部屋があるばかりだった。
「ここも、電気って奴か。変な明かりだな」
数秒、五感をフルに使って、敵の気配を探りにかかったが、どうやら本当に誰もいないようだった。肩の力を抜き、天井を見上げる。
内開きのため、扉の影に誰か隠れていないかを目視してから、カリクは室内に入った。後ろ手で扉を閉める。部屋の左右には、資料とおぼしきファイルや本が並べられた棚があった。隅には、ダンボールが積まれている。どうやら資料室のような場所らしい。どこに出るのか分からないが、奥にはもう一枚扉かあった。
今の目的はサリアを探すことなため、資料へは目もくれず、カリクは奥の扉へ近づいていく。耳を当て、外の音をうかがった。聞こえてくるものはない。ゆっくりと、扉を押す。隙間から、今度は目で何かないか確認した。カリクのいる部屋と同じような明かりで満たされた曲線の廊下が、ただ伸びているばかりだった。
（人が、少なすぎやしないか……？）
機密施設とはいえ、重要機関であることには変わりない。なのに、あまりに閑散としていた。警備兵すら、今のところ姿を見ていない。

頭によぎるのは、既にレインの存在が知られており、自分たちが罠にかけられている可能性だった。
疑惑を持ったところで、後方から足音が聞こえた。ほぼ間違いなくレインだろうとは思いつつも、部屋の出入り口の死角に入り、息を殺す。足音は着実に階段を降りてきていて、接近していた。
やがて、扉が勢いよく開けられた。誰かが飛び込んできたのを脳が認識するが早いか、ナイフがカリクへと放たれた。わざわざ撃ち落とさずに、左へ避ける。
「やっぱりお前か。なかなか早くて、助かった」
銃を下ろし敵意がないことを示してから、やってきた人物に声をかける。向こうも敵意を消して、微笑した。
「おう。なかなかすごいだろ、俺っち」
予想に反さず、レインだった。ナイフが放たれたのは警戒のためだと理解しているため、カリクはわざわざ責めたりはしなかった。
「そうだな。じゃあ、さっそく次の仕事だ。道案内だから、たいして難しくないだろ」
「……人使いがなかなか荒いねー。確かにさっきほどの危険性はないかもしれないけどさ。時給いくら？」
「一日三食だ。さっさと行くぞ。裏口にまた見回りが来たら、逃げづらくなる。それに、お前も暴れたんじゃないか？」
レインの軽口をあしらい、カリクは廊下へつながる扉の方へ歩いていった。
「まあねぇ。ていうか、三食プラスデザートつけてくれない？」
レインが後から続く。
探索は、ここからが本番だった。
「とりあえず、サリアのいそうな場所を教えてくれ。時間がないから、さっさと回らないと」
「んー、それならいい手があるぜ」
廊下に出たところで、レインが人差し指を立てた。
「いい手？」

「うん。時間がかからなくて、かつ簡単な手段だ」
「聞くだけ聞いてやる。話せ」
上から目線の発言だが、レインは気にせずに自分の案を説明する。
「研究員かジーニアスでモルモットにされてる奴を、一人捕まえればいい。どいつもこいつもあちこちに目を光らせてるからな。サリアちゃんほどの大ニュースなら間違いなく、何か知ってるはずだ」
「捕まえれば、か。簡単そうに言うが、そんなうまくいくのか」
あまり現実的には思えなかった。今は警備の姿が見えないが、さすがに研究員たちは守られているはずである。となると、騒ぎになるリスクを含め、得策とは思えなかった。
「大丈夫、大丈夫。今の時間なら、だいたい単独行動してるはずだし、研究員共の要望で、警備兵も最小限の人数しかいないんだ。だから、誰か一人くらい捕まえられるさ」
カリクの心配をよそに、レインは楽観的な意見を口にする。納得しきれないものの、時間が惜しい現状では、ジーニアス内部に詳しい彼の意見に乗らざるを得なそうだった。
「仕方ない。その方法で行く。この時間に、関係者がいるとしたらどこだ」
「そうこなくっちゃな。今から案内する。ついてきてくれ」
自分の意見が聞き入れられたためか、機嫌よくレインは歩み出した。向かうのは最初の部屋から出て、左の方向だった。右に折れていく曲がり廊下を進んでいく。見張りとは、まったく遭遇しなかった。
「っと。ちょっとストップ、カリク君」
しばらくいったところで、レインが足を止めた。小声での指示に従い、カリクも止まる。
「どうした」
「獲物を見つけたのさ。今、警備の奴となんか話してるから、ちょっと待って」
どうやら、進行方向に狙い目の人間がいたらしい。レインよりは

前に出ないようにしつつ、聞き耳を立てる。二人の男性のものと思われる会話が届いてきた。

「妙に突っかかるね。君は、僕にそんな態度をしていい立場だったかな？」

「はっ。相変わらずの傲慢さですね、あんたらは。もういいですよ。教えてくれるかもと思った俺が馬鹿だった」

「おやおや、ずいぶんな言いようだ。君が軍人という職につけた理由をよく考えてごらん。我々のおかげじゃないか」

「言ってろ。ジーニアス出身の奴らのほとんどは、憎みこそしても、感謝なんてしちゃいねぇ」

直後、一人分の足音がして、どんどん遠くなっていった。片方が捨てぜりふを吐いて、その場から離れたらしい。

「あー、面倒な奴だけど、折れやすそうでもあるか。行くぜ、カリク君」

「あっ、おい」

飛び出したレインに、カリクは慌てて続く。廊下の先には、白衣を着た初老の男がいた。

「な、お前は」

「久しぶりだな、研究員Ａ」

驚きで固まっている男へ、レインは容赦なく拳を叩き込んだ。「がはっ！」という声とともに、男の身体が宙を舞い、床へと落ちる。呻く彼の首もとへ、レインはナイフを突きつけた。

「騒ぐなよ、おっさん。二度と騒げなくなるぜ」

「レ、レイン。逃げ出したはずの貴様が、なぜここに」

「ちょいと人助けさ。訊きたいことがあるんで、ついてきてもらうぞ」

「貴様に話すことなど、何もないわ」

口答えした男の首に、レインは刃を軽く立てた。赤く薄い筋ができる。

「あんたに選択権はない。いいから従っておけよ」

彼にしては、冷たい声だった。気圧されたのか、男が黙り込む。
その反応を見てから、レインはカリクへ目を向けた。
「カリク、移動するから手伝ってくれ。人がいない部屋を探す」
「ああ」
カリクは軽く請け合い、
「まあ、そういうわけだ。ちょっと付き合え、おっさん」
やや距離をとって、銃口を男に向けた。
「け、拳銃……。貴様は、いったいなんだ」
「答える義理はない。さっさと立て」
問いを弾き、命令する。男は不本意そうではあったが、レインに小突かれて立ち上がった。
「こっからなら、たぶん第二保管庫が近いな。俺っちについてきてくれ」
彼の案内で、カリクと白衣の男は、扉の横上に『第二保管庫』という表記のある部屋の前へきた。
「ちょっと待っててくれよ」
レインが懐から針金を出し、鍵穴をいじり始める。二分とかからずに、鍵が開いた。中へ入る。彼が入り口横の壁にあるスイッチを押すと、電気がついた。捕らえた男を、部屋の一番奥の壁に押しつける。
「さぁてと。あんた確か、わりと上層部の事情にも詳しい奴だったよな。色々と聞かせてもらうぜ」
先ほどと同じように、レインは男の首筋にナイフを近づける。
「貴様らに話すことはない」
しかし、相手はまだ折れない。なのでレインは、
「んー、あんまりプライド守ろうとすると、命が守れないぜ」
そう言ってから、男の右の手のひらに、ナイフを刺した。刃は手のひらを貫通し、壁に届く。
「あがァァァァ！？」
男が悲鳴を上げた。その音量に、カリクは顔をしかめる。

「これ、拷問だから。あんたの振りかざしてきた地位とか、なんの意味もないわけさ。まだ答えないなら、左手もいっておくか。バランスいいし」

「や、やめろ。分かった。話す。話してやるから」

血相を変え、男は簡単に意見をひっくり返した。レインが何度かうなずく。

「うんうん。いい心がけだと思うぜ。上からなのが気に入らないけど、そこはまあ目を瞑ってやるよ」

男の肩を叩き、微笑した。続けて本題に入る。

「じゃあとりあえず、一番に知りたいことから訊くぜ。最近、軍王君念願の“オモイノチカラ”を持った女の子が連れてこられたはずだ。その子は、今どこにいる」

「なぜ、貴様がそんなことを知りたがる？」

右手から鮮血を流しながらも、男が問い返してきた。レインがまた脅しをかけようと口を開いたが、言葉を発する前に男の顔の横に、銃弾が飛んだ。

「いいから、訊かれたことだけ答えろ。何度も余計なことを言わせるな」

カリクである。かすかに煙を上げる銃を手にし、男を睨んだ。

「わ、分かった分かった。キュールからきたという、サリア＝ミュルフのことだろ。話すから、もうこれ以上のことはしないでくれ」

男もかなりの恐怖を抱いたようで、情けない声を出した。慌てて本題に入る。

「サリア＝ミュルフなら、本部基地の地下にいる。本来なら、要人を匿うための部屋に閉じ込められているはずだ。軍王様は、手元に置いておきたいらしい」

「本当だろうな」

「ほ、本当だ。間違いない。上層部の会議結果がこちらにも回ってきたのだ。疑う余地はない」

カリクの追及に対し、男は必死に訴えた。どうやら、嘘ではなさ

そうだった。サリアはジーニアスではなく、本部基地に捕らえられているのだ。

（ちっ。手元に置いておきたいか。とんだ変態野郎だな。サリアに何かしてたら、殺すだけじゃ済ませねえ）

「はずしたか。となると、一回退かないとならないな」

内心での悪態とは裏腹に、カリクは冷静な判断を下す。ジーニアスにサリアがいないのならば、長居は無用だった。

「そうさな。でもその前に、せっかくこいつを捕まえたんだから、他のことも訊いておこうぜ」

「……聞いて損はないか。手短に済ませるぞ」

「了解っ」

しかし、レインの提案により、もう少し留まることにした。目の前にある情報源を活用するためである。

「さて、カリク君。何が聞きたい？」

問われたカリクは、少し考えてから、

「軍王の目的だな。漏らしていない可能性もあるが、そいつの予測でもいいから聞いておきたい」

顎で研究員を指した。サリアが誘拐されたときから、ずっと疑問だったことである。

「だってさ。どうなの、研究員Ａ。軍王の目的について、なんか心当たりある？」

カリクの言葉を受け、レインは捕らえた男へ顔を向ける。

「軍王様の目的？」

「そう。奴の目的。あんたの予測でもいいみたいだぜ」

「ううむ……」

もう反抗してきたりはせず、男は素直に考え始めた。うなり声を上げる。しばらくしてから、静かに語り出した。

「詳しくは分からないが、端々の行動と発言から察するに、おそらく軍王様は世界を欲している」

「世界だあ？」

レインが素っ頓狂な声を上げる。カリクも、口を半開きにして固まった。

「ああ。軍事力の強化は前々から行っていたが、それもそもそもは他国へ勢力を伸ばすためだ。だが、今の軍王様の場合、勢力拡大という小さなことではなく、世界を手に入れようというという考えをお持ちになられている」

呆気に取られる二人に構わず、男は続ける。

「軍王様は“オモイノチカラ”に、それだけのことができる“何か”があることをご存知なようだ。どのようなものかは、我々も知らされていないが、あの御方が言うのだから、まず間違いなく何かがある」

「“何か”だってさ、カリク君。思い当たることある？」

「いいや。サリアの力は、世界を手に入れられるなんて妄想を抱かせるようものじゃない。いったい軍王は何を知ってるんだ」

疑問の払拭につなげようと投げかけた質問であったのに、ますます謎が深まってしまった。

（それとも、サリアの“力”には、別の何かがあるのか？）

思い至った結論は、それだった。そうでなければ、サリアにこだわる理由がない。

「そうだ。貴様等が何をする気なのか知らないが、軍王様は強大で、偉大な御方だ。何をしようと、あの御方の敵であるかぎり、貴様等は何もできん！」

軍王の存在を思い出したからなのか、急に男は威勢を取り戻した。わめき始める。

「私にこんなことをしたのも、許されない。お前たちは、軍王様に楯突いたことで処刑されるのだ！」

「だってさー、カリク君。俺っち怖いぜ」

レインが茶化す。カリクは軽くため息をついた。

「アホか。それにお前は、殺しても死ななそうだ」

「……クールだねぇ、カリク君」

簡潔な返しに、レインは苦笑した。続けて、別のことを問いかけてくる。
「で、まだ訊きたいことはあるかい、カリク君」
「いや、いい。潮時だ。性急に退くぞ」
「あいよ」
カリクの選択は退却だった。本来はサリアがいるかどうかさえ分かればよかったところを、軍王の目的についても微かな情報を手にしたのだ。充分だった。
「こいつはどうする？」
レインが男を指差す。カリクは間を空けずに答えた。
「他と同じように、気絶させてそこらへんに転がしとけ。こいつ一人始末したところで、俺たちの顔は割れるだろうしな」
「んー、了解。いい時間だし、おねんねしときなー」
「な、何を」
男が自分へ伸びてくるレインの腕を見て、うろたえる。一方のレインは、明るい口調で伝えた。
「首絞めて、気絶してもらうだけ。殺すわけじゃないから、安心しな」
「バ、バカな真似はやめろ！」
彼の言葉を聞き、男はじたばたしたが、
「死にたくないなら動くな」
カリクに銃を向けられたため、おとなしくなった。
「そーそー。懸命な判断だな」
「うぐ。ううう……」
そして、レインが男の首を掴み、ゆっくりと力を加えていった。しばらく唸り声が上がっていたが、やがて静かになった。手を離すと、男の身体はガクリとうなだれ、彼の右手を壁へつなぎ止めているナイフを回収すると、今度は床へ落ちた。
「さて、行きますか、カリク君」
「……本当に殺してはいないんだな」

立ち去ることを促してきたレインへ、カリクは一応確認する。ナイフを手元で遊ばせている少年は、気楽そうに笑って答えた。
「殺してない殺してない。必要がないし。カリク君、もしかして敵の命は取らないタイプ？」
「いや、そういうわけじゃない。ただ、無闇に命を取るのはサリアも望んでないだろうから、気になっただけだ」
「ふーん。なるほどね。理解理解。俺っちもやたらに殺人はしたくはないし。ただな、カリク君……」
そこでレインは言葉を切り、カリクの方へ笑みを向けた。ただ、目はまったく笑っていない。むしろ、つり上がっていた。
「殺さないといけないって判断したとき、迷うなよ。迷ったら、死ぬのはお前だ」
「……肝に銘じておく」
いつになく真剣なレインの忠告を、素直に聞き入れた。目の前に立つレインが、満足そうにうなずく。
「よろしい。じゃあ、さっさとずらかるか。長居しても、いいことなさそうだし」
「ああ」
一人の白衣姿の男が倒れている部屋から、カリクとレインは出て行く。後は、退却するだけだった。

施設から逃げるのには、苦労しなかった。二人はきた道を戻り、裏口から出ていった。襲撃された情報が、他の見回りにまだ伝わってしないらしい。
「いやー、運がよかったね、カリク君。何事もなく脱出てこれるとは」
「そうだな。けど、明日はこうはいかないだろう」
「明日？」

首をひねるレインへ、カリクは静かに告げる。
「明日、本部基地に乗り込む」

十章『反旗の芽』

ガヌがニケアにたどり着いたのは、カリクたちがジーニアスに潜り込んだ頃から少ししたくらいで、もうすぐ夜明けという時分だった。本来であればもう少し時間がかかる距離だったのだが、シルラを人質とされたために、食事も睡眠もせず、ひたすらにアクセルを踏んできたのである。

（暗殺、か。馬鹿らしいな）

そう思いつつ、車を東部基地の入り口へと持って行く。当然、門番をしていた兵士たちに止められたが、勅命書を見せると、夜明け前であることもひっくるめて、疑われることなく中へ通された。通常勤務時間外でも警備の固い本部基地と違い、東部基地は閑散としていた。見回りはいるが、さほど数はいない。

そのため、東部責任者であるニック＝シェードの執務室へたどり着くのも、容易だった。軍王の部屋へ入る前のシルラのように、深呼吸をしてから扉を拳で軽く叩いた。

「首都から参りました、ガヌ＝ロード中尉であります。東部基地責任者であるニック＝シェード少将に用があり、お訪ねさせていただきました」

中へ呼びかけると、

「どうぞー」

男性のものではあるもの、それにしてはやや高い声が返ってきた。

「失礼します」

扉を開くと、

「それで、どんな用だ？　首都からの客人」

室内で待機していた十名ほどの軍人から、一斉に銃を向けられた。その包囲の奥に、ニック＝シェードの姿があった。短い金髪は無造作にあちこち跳ねている。肩幅があるものの、あまり背は大きくなさそうだった。眼鏡越しに見える目つきは鋭く、青い瞳はすべてを見

透かしているかのように思えた。
　急に敵意を向けられ、ガヌは両手を上げたものの、気持ちではひるむことなく、問いに答える。
「俺の大事な人を護るために、貴方の力を貸してほしいんです。ニック少将」
「んあ。どうやら、俺の予測とはズレがあるらしいな。正確な情報を得ていたわけではないが、お前は俺を殺しにきたんじゃないのか」
　堂々と目を見て言ったところ、ニックは少し口元を緩めた。
「軍王からのお達しはそれです。ですが、俺にその意思はありません。身体検査してくださっても結構です」
　さらにガヌは、迷いなく堂々と言葉を続ける。銃を構えているうちの一人が、ニックの方へ振り向いた。彼は、意味深な笑みを浮かべてうなずく。
「言葉に甘えて、調べさせてもらう。それにしても、勅命書をもらいながら、軍王の命に背くとは。何を意味するのかは分かっているんだよな？」
「ええ、もちろん」
　身体検査を受けつつ、ガヌは深くうなずいた。
「軍王は、俺の大事な人を人質にしたことで油断しているでしょうが、よくよく考えたら、その人質にされた奴は、ちょっとやそっとで死ぬようなたまじゃないんですよ。そこを、軍王は分かってない」
　勝ち気でいながら、もろい部分も併せ持つ女性軍人のことが頭をよぎる。人質にされたときは焦ったが、冷静に考えると、彼女はそうやすやすと殺されるような人間ではなかった。
「だから、俺は軍王に反旗を翻す。年端もいかない女の子を誘拐させるっていうのも、納得いかなかったですしね。もう、奇跡を待つだけはやめたいんです。力を貸してください」
　真っ直ぐにニックを見つめる。ガヌを囲っているうちの一人が、声を上げる。
「少将、騙されないでください！　これもきっと、こいつかミッド

ハイムの策のうちです！」
「ニック少将！」
ガヌは余計な言葉はつけずに、ただ名前を呼んだ。すべての想いを込めて。
「……いいだろう。信じてやる。例え罠だとしても、簡単にやられる気はないからな」
ニックはイスの背もたれに体重をかけた。完全にではないものの、一応は信じてもらえたようだった。
「少将、武器の類は弾の込められていない銃だけでした。他に、怪しいものは持っていません」
身体検査を終えた兵士が、手の中にある銃の、空っぽな弾倉を見せながら報告する。
「銃だけ、か。弾はどうした？」
「貴方が俺を完全に信頼できると思えたら、渡してください。それまでは必要ありません」
ニックの問いかけに対し、ガヌは堂々と答えた。奥のイスに座す少将が、笑い声を上げる。
「面白い奴だ！　まず、お前の知っていることを全部話せ。そしたら、銃弾はこっちからくれてやる。もし、油断させて俺を撃つつもりなら、それを見抜けなかった俺が悪いだけだからな」
「少将！」
先ほどニックへ苦言を呈した兵士が、再び上司を思いとどまらせようと呼びかける。しかし、ニックは首を横に振った。
「お前の意見も一利あるが、俺の意見には影響しない。こいつは白だと、俺は判断する」
「ですが……」
「なら、お前が見張ればいい。俺を撃たせるなよ」
なお食い下がろうとする部下に、若き将校はそんな言葉をかけた。唇の片側だけを上げる。
「はっ、はい！　絶対に少将殿を撃たせたりはしません！」

「ああ。頼む」
気合いのある返答に、ニックは満足げだった。
「そいつに向けた銃を離せ。大事な情報源だ」
続けて彼が指示を飛ばすと、ガヌを囲っていた拳銃の輪が解かれた。
「さあ、話せ。俺の子供に等しいあの子が、今どうなってるかも含めてな」
ニックがイスに深く座り直し、そう命じた。ようやくまともに対面したガヌは、その威圧感に冷や汗を流す。
（これが、史上最年少の少将か）
柔らかさの中に狂気と力を包み隠している軍王とは違い、揺るがない意志による別の凄みがあった。彼の意志とシルラ、そして“ある少年”のため、ガヌはゆっくりと口を開く。
「ご希望通り、話させていただきます。この任務の始まりから、ここまでのことを。手短にですが」
「ああ、構わん」
ニックの了承をもらい、ガヌはすべてを語り出した。

「現状はこんなところです」
「ふん。いい具合に、奴の舞台が整ってるわけか。気に入らないな」
ガヌが自身の知るかぎりのことを伝えると、ニックは顔の前で両手を絡ませ、忌々しそうにぼやいた。
「上層部は奴の手中で、俺みたいな自分に害な人間は中央から排す。おまけに軍事に力を傾けてはいても、安定した政治をしているから、ほとんど国民から反発は受けていない。何かの鍵になる、サリアも手に入れた。うまくいきすぎてて、気味が悪いくらいだな」
今の軍王のことを一つ一つ確認していくと、見事な展開になっていた。彼の書き進めているであろうシナリオどおりになっている。

「だが、まだつけ込む余地はあるな」
「ええ。だからこそ、俺は貴方に協力を申し出たんです」
ニックの言葉に、ガヌも同意を示す。部屋の端に退いた兵士の一人が、口を挟む。
「失礼ですが、つけ込む余地とはいったいどういうことでありますか。今の話のかぎりでは、ミッドハイムの思い描くとおりとおりに進んできていて、隙はないように思えますが」
「いや、トントン拍子で進んでるからこそ、不自然なんだよ。どんなもんかはともかく、奴の野望の鍵になるサリアを捕らえたのに、どうして奴は未だに何もしてもないと思う？」
「どうして何もしてないか、でありますか？」
ニックから問いかけられ、兵士が考え込み、しばらくして、「あっ」と声を上げた。
「まだ、ミッドハイムに必要なものが足りていないのでは」
「半分正解だ。正確には、ものは足りてるが、状態がまだ万全じゃないってところだな。一つの予測を立てるなら、サリアの能力には、まだ秘密があって、そいつが原因で、ミッドハイムはまだ動け出せないとかな」
部下の答えに、ニックはそう付け足した。さらに続ける。
「サリアが誘拐されたって報告を耳にしてから、三日目経つ。なのに、首都で目立った動きはない。何かを待ってるとしか思えない」
言い終えると同時に、彼は机に手を置き立ち上がった。
「だが、時間に余裕があるとはかぎらない。その何かが揃ったときに軍王がどうするかも分からない。動くなら、今ってところだな」
「少将？」
部下の一人が、腰を上げたニックへ声をかける。なぜ立ち上がったのかが分からなかったのである。
不思議そうな部下に加え、他の部下とガヌへ、ニックは不敵な笑みを向けた。
「首都へ行く。そこの奴の話が本当なら、首都にはレインともう一

人のガキが着いているはずだしな。ガキどもだけに、重荷を背負わせるわけにはいかない」

「……いいんですか。俺は協力は求めましたが、貴方ご自身に動いてほしいとは言っていませんよ」

ガヌが彼の意志を確認する。ニックは表情を崩さずに答えた。

「そんなことは分かってる。でもな、自分の娘みたいな存在が捕まってっていうのに、他に任せておくってのは嫌いなんだよ。自分で動かないと、落ち着かないのさ」

責任ある立場にいる人間からは、あまり聞かれない言葉だった。しかし、ガヌの聞いてきた噂には違わない。

「貴方は、話に聞いてきたとおりの人ですね。軍人でありながら、自分の考えに忠実で、部下だけに危ない橋は渡らせない。よく、陰謀だらけの首都で、少将まで上れましたね」

「別に、上りたくて上ったわけじゃないけどな。サリアのことを考えると、情報が必要だったから、上の立場の方が都合がよかっただけだ。で、親父の知名度も利用してここまできた。本当は、上に立つなんてのは苦手なんだよ」

「よく言いますよ。これだけ慕われているっていうのに」

ガヌは、この部屋の中にいる、ニックの部下たちを見渡す。見たかぎりでは、全員が上司を信頼しているように思えた。なにしろ、未だガヌを警戒し、銃から手を離していないのである。

「よせよ。そういうことは、本人の目の前じゃ言わないもんだ」

微笑とともにニックが答える。信頼されているという自覚はあるらしい。

「とにかくだ。うちの娘を助けに行くとしよう。お前ら、反軍王派全員に伝えろ。半分は留守番でこの基地を防衛、もう半分は首都に行くってな」

ニケアの地で、ついに若き将校が出陣を命じた瞬間だった。

場所は移り、首都セルゲンティス。朝日が既に高く昇っている時間だった。いつものとおりにシルラが本部基地へ出勤すると、何か騒がしかった。内容が分からないが、あちらこちらで噂話が飛び交い、一部の軍人は基地内を駆け回っていた。

「何かあったのですか」

先に来ていた上司を捕まえ、シルラは尋ねた。音量を抑えた声が返ってくる。

「にわかには信じられないんだが、なんでも中央研究所に、侵入者が出たらしい」

「侵入者、ですか」

「ああ。しかも、たぶんデマだとは思うが、侵入者は二人で、なんでも高校生くらいの子供だったとかなんとか」

「子供？」

首を軽くひねる。侵入者というだけでも信じられないのに、一層おかしな話だった。

「まあ、嘘だろうさ。軍人が警備に当たっていたはずだし、それを子供がどうにかこうにかできるはずがない」

上司は本気で捉えてはいないようだったが、サリアの脳裏には一人の少年のことが浮かんでいた。

（もしかして、カリク＝シェードか？　しかし、そうだとすると早すぎる。もしかしたら、もう一人いたという奴が何かしらの手を使ったのかもしれないが）

昨日、ガヌが何かの任務で首都を離れたことを知ったシルラだが、好都合ととっていた。ガヌを説得する手間が省けるためである。

「なんにせよ、警備はうちの班と関係ないからな。侵入者は然るべきところに任せて、俺たちは俺たちの仕事をするぞ。いいな、シルラ」

「ええ。もちろんです」

表面上では素直に応じたが、真面目と自負するシルラでも、今日

ばかりは心からの返事ではなかった。
（どうにかして、侵入者の情報を得たいところだな。もし本当に侵入者がカリク＝シェードなら、接触しておきたい。万一、情報が得られなくても、サリアの“力”で声は届けられるかもしれないな。今日中に試してみるか）
仕事よりも、サリアのことに思考の重きは置かれていた。

しかし、想いとは裏腹に、襲撃者の情報はなかなか集まらなかった。研究所の警備をしていた軍人たちは、事情聴取やらなにやらで捕まらず、他に詳しいことを知っている人間がいなかったのである。
（くっ。これでは、意味がないではないか。せっかく、ガヌを気にせず動けるというのに）
シルラは、昼食のパンを食いちぎりながら、あれこれと考えていた。
「ご一緒してもいいですか？」
うつむき加減だったところに、低く野太い声が降ってきた。首を上に動かすと、見たことのある、体躯のいい男がいた。
「貴様か。なんの用だ。任務でないかぎりは、貴様とはいたくないのだが」
「いや、これはお手厳しい。ガヌ中尉でなく、僕ですみませんね」
ノーザン＝ジャッジだった。笑顔なのだが、目が笑えていない。
「戯れ言を聞く気はない。何もないなら、さっさと帰って愛想笑いの練習でもするのだな」
「これは失礼。貴女に、雑談は必要ないですか」
嫌み混じりに突っぱねると、ノーザンはまったく気持ちのこもっていない謝罪を口にした。だが、表情は変えない。
「では、貴女に必要そうな話をしましょうか。サリア＝ミュルフのことです」

彼は、ハンバーグの定食をテーブルに置き、シルラの隣に腰かけてきた。シルラは不快感を覚えたものの、サリアの名前を出されたことの方が気になったので、文句は言わなかった。代わりに、
「あの子がどうした。話によっては、ここでお前の頭を撃ち抜く」
脅しに近い言葉を返した。
「心配には及びません。僕は別に、何をするわけでもないので」
だが、ノーザンはまったく堪えた様子を見せず、話を続ける。自然と、会話の音量が落ちていた。
「動くのは、軍王様ですよ。なんでも明日、第一議会所にあの子を連れて行って、“お披露目式”をするらしいですよ」
「“お披露目”？」
サリアの監視任務を請け負っているというのに、そんな情報を耳にしたのは初めてだった。ミッドハイムを、盲目的に崇拝している人間たちの集会かと予測する。
「ええ。出席するのは上層部の人間と、一部の部下たち、あとは研究者というところです。ですが、おそらく貴女一人混ざっても、招かれざる人間であるのは気づかれないと思います」
その予測は間違っていなかった。ただ、最後の部分に反応する。
「それは、私にもその“お披露目”とやらに出ろと言うことか」
「いいえ、そういうわけでは。ただ、誰か一人くらい増えても分からないだろうというだけのことです」
ノーザンはそんな答えを寄越したが、素直に聞き入れられるはずがなかった。
「まあ、僕も呼ばれているんですが、貴女がいたとしても気づかないでしょうね」
真意は捉えられなかったが、彼がシルラへお披露目へ来いと言っているのは明らかだった。ほぼ確実に、親切心以外の理由で。
「貴様、いったい何を考えている」
無駄だとは思いつつも、尋ねる。隣に座る男は、
「面白いことが見たいだけですよ、僕は」

と、今度は狂気を湛えた目をして、微笑んだ。
「ふん。まあいい。お前のことなど、理解したくもないからな」
手元にあった牛乳を飲み干し、シルラは立ち上がった。ノーザンに背を向ける。去り際に、
「ただし、貴様が私の大事なものを傷つけるつもりなら、容赦なく銃を抜く。覚えておけ」
そんな宣言をした。

（明日か）
昼食の後、シルラはデスクに戻って仕事を再会したものの、身が入らなかった。サリアの“お披露目”が、気になって仕方なかったのである。
（まだ、なにも策は立てられていない。無策では、どうしようもないだろう）
とはいえ、まだサリアを助けるための具体的な算段はまったくできていない。不本意ではあったが、今のところはノーザンの言葉に乗るしかなさそうだった。
（しかし、ノーザンは何を考えているのだ。あるいは、何も考えていないのかもしれないが、不気味なところだな）
そもそもシルラは、彼に対して大きな不信感を抱いていた。理屈ではなく、直感である。底の知れない悪意を、彼は有しているように思えた。
しかし、だからと言って、お披露目とやらに行かないという選択肢は選べなかった。軍王がいったい何をする気なのかも見逃せないのだ。
（明日は、相手の考えを知ることができるかもしれない。もしかしたら、サリアを別の場所へ連れて行かれてしまうかもしれないが、移されても首都の中だろう。多少のリスクを考慮しても、お披露目

は甘んじて受け入れるしかないか）

とりあえずは様子見に回ることにする。今日のうちに、いたいけな少女を解放することはできなさそうだった。

（とにかく、後でサリアに頼んでカリク＝シェードに呼びかけてみるか。本当に来ているのなら、接触を図りたい。罠だと思われるかもしれないが）

カリクのことに考えが至ったところで、シルラはあることが考えついた。

「ニック＝シェードがいるではないか」

思わず、つぶやく。ある策が、頭に浮かんだのである。

（サリアを連れ出すこと自体は、軍王本人に会わないかぎり、任務の一環と偽れる。あとは、首都から逃げ出せばいい。それから、まずはニケアに行ってニック＝シェードと接触する。そのまま馬鹿正直にニケアに留まったり、キュールに行かなければ、サリアを逃がしきれるかもしれない）

これだと、シルラは直感する。カリクと接触できるか試してからにはなるが、案そのものに問題はなさそうだった。実行すれば、確実に軍には戻れなくなるが、問題ではない。

ただ、ある人物のことが心にかかった。

（せめて、ガヌには居てほしい）

軍には友人も多くいるが、サリアを助けるためにはやむを得ないかとも思えた。しかし、ガヌだけは切り捨てられそうになかった。

「ちっ。こんなところで、奴が障害になるとはな」

自身の内心を理解しつつも、悪態をつく。特別が、足枷だった。

（あいつは、私と来てくれるだろうか）

サリアのことから、ガヌのことへ気が移る。思い出すのは、わざと一線を越えさせない彼の態度。まるで、自身を戒めているかのような行動や言動が、多々あった。

（偉そうな決意をしておいて、私はあの子のために自分の願いすら犠牲にできないのか。滑稽なものだな）

自嘲の笑みを、ひそかに浮かべる。結局、自分が第一だった。
（あいつともう一度、会わなければ。そうでなければ、私はたぶん、ギリギリまでここから出られない）
「早く戻れ、ガヌ」
誰にも聞こえないよう、うつむきつつ、細心の注意を払ってつぶやく。声に出さずには、いられなかった。

「カリクが、この街に？」
「もしかしたら、着いているかもしれない。軍の施設に、昨日の晩、侵入した者がいて、噂だと中高生くらいの子供だったらしいのだ。ニック＝シェード少将の息子、ひいてはトルマ＝シェード殿の孫となれば、見張りが相手にならなかったのも、納得できる範囲だ」
終業時間よりも少し早い時刻にデスクを離れたシルラは、またサリアの元を訪れていた。他の人間は外に出しているため、部屋にいるのは二人だけだった。話題にしていたのは、カリクのことである。
「だから、サリア。彼に呼びかけてみてくれないか。私は彼と接触を図りたい」
少女の目を見て、頼む。揺れる瞳には、戸惑いと疑いが入り混じっていた。それを見て、言葉を足す。
「もちろん、貴女が私を信用できないのなら、無理強いはしない。もしかしたら、本当に罠かもしれないのだからな。だから、貴女次第だ。ただ、私からは信じてほしいとだけは伝えておく」
自分が、彼女を攫った張本人であることを踏まえての発言だった。今更になって助けたいなどと言うのが、とてもおこがましく、とても信じてもらえるものではないというのは承知している。しかし、気持ちは本物だった。ゆえに、想いが届かなければそれまでだという覚悟もあった。
「……正直」

黙り込んでいたサリアが、口を開く。監禁状態が続いているがための披露も、その声に垣間見える。だが、一言一言は、はっきりとしていた。

「軍人である貴女からそんな提案をされても、信じることはできません」

はっきりとした拒否。やはり駄目かと、シルラは潔くあきらめようと思ったが、サリアはそこでしゃべるのを止めなかった。

「でも、一人の人間としての貴女は、とっても信じたいです。たとえ、本当は罠だとしても、そうだとはっきりしないかぎりは貴女を信じたい。貴女は、とても優しい人だと思うから」

彼女が、穏やかに目を細める。優しさに満ち溢れた表情だった。

「貴女の提案に乗ります。一人の人間である、シルラさんとして言ってくれるのなら」

何もかもを包んでしまいそうな笑みを浮かべたまま、そう言われたシルラは、深くうなずいた。元より、目の前にいる少女への提案は、軍人としてのものではないのだ。ためらう必要がなかった。

「……ああ、このことは、一個人としてお願いする。カリク＝シェードに、呼びかけてくれ」

「分かりました。協力します」

サリアは、すぐに聞き入れてくれた。同じように、うなずいてくる。

「でも、うまくいくかどうかは分からないですよ。私の“声”が、どこまで届くのか試したこともないですし、伝わったかどうかも、相手が見えない状況だと、私は確かめられません。それでも、いいんですか」

「構わない。あくまで、手段の一つだ。もし伝わらなければ、それはそれで仕方がない」

すぐさま応えた。会えなければ、カリクのことは構想外にするだけだった。

「……そうですか。そしたら、カリクになんて伝えたらいいかを教

えてください。“力”に乗せて、発信してみます」
シルラの力強い口調に引っ張られてか、サリアの声にも力がこもっていた。
「すまないな。感謝する。本当なら、貴女の手は煩わせずに助け出せればよいのだが」
「気にしないでください。結局、私は私のためになることをするだけですから。それよりも……」
優しい表情が崩れ、眉が下がり、不安を帯びる。シルラは、何事かと少女を見つめる。
「シルラさんは、大丈夫なんですか？」
「私……？」
予期せぬ言葉だった。
「軍人なのに、私を逃がそうとしたりして平気なんですか？」
「ああ、そういうことか」
疑念からではなく、純粋に心配してくれていると感じ、シルラはできるだけ気楽に答える。
「気にしなくていい。そろそろ転職しようと思っていたところなのでな」
「シルラさん……」
しかし、少女の顔色はよくならない。さらに、問いかけられる。
「ガヌさんのことも、いいんですか？」
心を抉られたような衝撃を覚えた。冷静さが一気に飛んでいきそうになる。必死に、つなぎ止めた。
「……いい。奴よりも、今は貴女だ」
「でも」
反論しようとするサリアを、右手の掌を出して制した。
「自分のことを考えろ。私のことは、二の次でいい。ガヌのこともな」
「シルラさん……」
「カリク＝シェードに、伝えてくれ。今日の深夜十二時、本部基地

入り口からしばらく直進した場所にある公園の入り口に居るようにと」

本音を言わずに、すべきことをする。いざという時ガヌとサリアのどちらを取るか、シルラ自身もまだ分かってはいなかったが。

十一章『交差する意志』

首都にやって来てから二日目の夜。カリクは、深夜に決行する、本部基地への潜入に備え、レインと共に宿で休んでいた。レインはベッドに身体を預けていて、カリクは部屋の端にある机で銃の手入れをしていた。

“声”が飛び込んできたのは、そんなときだった。

『カリク。首都にいるなら、今から言うことを聞いてて』

「サリア？」

反応は早かった。幼なじみの声に、うつむけていた顔を上げる。

「……どうかしたの、カリク君。急に、サリアちゃんの名前なんて口に出して」

突然、声を発したので、レインが訝しげな表情を向けてきた。彼には、サリアの声が届いていないようだった。

「“オモイノチカラ”だ。あいつの声が聞こえた」

「本当か？　俺っちはなんにも聞こえないけど」

「お前には呼びかけてないからだろ」

首を横に傾けるレインへそれだけ返し、サリアの呼びかけに集中しようと自分の内側に気を向ける。彼女の声が、心に響く。

『私を助けようとしてくれている軍人さんがいるの。きっとカリクにも協力してくれると思う。だから、今日の深夜十二時に、本部基地の正面から真っ直ぐいった場所にある公園へ来て』

呼びかけの中身に、カリクは眉をひそめる。優しすぎるサリアの性格を考えると、疑いたくはないが、罠の可能性が頭に浮かんだ。

『でも、カリクが罠だと思うなら来なくてもいい。けど、私はその軍人さんを信じてるから、カリクにも信じてほしい』

しかし、続けてきた言葉で、決心をつけた。彼女がそこまで言うのなら、信じてみようと思ったのである。それに、もし本当に協力してくれるのならば、逃すのはもったいない。

『何回か、繰り返すね』
そう前置きがあり、同じ内容が数回繰り返された。少しでも、こっちに届く可能性を増やしたいのだろうとカリクは踏んだ。
最後の繰り返しが終わると、“声”はそこで聞こえなくなった。待ってみても、もう何も響いてこない。カリクは、意識を自分の内面から外に戻す。
「行くところができた。一旦、本部基地への乗り込みは見送る」
「はあ？」
唐突な計画変更に、レインが素っ頓狂な声を上げた。
「サリアから、協力者の存在を知らされた。向こうがこっちと会いたがってるそうだ」
「協力者って、それ軍の奴だろ？　サリアちゃん、脅されて言わされたんじゃないか？」
「いや、脅迫はない。サリアの“力での声”の内容は、発信された相手にしか分からないから、サリアは伝えたと偽れる。罠なら、はっきりと俺に罠だって言うだろう」
レインが抱いた疑惑を否定する。サリアの“力”なら、強要されたものとまったく違う言葉を発信することが可能だった。
「そうなのか。でも、それなら、サリアちゃんが騙されてるってことはあるんじゃないか？　サリアちゃんが気づいていないだけで」
「それは確かにありえる」
今度は、肯定せざるをえなかった。ただ、それだけでは口を閉じない。
「だがサリアは、はっきりとその協力者を信じると言った。俺は、あいつを信じたい。それに、たとえ罠だったとしても、なんとか乗り切ってやる。本当に協力者だったのに、会わなかったなんてことになる方がもったいないしな」
その口調は、強かった。協力者を信じたサリアを、信じたのである。
「そりゃそうだけど、ドジを踏んだらそこで終わっちまうかもよ。

罠だったら、研究所にいた奴らと違って、油断も驕りもないだろうし」

しかしレインは、いい顔をしない。内情に明るいがために、余計に不安があるようだった。

「そのときはそのときだ。嫌だったら、お前はこなくていい。協力も無理強いしない」

それでも、カリクの決心は揺るがなかった。レインが、あきらめからため息をつく。

「まったく、強情だね、カリク君は。乗った船を、途中で降りたりはしないっての。最後まで協力するよ。俺っちには、俺っちの目的もあるし」

目的については初耳だったが、カリクは深く問いただしたりはしなかった。代わりに、

「正直、助かる。悪いな、レイン」

お礼を口にした。レインが、目を丸くして固まる。

「なんだよ、その反応」

カリクが指摘すると、レインは頭をかきながら、答えた。

「いや、カリク君からこんな素直に感謝されるとは思ってなかったから」

その言葉を聞き、カリクはしばらく記憶を探った。至った結論を口にする。

「確かに、まともに礼を言った覚えはないな。まあ、別に俺だって普通に感謝の言葉ぐらい言うさ」

レインは納得いかなさげに、眉を寄せていたが、無視する。

「とにかく、十二時に言われた場所に行くぞ。戦闘の準備も一応しておけ」

「あいよー」

レインが、返事とともに手元でナイフを一回転させる。カリクは軽くうなずき、自分の銃へ目を落とした。そういえばと、ふと思う。

（人に対しては撃ったが、命を奪ったことはないな。この先、もし

かしたら……）

頭によぎる、『迷うなよ』というレインの言葉。人殺しにならないといけない瞬間が、訪れるかもしれない。そのとき、自分ならどうするか、確固たる意志で思う。

（サリアのためなら、迷わない。容赦なく、引き金を引く。たとえ、命を奪うことになっても）

少女のための、決心だった。

深夜十二時。昨晩と同じように、宿を抜け出したカリクとレインは、指定された公園へとやってきていた。

軍事都市とはいえ、公園は平凡なものだった。草木が外周を覆い、端にはブランコや砂場、中央にはすべり台がある。今は深夜のため、本来ここを使うべき子供の姿はない。

巡回している兵士に見つからないように、二人は木々の影に隠れていた。

「さて、来るかね？」

「向こうが本当に協力者ならな」

「……怖い言い方するね、カリク君」

内緒話の音量で言葉を交わしていると、公園の入り口に、人影が現れた。

「……あれか？」

「あれだろうな」

首を動かして周囲を見回している姿を見て、カリクは確信した。いつでも銃を抜けるように手を添えながら、その人影の後ろへと回り込む。レインには、前から行くように指示した。

「サリアの協力者か？」

二人で挟んだところで、声をかけた。人影は二人ともを見れるように、身体を横向きにした。カリクの目に、金髪のポニーテールが

映る。真一文字に結ばれた硬い表情に、見覚えがあった。
「な、お前は……」
サリアを攫った張本人の一人である、女軍人だった。カリクの姿を認めると、彼女は両手を上げた。
「カリク＝シェード。言いたいことは山ほどあるだろうが、この場は怒りを抑えてくれ。時間がもったいないのでな」
語り口は淡々としていた。生真面目な印象を受ける。
「……カリク君、知り合い？」
反対側にいるレインが口を挟んできた。
「ああ。こいつは、キュールでサリアを攫った二人組のうちの片方だ」
「ああ、なるほど」
カリクの返答に、一旦納得した様子を見せてから、
「えっ！？　そいつが、なんでサリアちゃんの協力者に！？」
そこに気づいて声を上げた。カリクと女軍人が揃って注意する。
「「静かにしろ」」
「あ、はい……」
レインは素直に謝った。
「……でも、お前の言うとおりだ。あんた、なんでサリアの逃亡に協力しようとしている？　軍人なら、ミッドハイムのやることには絶対服従のはずだろ」
彼の意見に同意を示し、カリクが尋ねる。敵であり、そもそもサリアを首都へと連れてきた人間が協力者を名乗るというのは、違和感を覚えざるを得ない。
その問いに、女軍人はやや間を空けてから答える。
「あの子を、サリアを助けたいと思ったからだ。それ以上でもそれ以下でもない。これだけで納得してくれとは言わないがな」
語調は強く、目つきは鋭い。冗談ではなさそうだった。
「ずいぶん、利己的な軍人なことだ。あんた、それでよく軍に居れたな」

罠ではないとほぼ確信しながらも、あえて嫌味を放る。
「ちょっ、カリク。あんまり刺激しない方がいいんじゃないか？」
女軍人よりも先に、レインが動揺を見せた。それに対し、当の本人は顔色一つ変えない。
「私が軍人になったのは、“護る”ためなのでな。けっして、女の子を攫うためではない。それだけのことだ」
ブレはなかった。彼女の信念において、軍人であることは、したいことをする方法の一つでしかないのだろう。
（真に仕えるは、自分ってわけか）
心が、共感する。カリクの考えそのものだった。
「なるほど。サリアが信じるわけだ。いや、サリアじゃなくても、信じるだろうな」
「それは、褒めているのか？」
「ああ。そう受け取ってもらっていい」
女軍人の問いかけに、カリクは躊躇なくそう返した。すると、彼女は少し頬を緩めた。
「面白いな、君は。実に、はっきりしていて。私の知り合いにも、その誠実さを見習ってほしいものだ」
「いや、カリク君は誠実っていうより、馬鹿正直だと思うぜ」
軽口を叩いたレインに、カリクは同じような調子で反撃する。
「お前はただの馬鹿だけどな」
「……さすがに酷いぜ、カリク君」
元気が激減した声を聞くに、わりとショックを受けたらしかった。
そちらは放っておいて、女軍人に向き直る。
「で、あんたはなんで俺たちと接触しようと思ったんだ」
さっそく本題へ触れる。何か、策があってのことなのか、それとも別の意図があるのか。
「待て。その前に、確認しておきたいことがある」
しかし、彼女は回答の前に問いを寄越してきた。
「こっちの少年は、何者だ」

レインを指差す。彼女は、彼のことを知らなかった。
「俺っちは……」
「そいつは、レインだ。知らないかもしれないが、この国の秘密機関で人体実験と軍人教育をされていたそうだ」
話し出そうとしたところを遮り、カリクが情報を伝える。レインが眉を潜めたが、気に留めない。
「レイン……？」
女軍人が反応を示したのは、名前だった。
「一つ訊きたいんだが、ガヌ＝ロードという奴に心当たりはないか」
カリクの聞いたことの名前だった。しかし、レインは違ったようで、
「あいつのことを知ってるのか！？」
異常な食いつきを見せた。
「あ、ああ。一緒に任務に当たっていたからな」
反応の強さに、訊いた女軍人もやや引き気味になる。
「そいつ、今どこにいるんだ」
今までになく、レインは必死な様子だった。宿で言っていた、“目的”という単語が頭をよぎる。
「ガヌなら、今は任務で首都から離れている。どこに行っているのか、私は知らない」
「いないのか……。悪いね、ありがとさん」
戸惑いながらも、女軍人は情報を出した。それを耳にして、レインが落ち着きを取り戻す。
やり取りを見ていたカリクが、疑問をぶつけた。
「そのガヌとかいう奴とは、どういう仲なんだ？」
「……知り合いだよ。ちょっとした」
「とても、ちょっとしたって表現で足りるような感じには思えないけどな」
「……それ以上は無粋だぜ、カリク君」
どうやら、話す気がないようだった。相手を女軍人に変え、別の

話題に切り替える。
「そういえば、あんたの名前をまだ聞いてなかったな。なんていうんだ？」
「そうだったな。私としたことが、失礼なことをした。私はシルラ＝マルノルフ。軍での階級は中尉だ」
「シルラか。率直に訊こう。どうして、俺たちに接触してきた。何か、サリアを助ける策があってのことか」
名前を聞くと、元の路線に戻った。カリクとしては、何よりも優先すべきはサリアだった。
「策があることにはある。ただ、私に拠るところの大きい作戦だ。一人でも実行はできるのだが、君らには先に会っておきたかった。サリアを逃がせるのに、本部基地で騒ぎを起こされては面倒だからな」
続けてシルラは、自身の作戦を話し出した。掻い摘むと、任務と偽って、サリアを伴って首都から逃げるというものだった。
「なるほどな。確かに、一時的にはうまくいくかもしれない」
カリクが感想を口にする。わざわざ一時的にと加えたのは、意図があった。
「だが、ミッドハイムはどんな手を使ってでもサリアを取り戻そうとするだろうな。あいつや俺の家族や、周囲の人間を巻き込むくらいは、容易にやってのける」
シルラは否定してこなかった。彼女も、その考えを持っていたのだろう。
「……確かに、そのとおりだ。だが、まずは目下の危機を脱するべきだろう。対策を立てる時間は作れる」
付け足しを聞いても、カリクは納得できなかった。サリアは、自分のために他人が傷つくのを嫌がるだろう。カリクに対しても、助けてくれるという信頼と、傷ついてほしくはないという感情がない交ぜになっているだろう。そうなると、他の人間を巻き込むわけにはない。

「そうか。助けるだけじゃない。ここで、終わらせないといけないのか」

そこで、カリクは気づいた。本当の意味でサリアを助けるには、ただ基地から連れ帰るだけでは、不十分だと。

「あー……。だいたい想像つくけど、なに考えてるの、カリク君」

レインは頬をかいた。おそらく、彼の予測に反さないであろう回答を、カリクは伝える。

「分かってるんだろ？　ミッドハイムをなんとかしないかぎり、サリアは狙われ続ける。一旦首都から出たくらいじゃ、安息には程遠い。なら、ここで片を付けた方が効率的だ」

正論であり、結論であり、無謀であった。レインが、引きつった笑いを見せる。

「……やっぱり、カリク君はおっそろしいね。間違ったことは、言っちゃいないけどさ」

「本気か、カリク＝シェード。たとえ、武術や銃撃に秀でた中将クラスが二人がかりで戦っても、勝ちを拾えないであろう相手だぞ。勇気と蛮勇は違う。考え直した方がいい」

軍王の力を知るシルラがら、反論が飛んできた。声はやや音程の高い、驚きを含んだものになっている。その止め方は、必死だった。

「さっき、貴方は自分で言ったばかりだろう。サリアのためにも、貴方は死んではならない。たとえ結果として彼女を助け出せても、貴方が生きていなければ、彼女にとってはなんの意味もないのだぞ」

だが、カリクは折れない。

「誰が、死んでも助け出すなんて言った。言ってないだろ。軍王だろうがなんだろうが、サリアを残して俺が死ぬかよ」

自信を持って言い切る。まったく根拠はない。そこにあるのは、ただただ強い意志。敵の強大さも何も、関係はなかった。

すると、シルラが声を荒げた。

「……自惚れるなよ、カリク＝シェード！」

深夜であることを無視した音量だった。レインが思わず、彼女の

いる方向の耳を片手で塞いだ。
「思い出して見ろ。キュールで、貴様はサリアを護れなかったではないか！　そんな弱者が、軍王を相手にして死なずに帰るだと？　寝言は寝て言え！　貴様にまだそんな力はないだろうが！」
　シルラの顔がカリクを威圧するかのように、近づいてきた。だが、カリクは引き下がることなく、目を真っ直ぐに見返す。
「ああ。確かに、俺に力はない。ミッドハイムの足下にも及ばないだろう。でもな、そこであきらめられないんだよ。俺は、あいつのために今まで何もしてやれなかった。しかも、俺の勝手な理由で。だから、できることは全部やらないといけないんだ、俺は」
　その芯にあるのは、サリアだった。すべては、彼女のためなのである。
「お前の事情など知るか！」
　しかし、カリクの想いが詰まった言葉を、シルラは一言で切り捨てた。
「根は確かにあの子のためだろうが、現実を見違えるな。貴様は、死なない意志も持っているだろうし、それは確かに力に成りうる。だが、軍王はそれだけでなんとかなるほど甘い相手ではない」
　威勢良く話していたカリクすら、雰囲気に圧されて口を噤むほどの剣幕だった。
「最上の結果を焦るな、カリク＝シェード。ここから逃げても、サリアは追われる。自分を護る人間が傷つくことで、あの子は苦しむ。それでも、今後、軍王をどうにかできれば幸せを運べるはずだ。だが、ここで貴様が感情だけで軍王に挑んで、死んだりしてみろ。それだけで、あの子は間違いなく不幸になる。そうしないためにも、貴様はまず冷静になれ」
　さっきまで、負けん気から迫られてもひるんでいなかったカリクだが、今は腰が引けていた。目だけは逸らしていないが、気圧されているのは明らかだった。。
　さらに、レインからも諭される。

「そうだぜ、カリク君。軍王に挑むのは、さすがに無謀すぎるぜ。ジーニアスにいたときに聞いたんだが、けっこう軍王に不満を持っている奴は多いみたいだし、奴と戦うのは、戦力が整ってからでもいいんじゃないか？」

「けど」

「けども、しかしもない。貴様はサリアを助けたい一心で思考が暴走している。頭を冷やすのだな」

カリクの反論は、シルラに遮られた。

「準備が整ったら、さっき話した計画を実行に移す。サリアを連れ出して車に乗せたら、あの子から貴様らに連絡させるから、勝手なマネはするな」

さらに、釘を刺される。カリクは顔を歪めた。

（一回、どこかに逃げおおせたところで、サリアに安全はこないじゃないか……）

目の前の女軍人の意見が真っ当なのは、重々承知していた。それでも、心が納得しないのだ。サリアをただ逃がすだけではなく、自分の身も、周りの人間のことも心配しなくていい、そんな日常に戻してやりたい。そのうえで、“力”のせいで孤独に近かった彼女を、今度は一人にしない。勝手な理由で、距離を置いてしまったが、今はその愚かさを知っている。

「まあ、カリク君は俺っちがなんとかするよ。サリアちゃんのことは、あんたに任せる」

釈然としない想いを抱えたカリクを置き去りに、レインがフォローを入れる。もう文句は言わない。言っても、無駄だろうから。

（何か、何か対抗策はないのか。強大な力を持つミッドハイムに、太刀打ちできる方法は）

答えに、至らない。そもそも、答えがあるのかどうかも怪しかった。

「ああ、頼む。私も最善を尽くそう」

悩む間にも、会話が進んでいく。反論の芽は見つけられない。

「では、私はこれで失礼する。一応、家の場所は伝えておこう。ただ、余程のことがないかぎりは訪ねてくるな。軍の宿舎なのでな」
シルラがカバンから手帳とペンを出し、メモを書くとそのページを破った。レインの手へ渡す。
「ほいほい。いただいておくぜ」
彼は、軽い口調とともに受け取った。直後、
「そういえば、さっき話したガヌって奴も、ここに住んでるのか？」
声色をかなり低くして、尋ねた。今までになく、真剣な様子で。
「……いや。私のは女性用のところで、男は少し離れた別の宿舎で生活している。ガヌもそこだ。だが、さっきも言ったように、今は任務でいないぞ」
「いつ帰ってくる？」
さらに、レインは詰め寄った。シルラが、ややのけぞりながらも返答する。
「分からない。どこに行ったかをまず知らないのでな。だが、一週間はかからない内には戻ると思うぞ」
「一週間、か。分かった。あんがとさん」
前のめりをやめ、レインは礼を言った。シルラは訝しげな表情をしつつも、「どういたしまして」と受ける。
「とにかく、だ。一旦は私に任せろ。必ず助け出す。今日のところはお別れだ」
最後にそう言い残すと、シルラは二人に背を向けて公園の出口へと歩き出した。振り返ってきたりすることはなく、そのまま暗闇へと消えていった。
「じゃあ、俺っちたちも宿に戻ろうぜ。今の感じじゃあ、あの人に任せるしかなさそうだ」
「……そうだな。納得いかないが」
結局、最後までカリクは筋の通った反論も妙案も出すことができず、シルラの計画に乗っかるしかなかった。

だが、カリクたちはまだ知らない。強力な助っ人たちが近づいていることを。

きっかけはガヌ＝ロード、率いるはニック＝シェード。東部軍の一部が、首都に向かって最速で進軍してきていたのである。明日の夜前には、首都に到着できそうなほどだった。

着々と、舞台は整いつつあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1004x/

オモイノチカラ

2011年12月7日08時55分発行